

の肥後人藤三郎なる者が、近く郷土の空を目睫の間に望んで、久し振に親戚故舊と再會が出来ると喜び勇んで居た甲斐もなく、空しく又異域に引返さねば成らなかつた深刻な絶望的悲哀の情を、一管の筆に托して、血のにじむやうな通信を、支那船舶に托して故郷の父兄に訴へて来た夫れが當時の長崎奉行柳生伊勢守久包の手から、幕府に送られたのが、直接の動機に成つたものであつて、其書柬には、

「我々は皆、一日も一刻も早く母國へ歸つて、懐しい故郷の風光と、親戚故舊の温情とに抱擁されたいと希つて居る。それなのに砲臺からの殿しい砲撃で、上陸する事が出来ない爲め、我々は又空しく引返す外はなかつた。それで、皆深い絶望の淵に落ちて、中には悲痛の極頭を剃りこぼつて了つた者すらある」

と云ふ意味の事が、拙い文句乍ら、人を感動させる眞剣さで書かれて居た。

そして唯だ一通の此の書信が、老中等の案上に持出されると、急遽老中會議が催されて、水野越前守忠邦を首座に、土井大炊頭(利位)堀田備中守正篤、幸田信濃守幸貫等が、各其所信を主張した。

此の會議のあつたのは、例のモリソン號が浦賀に來た天保八年から四年の後、此の一件に原因して華山長英等が罰せられた天保十年から二年の後に當る天保十二年の事であつたが、此時土井、堀田、等の二老中は、相變らず攘夷論を主張して、

「文政八年の異船打拂令は、我國の方針として飽く迄之を嚴守すべきである。僅に一片の書柬に動かされて、モリソン號の入港を許したら、それを口實にして其他の異船も盛に出て來るであらう。これは一切拒斥の方針を採るに限る」

と口を揃へて消極論を主張したに反して、唯眞田信濃守一人だけは、  
「漂流民を護送して來ると云ふことは、其動機の善悪は兎も角、其行爲自體としては確に博愛の行爲である。然るに其船を妄に砲撃して寄附けないといふのは、條理にも反して居るし、其心中の悲惨同情に餘ある我が漂流民等を、空しく怨を呑んで異域に死なしめると云ふのも餘りに不仁である。これは原則に對する例外として、速かに我國に來らしめて、彼等の求める薪水を給與し、皇國の襟度を知らしめる態度に出たが可い」



と云ふ意味の事を主張して、互に自説を持して兩々相降らなかつた。そこで結局兩案を供へて將軍の裁決を求めた所が、將軍家慶は眞田信濃守の唱へた少數意見を採つた。そこで廟議は忽ち一決して、文政八年の異船打拂令即ち、

「外國船舶が若し我が津港に近き至つた時には、容赦無く之を砲撃して嚴に上陸を禁止しろ。それでも若し肯かずに上陸したら斷然之を生擒又は殺戮して差問はない」と云ふ命令は此時を以て取消されて効力を失ひ、文化四年の舊令が新に又復活して、「外船が來たらば穩かな態度で應對して、若し海難其他の爲め食糧薪水等の缺乏を訴へたらそれを給與した上、我國法が外國との通商貿易を許さない旨を諭告して歸國させろ。それでも若し肯かないで暴行を働いたら斷然擊攘しろ」

と云ふ條件附の打拂令が行はれる事と成つた。これが水野越州豹變の第一原因であるが、然も幕府の閣議が斯う云ふ決定を見た裏面には、當時支那に迫つて之を僭伏せしめつゝあつた西力の強威が、老中等の胸に或る脅迫觀念を與へて居た事は、決して看過すべからざる隱約の事實であつて、水野越前守の眞實の意向は、斯くして漸次内外

からする色々の刺戟の爲に、新しい地歩を進めて行つた。

殊に自分を除いた他の閣僚や三奉行目附等の間に、激烈な反對論があつたのを無視して迄、密々蘭船に命じて外國製の器械若くは其雛型、造船學並に歐洲式戰術書類等を輸入せしめた行動に至つては、實に變化の甚だしいものであつて、彼は斯うして其の政治方針の上に歐化主義の新傾向を探るやうに成ると、從來互に相提携して、同一強硬政策即ち攘夷政策を採つて居た水戸齊昭侯との關係を新に打破して、爾來氷炭相容れざる中と成つた。そして此の兩者の關係打破こそは、即ち天下に尊王攘夷論者と佐幕論者との二分派を生じ、其間に激烈なる血闘を行はせた第一原因であつた。

水戸齊昭侯の單純なる尊王攘夷論が、遂に反幕府的の傾向を採つて、水藩に對する密勅の降下と成り、次いで侯に對する幕府の壓迫と成り、轉じてそれが櫻田門外井伊大老要撃の一幕と成つて、白雪を鮮血に染めるに至つたのも、實に其最初の出發點を、此の水藩對水野の對抗關係に置いて居るのであつて、斯う云ふ點から靜に維新の改革



といふことを考へて來ると、實に津々として盡きない微妙の味ひがあるのである。

元來水野越前守は、水戸齊昭侯の勢力を後援として、初めて彼の事業を爲得たのであつて、松平定信の大改革も水藩の尻押が無かつたら到底成功しなかつたのと同じく、假令水野が如何に智略があり、如何に沈摯の質であつたとしても、其後に齊昭と云ふ人が無かつたら、到底あれ丈の敏腕を振ふ事は出来なかつたのである。然るに彼は其改革事業が着々進行して、自己の幕閣に於ける權勢が、何者の力を以てしても動かされないやうに成ると、一朝にして其主義を變更して、水戸齊昭侯敬遠策を採り、

「水戸殿御領中土地方改正も行届かず、且御住居向焼失後普請も出来申さざるに付、當年中御在所の御願の通り仰付けられ候ふ處、土地改正並に文武の儀骨折り御世話有之る旨御配慮の儀と思召し候ふに付、別段の譯を以て五六ヶ年御在邑成され、御世話在之られ候ふ様仰出ださる」

と云ふ口實の下に、實は之を水戸に蟄居せしめた。亂暴も亦是に至つて極まれりであつて、彼は斯くして自己の思ふ儘に幕政を行はうとしたのであらうが、支柱たる齊昭

を失つて、彼の勢力が獨立し得る筈は無く、忽ち反對派の包圍にあつて四面楚歌の裡に烏江の慘敗を見るに至つたのは笑止千萬であつた。

### (二十三) 時世の逆轉 (保守的勢力の擡頭)

水野越前守の失脚！ これは實に幕政を進歩的傾向から保守的傾向に再び逆轉せしめたものであつた。

彼が天保十四年「御勝手向不行届」といふ理由で、其椅子から蹴落されると、總てに於て無理解な壓迫政治は、越前守の反對派たる土井大炊頭(利位)に依て行はれて、越前守の政治に直接間接關係のあつた者は、親藩諸侯の嫌なく彈劾を被つた。

殊に土井大炊頭は、水野越前守の閣僚であつただけに、彼の施政の裏面にはどう云ふ勢力が動いて居たかと云ふ事を委しく承知して居たので、彼は幕府の政權が自己の手に移ると共に、當然其眼を水戸の齊昭侯に着けた。

元來越前守が失脚した原因は何かと云ふと、餘りに軍備を充實するに急な爲め、



極度まで府庫の金を其方へ注入し、又妄に質素生活を國民に強ひて産業の發達を妨げ、遂に其結果は凶歳に當つて府庫の收入不足を生じた。といふのが其本である、そして夫れは水戸齊昭侯の旨を承けて、適當な限度を越えて迄妄に文武を獎勵することに傾いたからである。然も其齊昭侯の文武獎勵は、畢竟尊王攘夷主義の爲で、現に水藩では其爲に弘道館と云ふ學校まで建て、尊王攘夷主義を獎勵して居る。齊昭侯がさうした主義を唱へられるのは、どういふ意思から出た事かは知らぬが、或は自藩の勢力を強盛にせんが爲し、攘夷に名を藉つて居られる疑ひが無いでもない。假令水藩ではさう云ふ意思が無いとしても、其れを見やう見真似して、薩州、兩肥州、長州、仙臺等の列強諸藩が行つて居る事は、確に藩力の充實が其主目的である。それに又、尊王と云ふ事も頗る異様に聞こえる。斯う云ふ主義を苟くも親藩たる水戸で唱へられると云ふ事は、甚だ怪しからぬ次第で、野心ある諸侯をして之に名を藉つて異謀を逞しうせしめないとも限らぬ。これは今の中に、何とか水藩を懲らして置かなければ成らぬ。と斯う云ふのが、其時に土井大炊頭の頭に起つた考へで、即ち彼は其方寸に隨つて、

其就任の翌年即ち天保十五年

「水戸中納言殿御家政向、近年御氣隨の趣き相聞こえ、且御驕慢に募らせられ、却て御一己の御了簡を御制度に觸れられ候事共有之り候。御三家方は國持大名の模範たる可き所、御遠慮も在之られず候始末、御不興の事に思召され候、之に依つて御隠居仰せ出だされ、駒込屋敷へ御住居、穩便に急度御慎み在之らる可く、御家督の儀は鶴千代鷹殿へ仰出ださる」

と、云ふ嚴令を突然水藩に發すると共に、居常齊昭侯の側近に在つて獻策してゐた側用人藤田虎之助も、齊昭侯をして其行を誤らしめた不埒の行爲あるものとして、其官職剝奪の上蟄居を命ぜられた。

此の藤田虎之助こそは、即ち後に至つて西郷南洲、有村俊齋、勝海舟等を其門下に有するに至つた有名な藤田東湖であつて、尊王論は由來水藩の傳統的主義であるとは言へ、齊昭侯に至つて一層其色彩が濃厚且鮮明と成つたのは、全く彼東湖が其懷刀として、之を激勵したからであつた。



東湖の勤王論は、實に其父治郎左衛門から直接の系統を引いてゐる。彼の父は十五歳の時に於て早く既に熱心な勤王論者として知られたものであつて、其時松平定信侯からの徵命に應じて、幕府に呈示した『正名論』には、實に堂々たる態度で尊王の大義が説いてある。僅十五歳と云ふ少年時代から、既にさう云ふ思想を抱いて居たのであるから、年の長ずるに及んで、其把持する勤王主義の達成に益々其力を致したのは當然の事であつて、其思想は寛政の勤王論者高山彦九郎蒲生君平の二人者と親交を結ぶに及んで、更に一層熱烈の度を加へた。

さう云ふ勤王家の子として生れた東湖が、齊昭の側用人たるに及んで、齊昭を熱烈な勤王論者たらしめたのは當然の事であつて、曩に竹内式部、山縣大貳に發し、高山彦九郎、蒲生君平等に傳はつて之に攘夷といふ新分子を加へた尊王論は、彼れ東湖に至つて、水戸齊昭と云ふ大きな勢力を背景に、漸く着手實行の範域に足を踏入れたのであつた。

然も彼の此の尊王攘夷主義實行運動が、突如として下された土井大炊頭の手によつ

て、齊昭侯の活動力を剝がれ、同時に又東湖自身の活動力を阻止せられた爲め、少からず阻礙せられたのは言ふ迄も無い事であつて、同時に又、水藩が其尊王攘夷主義の爲に懲罰を受けたといふ事は、徳川の親族中に齊昭あつたが故に多少の緩和を見つゝあつた所謂公武の間を、再び救ふ可からざる危険に導くものであつた。

公武の融和といふ事は、随分古くから唱へられた事であつて、代々の將軍の中でも綱吉と吉宗とは、殊に其點に力を注いで或は荒廢した山陵を修築し、宮廷の諸式典を復古し、皇室費を増加し、新井白石の如きも、皇帝の下の國王と云ふ意味に於て幕府の外交書類に王號を用ゐる等、あらゆる點に於て皇室尊崇の誠意を示すことに力を盡したのであつたが、曾て新内裡新造營の事に依つて大いに其忠誠を宮中に認められ、公武融和の理想は、彼の如き賢明な宰相を待つて初めて實行せられるであらうと多大の望を一般から囑せられて居た松平定信公が、意外にも幕府の私的事情の下に、當時の主上光格天皇が御親父閑院宮典仁親王に太上天皇の御尊號を御宣下遊ばされんとするのを峻拒し奉つた爲め、形勢は俄に逆轉して、公武の間には到底踰渡るべからざ



る大溝壑が穿たれた。それを漸次又融和に導いて、兩者の間の溝壑を細めつゝあつたのが水藩で、前にも言つた通り、實際水藩あるが故に公武の大衝突を支へてゐたのであるのに、それが斯う云ふ事に成つたのであるから、勤王論者は悉く皆幕府の意向が尊王攘夷主義排斥にあることを観取して、漸く結束を固め、幕府に對する反對は、次を逐うて隠約の間に益々育まれ培はれた。

## (二十四) 浦賀の警鐘と烽火

斯う云ふ風で國內的に尊王攘夷論者と之を壓迫せんとする幕府の勢力とが互に争はれつゝある時に當つて、國外から我國の上に加へられたものは、來つて開國を強要せんとする歐洲諸強國の壓迫力であつた。

これまでも露英米諸國の船舶が、或は暴力を以て脅かし、或は漂流民送還に名を藉つて、通商貿易を要求するが爲に來た事は屢々あつたが、然も夫等は夫等は大抵勢力の微々たるものであつて、國家の名を以て堂々と艦隊を率ゐて來迫した事は未だ曾て無かつた

が、此頃からして漸く、其傾向が見えて來た。

此の艦隊來朝の魁を爲したものは、弘化三年の六月二十日、米國東印度艦隊司令官ビッドルに率ゐられて浦賀に入港した米國軍艦ビッドル、コロンブスの二隻であつて、此時は幕府の對外方針が例のモリソン號事件以來稍緩和されて、外船は見附次第之を砲撃すると云ふやうな亂暴な態度は、流石にもう採らなく成つて居たが、然も強烈な恐怖から生ずる殺氣は、沿海衛戍兵の頭腦に強い刺戟を與へて居た時であつたら、是より先弘化二年に我が漂流民を送つて浦賀に來た米國捕鯨船メルカトルの如きは、入港せんとするに當つて數百艘の番船に包圍せられ、武装を解除された上、漸く薪水の補給を得て這々の體で歸つた程の有様であつた。

ビッドル麾下の艦隊が、浦賀沖に到着したのは、恰もさう言ふ時であつたから、浦賀守備の警備軍では、夫れを見ると急ち一小吏と通譯とを乗せた小舟を遣つて來意を問はしめた上、我國よりの答辯を與ふるまでの間、彼の艦隊を一定の指示投錨地に着かしめ、且つ其四周を忍・川越・彦根・會津諸藩等の兵船を以て嚴重に包圍して、武装



の解除を要求し、結局通商拒絶の旨を傳へて之を還らしめた。

斯くして彼の第一來航艦隊は、開國促進の序開きを了して、其使命を果し得ず  
に空しく引上げたが、次いで嘉永二年の三月二十五日、提督グリーンに依つて率ゐられ  
て長崎に來たブレブル號は、稍強硬の態度を以て我に迫り、我が指定場所に投錨する  
ことを拒絶し、兵船を以て故無く四周を包圍することに向つて異議を主張し、其態度  
には少からず米國の威力を示さんとする風があつた。

此の米國の示威的意志が、最も具體的に現はれたものは所謂彼の我が日本開國促進  
の曉鐘であつたと云ふ彼理の來朝であつて、嘉永六年六月三日、浦賀灣頭に未だ曾て  
見も知らなかつた蒸汽力利用の大艦が、雄姿堂々と黒煙を吐いて進み寄るのを見た我  
が國人は、一見膽を銷して、只茫然として其爲す所を見守つて居た。

此時來朝した米國艦隊は、シユスクエハンナを旗艦に、ミシシッピイ、ブライマウ  
ス、サラトガの四艦であつたが、夫等の各艦は相州城ヶ島砲臺の前面に近いた頃から  
豫め皆戰鬪準備を整へて、砲門を開き、彈丸を裝填し、兵員を各其部署に就かしめ

若し我が砲臺守備兵にして兵力を以て其入津を拒むやうな態度が見えたら、一戦の下  
に砲臺を沈黙せしめて、入港の目的を達せんとする覺悟の下に、從來諸國の艦船が曾  
て採つた事のない示威的態度を採つて、其航進を續けて來た。

今まで曾て見た事も無い堂々たる威風に加ふるに、其人も無げなる振舞！ 夫れを  
見ると、此方面の守備に當つて居た四藩兵の陣地は、一齊にざわめいたが、忽ち例の  
來意の尋問の爲に派せられた小舟は、浦賀奉行戸田伊豆守麾下の與力中島三郎助等を  
乗せて、旗艦間近く漕ぎ進んだ。そして其中から三郎助一人だけが上船して、彼の一  
士官と會見した後、其來意を尋ねたが、其士官は、自分等は米國から適式の國命を受  
けて來朝した者であることを告げて、提督ペルリは大統領から貴國の將軍に宛てた國  
書を持つて居るから、其複本を受取る爲に早速貴國の主要官吏を來艦せしめられ度い  
と云ふ申出をした。そして夫れと同時に我國から申込んだ禁止的條項、例へば指定の  
碇泊場所の外碇泊を禁ずるとか、或は長崎に廻航して同港で我が報答を待つやうにと  
云ふやうな事を片端から一切峻拒した、兵船の四周を包圍する事も前に長崎へ漂民を



送致して来たグリーン提督の前例に倣つて嚴重に排斥した。

斯うした總ての態度が悉く高壓的で、輒もすれば、兵力を用ゐても其來朝の目的を達せんとする勢を示して居る事は、少からず我が邊防當局を恐慌せしめた。

浦賀奉行は、實に今度の軍艦ばかりは容易ならぬ軍艦だと思つて、急遽飛報を江戸幕府に送ると共に、其夜は殆ど徹夜の姿で、警備の諸兵等と共に必死に成つて萬一の危急に備へてゐたが、夜が明けると、更に浦賀奉行の名を僭せしめて與力香山榮左衛門を提督の旗艦に送つた。そして我が國法上飽く迄も此の浦賀に於ては國書を受領することが出来ない事、速かに長崎に去つて同所で改めて交渉せられ度いと云ふ事を提督に通せしめたが、米艦は頑乎として其要求を拒絶した上、若し貴官等に於て言を左右に托して正式に我が國書を受領する手續を探られないならば、我等は斷然實力を以て上陸を強行し、來朝の使命を全うする外は無いと、云ふ事を主張して、泰然自若として動かなかつた。

斯う成ると、一步は一步と彼に乗せられるばかりで、當初は非常な意氣込で、是非

共彼に退去を迫るつもりで最後の談判をしに行つた榮左衛門も、江戸政府の訓令を仰いで改めて返答するから五日間猶豫して貰ひ度いと云ふ口實で、一先づ引上げて來るより外は無くなつた。

陸上では、多少の望を懸けて居た其最後の交渉までが強硬に拒絶されたと聞くと、一同此上どういふ形勢の轉變を見るかも知れないと、大いに戒愼して、各其部署に就いた諸藩の警備隊の空氣は、俄然として極度の緊張を見た。

形勢の危急を報ずる警鐘は、あらゆる所で烈しく亂打されて、夜に成ると豫て要所に設備されてあつた烽火は、屢々夜暗の空を劈いて飛龍の姿を現した。そして沖では夫れに對抗するやうに、轟き互る米艦の空砲の響！ 戦端は今にも開かれるかと思ふばかり、總ての形勢が迫つて居た。

## (二十五) 國難來逼

浦賀奉行からの飛報が達した時の江戸の騒ぎは、浦賀の騒ぎよりも甚だしいもので



あつた。米艦の容易ならぬ行動が、一報は一報と詳細に報せられる毎に、江戸の官民は、如何して可いかと云ふ當面の策を知らないで恐懼した。

勿論これが例のモリソン號事件以前ならば、一議にも及ばず米艦打拂を實行したかも知れなかつたのであるが、此時はもう對外主義が著るしく變更して居たと共に、幕閣の主腦者も變つて居た。

否單にそればかりでは無い。外に於ては又、極東の形勢が恐ろしく變つて居た。其中でも所謂唇齒輔車の關係に在つた隣國の支那が、有名な鴉片戰爭即ち英清戰爭の餘を受けて、第一に先づ恐ろしく變つて居た。天保十四年以後の我が近海は、此の戰爭の結果として動いた各國の東洋艦隊が、所在に遊戈して居る時分、迂濶下手な事を行ると、或は支那の轍を覆むかも知れないと云ふ虞が充分にあつた。此時の支那は、現に戰爭に負けた上に西力の強烈な壓迫の下に五箇市の開港を餘儀無くされて居る。それが目前の事實だけに、少からず我國の脅威だつた。

閣老等の頭腦には此前弘化元年の七月に和蘭國王ウイールヘム二世から將軍に宛て、

送致された警告書の中に、

「近頃英清戰爭の結果として、支那は慘憺たる戰敗の苦を嘗めた上に五港の開放を餘儀無くされた。さうして歐洲諸國は皆、人口の過剰に苦んで、其捌口を求めざるに東洋に新勢力範圍を物色し、新利權を獲得せんとする事に血眼に成つてゐる。支那の事が結了したら其次には順序として或は日本へ手が廻るかも知れないから、貴國は此際餘程細心の用意をせられる事が必要である。聞く所に依ると、貴國は既に異船打拂令を撤廢されたと云ふ事であるが、これは非常に時宜に適した處置で、今日各國の艦艇が盛に東洋に遊戈して居る際、些少の争鬭の爲に國難を招くやうな事は貴國の爲に採らざる所である。陽に信義を装うて陰に異志を遂げんとする者は兎に角、一概に外船と見次第之を攻撃すると云ふやうな態度は、貴國を不測の笑禍から免れしめる爲には、どうしても採つては成らぬものである。鎖國は貴國の祖法だと聞いたが、然し世界に國してゐる以上は、世界の太勢を閑却しては成らぬ。今や歐洲では日本の文化四年に蒸汽船の發明があつて以來、國際交通が盛に行はれて有



無相通する爲の貿易が、何れの國でも行はれてゐる。然るに獨貴國のみが其大勢を無視して鎖國を保守されると云ふ事は貴國の爲に採らない。弊邦は幸に二百年前から貴國と親交の間柄であるから、敢て此事を忠告する』  
と書いてあつた事が、鮮かに記憶の中からマザマザと蘇つて來た。そして夫れが又新たな脅威を添へる種に成つた。

彼等は和蘭から二度目に來た忠告書に、近々米國から通商を要求する爲に行くだらうが、貴國の態度如何に依つては必ずしも米國は平和的手段ばかりを採つては居まい事態は極めて重大である。と云ふ事を警告してあつた文句も思ひ出した。

當時の幕府内閣は、第二回水野内閣——即ち土井大炊頭の間内閣が外交の難局に當ることを得ない爲紛擾した後を受けて水野越前守が再び閣老の職に就いた時の第二水野内閣が、金改役後藤三右衛門に關する瀆職事件の餘波を受けて再び崩壊した其後を襲うて組織された阿部伊勢守正弘の内閣であつたが、浦賀奉行から形勢の極めて重大な事を報告して、今迄に種々應對を重ねて、當方で拒絶し得るだけの拒絶をしたが

米艦は尻を落附けて動かない。此上は彼の國書を受領するか、然らざれば斷然之を拒絶するかの外は無いが、若し拒斥したが長期浦賀は彼の砲火に破壊される外はないと言ふ事を書いた急迫な手紙を見ると、閣老阿部伊勢守は閣僚の牧野備前守と額を鳩めて密議した上、幕閣内に救急會議を開いて、當面の策を議した。

然し降つて湧いたやうな此の出來事の前には、誰一人として適當な救急の良策を知つて居る者は無かつた。そして皆が米艦が進んで江戸灣内に侵入し來る事を恐れた。若しさう云ふ事に成つたら、言ふ迄もなく海上權は彼に制せられて了つて、江戸が封鎖された形に成る事は定つて居る。江戸が封鎖されたとすると、其結果は言はずと知れた物資の杜絶で、江戸の市民は勿論江戸からの移入を待つて居る各地方の住民は飢餓に陥つて、戰爭に敗ぬしない前に、先づ空腹の爲に死んで了ふ。それを避けようとするにはどうしても米艦に對して戰鬥を誘致する事を避けるやうにすることが必要である。と、これ丈の事は誰の胸にも先づ浮かんで來る考へだつた。

然し果してどうすれば、我國の體面をも國威をも損せず、米艦との戰爭を避ける



ことが出来るだらうか。と成ると、それは非常な大問題で、限られた僅少の期間内に絶對的の良好な對策を考へつくといふ事は難かしかつた。長崎へ廻航せしめる事が出来れば、先づ當面の安を偷む事は出来るが、それはもう既に浦賀奉行の手で再三試みて失敗して了つてゐる。それを今更又幕府の手で反覆して見た所で効の無いのは知れ断つた事で、そんな事をして居る隙に形勢は益々切迫するばかりだ。それで結局戰爭を避ける爲には、残念乍ら一時先づ彼の要求通り江戸から特使を派遣して、相當の儀禮の下に其國書を受取つて、他日を期して返答するといふ事にして、一時退去させた上、徐ろに最後の對策を決する外はあるまい、徒らに祖法を株守して、輕々しく之を拒絶するといふ事は、一時的快心の擧に過ぎない、と斯う云ふ當面糊塗策が自然多數を占めた。

然しそれは米國が平和の裡に萬事を解決する意思で來て居る場合の事で、若し彼の眞意が通商貿易の要求に托して、我國に挑戰する爲に來たとすれば、我國に於ても斷然之に應戰して、叶はぬ迄も彼の江戸灣進入を阻止せねば成らぬと云ふので、一方

は其準備の爲に取敢ず井伊家並に松平肥後守、松平誠丸、松平下總守の三家に動員令を與へて海岸守備に當らしめ、更に又、徳島、熊本、福井、萩、高松、姫路、柳川、諸藩に秘密命令を與へて、内海の防備を嚴にせしめた。

然し阿部伊勢守は、閣議で然う決定したものゝ、それだけでは如何もまだ其責任上不安な感じが退かなかつたので、閣議の決定を見た六月五日の晩に、急いで一書を裁して水戸齊昭侯の意見を聞いた。

これが齊昭侯即ち水戸烈公の、再び又政界に出頭するに至つた重大原因だつた。

### (二十六) 水戸派勢力の擡頭

こゝで少し阿部伊勢守と水戸齊昭侯との關係を述べて置く必要がある。

元來此の阿部伊勢守は、保守派の勢力を後援として幕閣の首班と成つたものであつたが、彼は同じ保守派でも明敏な頭腦を持つて居るだけに、土井大炊頭などの施政方針とは全然違つて、有力な諸侯間に偉大な人望のある水藩を無視しては、到底天下を



制することが出来ない所以を深く了解して居た。それで水野越前守が、其第一次内閣の時に採つた政策を踏襲して、保守派と齊昭侯との兩勢力の間に介在して巧に調節を採りつつ徐ろに自己の政策を行ふといふ伶俐な方針を採つた。

彼の此の政策は彼がまだ第二次水野内閣の閣僚だつた時分から着手せられて、冤罪の爲に蟄居を命ぜられてゐる齊昭侯を先づ駒込の幽棲から救出す事に初まつたが、然も、それが見事に成功した。これが實に弘化元年十一月で、表面では水戸藩士の高橋多一郎と云ふ者が大奥女流の勢力家姉小路に請托した結果だといふ事に成つてゐるが其の内面に於ては伊勢守の盡力が大に與つて力があつたのであつて、彼の此義侠的態度が其藩侯の爲に身を犠牲にして運動してゐた水藩の有力者並に水藩に同情して幕閣の處置を憤慨しつゝ、あつた列強諸藩に好感を興へた事は、實に多大なものであつた。

さう云ふ次第であつたから、齊昭が再び世に出てからは、伊勢守と齊昭との關係は段々近接して行つて、齊昭は、殆ど阿部内閣の外交顧問と云つても可いやうな地位に

あつたが、然も其裏面に將軍の内旨が動いて居たのは無論であつた。即ち此意味に於て阿部伊勢守の外交は、弘化以來水戸齊昭の外交であつたと云つても過言で無いのであつたが、然も今回の米艦一件は、問題が重大であるだけに、齊昭侯の意見が其儘國政に現れると云ふ事は、即ち水藩勢力の再勃興を示すものであつた。

然も流石の齊昭侯を以てしても、此の事件に面しては、策の出づる所を知らなかつた。そして伊勢守からの來書にも、

「自分は曾て斯ういふ事もあらうかと思つて、我が國防上の二大缺陷とも云ふべき大艦と大砲とを造る事の急務であることを建白して、今は昔と時勢も違ふのであるから大船建造の解禁をするがよい、と云ふ事を度々注意したにも拘らず、當局の者が夫れを實行しないから斯ういふ難局に立つ事に成つた。今と成つては乃公に聞かなくても急に良い方法は出て來ない。勿論此際之を擊攘するといふ事は、最後の勝利に對する充分の確信が無い以上出來る事でないから、我輩とても輕々しく之を主張しないが、然彼の威力に恐れて妄に退縮するやうな事があつては成らぬ。彼の國書



と云ふのを實見しない以上、其内容は固より分らないが、彼の利益を圖り我に不利を強要するものである事だけは疑ひがない。だから眼前の安を偷まんが爲に、彼の提示する條件強要に應ずるやうな事があつては成らぬ。貪婪飽くなき外夷の前に一步を退いて見せる事は、彼等を増長せしめて、更に又十歩の退嬰を要求せしめる本であるのみならず、國內に於ても如何云ふ變亂を激成するかも知れない」と言ふ意味の書状を折返して送つて遣つたが、これで見ると 彼の意見の前提には、矢張り「國書は受取る」と云ふ意味の事が含まれて居た。

然しこれは固より取敢ずの手紙で、齊昭の意見の全部で無い事は勿論であつた。侯は此の伊勢寺への返書を書いて了ふと、直ぐ寢所へ入つたが、彼は一國の大事が眼前に横はつて居ると思ふと、どんなに眼を瞑らうと思つて苦心しても、激しい昂奮を感じて如何しても眠れなかつた。東湖の激烈な攘夷説も道理であるが、祖法を株守して勝利の見込の無いのに戦争を挑發するやうな態度は、此際軽々しく採ることは出来ぬ。然し實際どう考へても此際國威を損せず、又、挑戰的強硬態度にも出ないで、

然も平和の裡に萬事を解決する妥協的の良手段としては、彼の國書を受取る外はあるまい。然し其受取方には餘程注意せねば成らぬ。一寸した事で他日恢復のつかないやうな下手を演じては、國辱の上に國辱を重ねるものである。これは迂濶伊勢守位の者に此大局を任せては置けない。とさう思ふと、彼はもう一刻も躊躇して居られないやうな氣がして、ガバツと跳起きると、

「誰そあるか」

と次の間へ聲を掛けた。

そして眼の前の襖があいて、靜に扈從の少年が入つて來たのを見ると、

「おう、梅之丞か、急いで料紙硯を持って。そして燈火を近う」

と命令けた。

小姓が唯々として退いて、命せられた總ての準備を終ると、彼は床の上に靜に起直つて筆を把つた。そして差出された料紙の上に、サラサラと達筆に、

「先程あのやうに、言つて遣つたが、最初に事を誤つては、後患を千歳に貽すもので



あるから、若し將軍からの御命令とあらば、何時でも登城して諸君の意見も聴かうし自分の所懐を陳じて可い』  
と云ふ意味の事を書いた。

其前には短檠の灯が、淡く夢のやうに瞬いてゐた。侯はそれを封じて了ふと、小姓の方へ眼を遣つて、

『もう、何時であらうのう』  
と聞いた。そして小姓が端然と畏つて、

『先程啼きましたのが、二番雞かと存じます。もう程無う夜が明けるでござりませう』

と答へると、

『如何にも明け易い夏の夜ちやで、さもあらう。それでは直ぐ夜の明けるのを待つて之を伊勢守の許へ届けさせい』

とさう命令けて、「ハッ」と委細を了承して小姓が立つて行つた跡を、何といふ事も

なくヂツと眺めて居た。

此時表の方では、曉に近い仄々した一道の白光が、闇黒の中を流れて、金星が氣味の悪い程強い光を放つて居る夜空の下に、御門の潜戸がギョツとあいて、侯の書狀を携へた使者は、伊勢守の邸へと馬を走らせた。

### (二七) 濁水の中の日本

噫！此時の日本！

此時の日本は實に恐ろしいドス黒い渦の中に突然投込まれて、躑き苦んでゐる日本だつた。

浦賀灣頭には悽愴の氣が立蔽うて、沖の方には浮城のやうな大艦が四隻、旗艦シユスクエハンナの大艦頭に、青色地に白く一つ星を染抜いた長旒を翻へして、イザと云はゞ砲撃を開始しようと云ふ恐ろしい意氣込で、砲門を皆此方へ開いて列んでゐる。陸上には我が警備兵が磨ぎ澄ました槍を篠薄の如く立並べて、殺氣を含んで要所要



所の陣地に控えて居る。

然も形勢はさうして息もつまるばかり強く緊張して居るのに、我が防備は、薄弱を極め、我が國策は定まらないで約束された回答の期限が眼前に近く迫つて來て居る。總てが皆危険を思はせる事實だつた。

江戸の市民等は、夫等の事を聞くにつけて、浦賀からもう今にも米艦が海を壓して江戸の直前に侵入して來るやうな氣がして、テンデに皆老幼を扶けて逃支度をして居ると、其間にも又、種々の情報がつて來て、それが悉く皆事實を誇張した流言蜚語的の性質を帯びてゐるものばかりなので、不安から不安に續く人心はもう極度の惑亂に達した。

噫何と云ふ見苦しい態であらう。これと云ふのも、國民に自覺が無く、國政の大局に當る政治家が徒らに私闘を事として、大勢の推移に豫め備へる施設もなく、一方には國防の充實を怠り、一方には外交の機宜を失し、社會風紀の弛廢を放任して、國民的元氣を鎮磨せしめた爲めであつて、去る大正十年三月二十六日、貴族院が其豫算

總會に於て滿場一致を以て可決した

「近來、國家の綱紀漸く弛廢し、外國威の伸暢を礙げ内民心の安定を缺き、射利私を圖り義勇奉公の氣節正に萎靡せんとす、國家の大患之に過ぐるものなく、洵に深憂に堪へざるものあり。政府は速かに適切なる方途に由り、時弊を匡正し、庶政を釐草し公正を主とし民心をして倦怠なからしめんことを望む」

と云ふ警告的決議は、論じ來つて餘りに抽象的に過ぎた憾はあるが、然も尙今日の時弊を指摘して適當なるものであると共に、此の決議は又直ちに之を移して維新前ベリ渡來の時の國狀を適切に道破したものと云ふべきである。

我輩は本書に於て、今日の日本と、維新前の日本とが相髣髴たることを前に屢述べたが、官民皆私闘の爲に國家の事を忘れて居た當時の我が國情は、實に恐ろしい程迄今日の有様に酷似して居るのであつて、會て幕末史を讀んで、當時の幕政に携はる者が、保守改革の二派に岐れて互に其勢力の消長を争ひ、他派を陥擠する爲には、屢々醜劣なる人身攻撃を敢てして、刑事々犯を摘發することを手段とし、其間には聞く



も忌まはしい秘密運動や、贈賄請託等の事が行はれ、其風は雄藩諸侯の間にまで蔓延して、腐臭世を蔽ひ、天下悉く私闘の爲に國家の大患を忘れて居た状態を其處に認めて、憤慨禁することを得なかつた我輩は、此頃の政治家の爲す所を見て、又實に極烈なる憤慨の念に堪へないのである。

代議士とは何であるか、大臣宰相とは何であるか、我等は最近の議會を中心に渦を卷いて起つた一々の出來事に面して、餘りに其腐爛の狀の甚だしいのに、面を背向ける外はない。

政府黨と野黨との醜い争ひ！天下の新聞紙は皆之を罵つて糞尿の掛合だと云つた。泥水の掛合だと云つた。彼等が互に他の汚臭を指彈し、嘲笑して居る其手は、其顔は悉く皆糞尿よりも泥水よりも、もつと汚い或る物に依つて汚れて居るではないか。彼等は畢竟敵黨員の人身攻撃を爲し、其刑事犯罪を摘抉し合ふ事を以て、國政を議する政治家の本務の全部だと心得て居るのである。

内閣の頻々たる交迭！彼等が、甲が出て乙が代つても、何の代り榮もない愚劣な

政治をするが爲に、泥水や糞尿の掛合までして、一所懸命血眼に成つて争つて居る間に爲さざる可からざる重要な國家的施設は曠廢に附せられ、國威は萎縮し、國民は徒らに加重する重税の下に壓迫せられつゝ、飢餓と絶望との爲に空しく死んで行くのである。

然も夫れを一國の選良と呼ばれる人々は、一人として眞面目に見向く者も無く、普通選舉案も文相食言問題も、只自己の利益の爲にのみ弄んで、議場へ出ては、徒らに梟の聲を眞似、鴉の聲を眞似、犬の聲を眞似て、それで一日の議事を終つてゐるのである。

我輩は議會開會當初からの議事を繰返して、彼等が何を爲したかを檢する時に、彼等が鴉、梟、犬の泣聲の外に眞に力ある何事をも爲さなかつたのを見て、尤然たる數千頁の記録が、何の意味もない廢紙に過ぎないことを認めた。噫！國家は、斯の如き何の意味も値もない廢紙を作る爲に、どういふ理由で數千圓の歳費を彼等に支給せねば成らぬのであらうか。



我等は敢て茲で現代の政治を論ずるのが目的ではないが、天下の大政黨が互に其醜劣な裏面を見せ合せて、深刻なる現實曝露の悲哀を國民に味はしめて居る政界の現状を見、一部の社會に磅礴たる險惡陰慘の氣流、不安の呻きを聞くにつけて、此末どう成る事かと思ふと、我が光榮ある歴史を持つた國家の前途の爲に、眠らんとしても眠ることの出来ない深憂に、屢々夜暗の胸を惱まされるのである。

大正十年三月十七日の時事新報には斯んな事が書いてあつた。

聖なる火

或時、或處に二人の男があつた。二人は其處の聖殿に不斷の聖火を獻つる役目を帯びて居た。

或日、一人の男が油を捧げて居るのを見て他の一人が恚う云つた。「おい、お前の右の手は不淨を掴んだ手だ。それで御燈火を上げるのは不敬だ。お前は退れ。」一人は肯かなかつた。

「黙つてろ、俺は不淨を掴んだことはないぞ。火は俺が焚く。」

「いや、お前は馬糞を拾つて菜園の肥料にした。それはお前が命じて、お前の右の手がしたことだ。お前は右の手を切るべきだ。強ひてお前が聖火を焚かうとするなら、私は恚う云うて叫ばう。彼の右の手は馬糞を掴みました。」

一人はそれを遮つて怒鳴つた。

「云ふな、お前こそ馬糞を掴んだ。お前は馬糞から出來た馬鈴薯を喰つた。お前の手が掴み、お前の口が喰つた。お前は聖殿で口を利く資格はないのだ。來い、お前が馬糞を拾つて來た證據を見せう。神よ、我々を裁いて下さい。」

二人は聖殿の裏手にある菜園へ唯み合ひながら出て行つた。聖殿の油は盡きんとして、そこには暗黒が來た。

.....

憲政會は云つた：：：政友會は滿鐵を強要して炭坑を買はした、汽船を買はした。それは不當の價格だ、彼等はその不當の利得から選舉費用を掴み出したのだ。恚くて衆議院では滿鐵問題が起つた。決議案が出た。裁判所へも訴へて出た。



政友會は云つた。……「人を責むるよりは己れを省みよ、加藤總裁は政治上許すべからざる非行がある。俺はそれを發かう、證據は歴然として俺の手中にある。」斯て公開狀となつた。十七日には決議案と、公開狀の證據發表とが、衆議院を混亂の中へ逐ひ込むのだ、議會は豚の如く汚穢と醜氣の中へ追ひ込まれるのだ。政治と云ふものは斯の如きもの政黨と云ふものは斯の如きもの、それでも憲政が發達するものなら、憲政と云ふものは何等の尊嚴も、何等の生命もない、偶像よりも劣つた、醜い、奇怪な、社會の暗黒を象徴する物の影に過ぎない。見よ、彼の一人は馬糞を拾つた、他の一人はそれを喰つた。彼等は其れに聖火を捧ぐべき資格を失つた。唯こゝに油を献つる資格のあるものは俺だ……。これは官僚系の云ふところだ。

……  
聖殿の火は消えんとして、呪はれたる暗黒が來た。火だ、美しい火だ、聖なる火だ、今、我々が切實に要するものはその火だ。

その火を捧ぐるものは誰乎。

噫！ 呪はれたる暗黒！ 今日の日には其暗黒を赫耀と照す權威ある光はないのだらうか。我輩は此の記事を見た時に、維新前の暗黒時代を思つて何と譬へやうも無い深刻な憂悶に沈んだが、然も此の記事が出て二三日経つか経たないかに、更に又我等の耳を驚かしたものは、米國新内閣が米國の全艦隊を太平洋に集中し、其絶大なる威力を以て極東に望まんとする事を頻に審議中であるといふ紐育トリビュン華盛頓特派員の報道であつた。ヤツブ島海底電線問題や、加州排日問題、其他薩哈噠問題等、米國と我が日本との間には緊争中に屬してゐる諸多の案件が横はつてゐる場合に、米國が斯う云ふ態度に出ようとする事は、如何に之を虚心平氣に見ても確に警戒に値する事實であつて、當時我輩は、此の新内閣の計畫が實行されるか、どうか其成行はまだ分らないとしても、若しこれが不幸にして實行されて、米國海軍の第一線艦の大部分を占めて居る三百餘の軍艦が太平洋上に其雄姿を競ふといふやうな事に成つたら、それが我國の國策にどういふ影響を及ぼすかと思ふと、慄然たらざるを得なかつたの



であるが、倫敦タイムスの通信員も亦、之に就いて其所見を陳べて、

「是は臨時の政策に非ずして、大に南米並に極東に活動せんとする永久的政策なりとす。即ち之に依りて、石井ランシング協約に見ゆる曖昧なる政策は其跡を斷つ可し。目下米國官邊にては、日本は亞細亞大陸に特種利益を有することを承認したる其結果は、日本の帝國主義を奨励し、支那の主權を弱むることゝなれりと思惟し居れり。従つて米國は其傳統政策たる支那の開放主義に復歸し、且つ之を實行せんとする意志なり。支那は近く日本に對し日支兩國間の各條約を廢止し、以て彼の『廿一箇條の要求』を葬らんとす可し。而して米國は必ず此の要求に對して大いに援助を與ふ可しと信ず可き理由あり。是れ日本に於ける自由分子の勢力、及び其誠意を試験す可き好資料たる可く、又若し支那の要求にして容られるれば自ら山東問題解決の途を開く可し。米國は山東問題に對しても亦支那を援助す可し云々。』

と、云ふ事を主張してゐたのを見て、更に又ペルリ來朝當時の事を追懷して、其状態近似の殆ど符節を合するが如き事に、只々驚歎を禁じ得なかつた。

噫！ どうして此の混亂の中から我が日本を救ふ事が出来るだらう。阿部伊勢守如きものに大局を任せては置けないといふ憂仲の念は、七十年前に獨り水戸の勤王藩主徳川齊昭の胸中にのみ起つたものでは無いのであつた。

### (二十八) 久里濱の國書受領

嘉永六年六月五日、此日は在府の浦賀奉行井戸石見守弘道が、浦賀に赴いて現地奉行戸田伊豆守と協議の上、當方から命令があり次第米使に接見して、國書を受領し、平和裡に萬事を解決して一日も早く米艦を歸航せしめるやうにと云ふ幕令を受けて江戸を出發した日であると同時に、伊豆守麾下の與力香山榮左衛門が、再び米艦を訪問して、我日本からは將軍を代表した高官が全權を帯びて来るから、國書と其複本とを共に交附しろと云ふ事を、豫め交渉する爲に行つた日であつた。が、夜が明けて六日に成ると、江戸在府の諸侯伯等には幕府から、

「今度浦賀表へ異船渡來に付、萬一内海へ乗入り候ふ義も斗り難く候ふ間、若し右



様の節は、芝邊より品川最寄に屋敷有之る面々、屋敷相堅め候ふ様急度相達し置かるべく候ふ。」

と、云ふ命令が出る。其晩には台命を奉じて閣老阿部伊勢守が駒込迄水戸の齊昭侯を訪ねに行つて諸有司の意見書を提示した上、齊昭侯の外交意見を聴取する。其又後が引續いての幕閣會議で、徹夜で血眼に成つて最終の決議をする。さうして夜が明けると、曩に沿岸防守の内命を下してあつた諸侯伯を、新部署に就かせて、大森羽田邊は萩侯の毛利大膳大夫に、本牧は熊本侯の細川越中守に、品川、御殿山、洲崎の海岸は福井侯の松平越前守に、芝高輪邊は姫路侯の酒井雅樂頭に、佃島鐵砲洲は徳島侯の松平阿波守、深川邊は柳川侯の立花左近將監、濱御殿は高松侯の松平讃岐守並に鐵砲方田村、井上の兩組に守備をさせる。江戸は只もう戦亂の巷と云つても可い位で、上を下への混雜は日を逐うて益々甚だしく成るばかりだつた。

所が、それが翌日の九日に成ると、更に又、

『異國船萬一乗入り 候 注進次第、八代洲河岸定火消役へ老中より相達し、同所に

て出火に紛れざる様、早半鐘鳴らし候ふ間、外九軒の火消屋敷にても是を相繼ぎ、同様早半鐘鳴らし申す可く候ふ故、相圖次第早々火事具着用登城、又は各持場々々へ急速相詰めらる可く候ふ。但し場末に至り打繼ぎ難き場所は、萬石以上火見櫓有之る屋敷々々にても同様早半鐘鳴らし申す可く候ふ。』

と云ふ布令が發せられて、警報のあり次第何時でも間に合ふやうにと云ふ意味で、夫の場所に町火消が配備せられたので、江戸の住民等は皆危険の急迫した事を直感して、容易に鎮靜の出来ない烈しい動搖に陥つた。

斯う成ると江戸の全市中は、恐怖に脅かされた修羅の巷で、首都の繁華を語る高級奢侈品は、もう誰一人として顧みる者も無い中に、必需品の米と武器ばかりは羽目を外した恐ろしい暴騰振を示して、間に合せの繕ひをした古馬具や古武器が、五倍十倍の高値で賣れて行つた。殆ど實戦の用には立たぬ繕ひ武器でさへ其有様であるから、信用のある店では、諸藩からの俄注文に應じ切れない爲、新に武器工を増募して、鐵砲鍛冶も、馬具屋も、鎧屋も、武器武器の急造に、汗を流して力を注いだ。中には、



今まで列べてあつた外の商品を悉く撤廢して、八百屋や肴屋の店頭、甲冑や刀槍陣羽織、小袴付、簑笠等を陳列して、不時の暴利を貪らうとした機敏な商人もあつた。

海岸寄の方へ行つて見ると、家財道具を持てるだけ持つて、昂奮した顔色をした立退の老若男女が右往左往にゴツタ返して居る中を、汗馬に鞭つて浦賀からの使者が飛んで来る。ドキドキした眼附で各藩の警備隊が大なる大砲を引いて其中を縫うて行く。其有様は實に見て居ても物凄しい許りで、然も其日が最後の回答期日たる九日であるだけに、誰も彼もが皆其交渉の結末がどう成るかを氣遣うて、そんな中でも皆如何かすると、浦賀の方の空ばかりを睥視めて、氣拔のやうに立つて居た。彼等は皆寄ると觸るとは、恐怖に満ちた蒼い顔をし乍ら、米艦の話をした。蒸氣船と云ふ物を我が國では未だ知らなかつた時代だから、

「黒船が觀音崎へ入つて來た時には、キリシタンの術で黒雲を起して、其中へ隠れて灣内に侵入したさうだ」

と云ふやうな突飛な話が、事實談のやうに傳へられて、科學的に無智な當時の女達

を慄へ上がる程恐れさせた。

噫！海面を見て居る不安な眼附！實際其時は誰もが皆、米艦の力を恐れると云

ふよりも、日本人の持得ない優秀な武器の力を恐れて居た。

然も國家を保護して、夷船が假令我が江戸灣内に進入して來ても、彼等に尺寸の地をも踏ませない爲に殊死して戦ふ筈の各藩警備隊の戰鬥力はどんなものであつたかと云ふと、彼等は只武備がある如に見せかけてただだつた。其武器と云ふのは大抵皆臨時に買集めた例の間に合せの急造武器やつくり武器ばかりで、平生からチャンとした武器の用意が整つて居た藩と云ふのは、水戸とか薩摩とか、さう云ふ武術熱心の雄藩のみに限られて居たから、防備軍の實力といふものは、實に問題に成らぬ程劣弱なものであつた。

中には大砲の準備が無いので、こればかりは急に、買入れる譯にも行かず、據どころなく松の立木を伐倒して、其皮を剥いで上へ墨を塗つた假裝砲を据付け、其傍に土を堅めて其上を銀紙貼にした假裝彈丸を澤山積重ねて威儀堂々と控えたり、寺院の梵



鐘を其儘擬砲に見立て、立派に砲臺へ飾立て、濟まして居た藩もあつたと云ふから驚いたもので、此時既に海岸近くの各藩邸では、面盆に飯と梅干、澤庵などを入れた辨當を、腰下げの網袋に入れて、さア町火消の早半鐘が鳴つたと來たら、立退の合圖に鐘太鼓を打つて廻つて、女子供を逃がして了はうといふ周到な逃支度まで調べて居たものが少くなかつた。

我が防備軍の頼むに足らぬことは、是等の醜い準備を見ても分るが、彼等は既に武器の用意すら出来てゐなかつた程であるから、況して其武器を使用する武術の鍛錬が出来て居なかつた事は勿論で、其騒ぎの最中に、俄に撃劍を習つたり、砲術の練習を初めた武士が多かつたと云ふのだから實に心細いとも何とも批評の語は無かつた。

そして其一方では、武家政治にはあるまじき祈禱騒ぎ！日光廟は勿論、芝増上寺日枝山王、神田明神等の各神社へは、俄に幕命とあつて世上静謐の祈禱をするやうにと云ふ事が令せられると云ふに至つては、もう苦々しいと云ふ所を通り越して、只々呆れ返る外は無いのだつた。

六月九日、相州久里濱に於ける井戸石見守、戸田伊豆守等の浦賀奉行と、米使ペルリ並にアダムスとの會見は、實に斯う云ふ心細い武力の後援の下に行はれた。

久里濱と云ふのは浦賀から少し西へ寄つた相模の海濱で、當日は其處に日本式の急造バラックが建てられて、其周圍には三葵紋章の附いた幔幕が張廻され、それより又少し離れて別に同様の幔幕を廻らした所には、銃劍と槍とを携へた約五千の兵士が屯集して變に備へ、幕府及び各藩各様の旌旗は折柄の海風に翩翩と翻へつて、威儀如何にも堂々たるものがあつた上に、別に又海上には、二百餘艘の小舟がこれ亦嚴然と武装した兵士を載せて、沿岸の警戒に當つて居た其壯烈な光景は、確に我が武を示すに足るものがあつたが、然も人知れぬ其後には、大きな空虚が隠されて居た。

やがて豫定の時間が近いて來ると、此日の朝突然其錨地を變更して、久里濱の直前自艦の銃砲射距離内まで近き寄つて居た二艘の敵船は、約三百名の正装した將士を小艇に移すと共に、殷々たる轟音を海波に響かせつゝ、十三發の祝砲を放つて、之を送つた。



彼等は前後して上陸すると、直ちに皆其部署に就いて、我が陣前に列序を正して並立し、最後に上陸する提督を待受けてゐたが、やがて上陸したペルリは、國書を入れた箱を奉じた二人の少年を先に、左右には護衛の黒人力士を随へ、三十餘名の部下と共に、自國兵の列立してゐる前を通過して、豫め設備された幔幕内の會見場に靜靜と進んだ。

彼等の列の最先頭には、僞稱浦賀奉行香山榮左衛門が、嚮導に立つて居たが、彼等の會見場内に入つたのを見ると、豫て香山榮左衛門をして、今回の全權委員等は單に國書授受の委任のみを受けた者で、それ以外の事は無權限であるから、一切國家意志を表現する何等の發言もしない旨を通せしめて置いた通り、一切無言で之を迎へて、只目禮を以て迎接の意を示した。

そして兩者共に定の席に着すると、我が通譯の口から日本の全權委員として伊豆の大守戸田、石見の大守井戸の名が、米使に通せられた。

それが済むと、次には又、彼等が携へ來つた奇麗な箱の中から漢蘭兩語の譯文を添

へた國書即ち米國大統領から我が將軍宛の書柬の外、別にペルリに對する信任狀、ペルリから將軍に呈する通告書等が嚴そかに取出されて、我が全權の前に致された。そして其次には又、井戸石見守から受取つた將軍の親書を、香山榮左衛門が奉じて、米使の前に捧げた。其將軍の書柬といふのは、別に蘭語譯を添へたもので、

亞米利加使節へ

御諭書

一、國王之書翰及び政府之副書共請取ぬ

國朝に捧べきとの義、此所は外國と應接の地に非ず、長崎に赴べき由、幾度諭といへども使命を恥しめ、一分難立と存きり、申立度趣、使節に於ては止を得ざる事なれ共、我

國法も又破り難く、此度は使節の苦勞を察し、曲て書翰を請取候得共、應接之地に非ざれば、應答の事に及ず候趣會得いたし、使命を全ふし、速に歸帆可有もの也



嘉永六年六月九日

と云ふのが、其内容だつた。

是等の書東が、約せられた如く一切無言で兩國全権の間に取交はされると、それで兩國の國家行爲は終つた。そして其次には、兩國の通譯の間に、餘事の應答が行はれて、彼が

「我等はこれから貴國を發して琉球廣東地方に向ふ豫定であるが、來春五六月の頃には再び引返して來るから、其時には必ず今日の要求に對する答を得たい」と云つたのに對して、我が通譯官が、

「其時にも矢張り今日同様四隻の船で來るか」

と云ふ事を尋ねると、彼は、

「いや、恐らくもつと多數の艦隊を率ゐて來るだらう」

と答へた。

斯うして兩國全權會見の無言劇が終ると、ペルリは靜に將軍の諭書を收めて、簡

單なる別辭の後に立去つた。我が兩奉行もそれを見ると、立つて靜に目禮を報いた。

僅々三十分間の簡單な會見！それで、六日の長い間幕府當局を困め、兩浦賀奉行

の壽命を縮めた國書受取の一幕は無事に濟んだ。

然し米艦は夫丈の事で、まだ我國民を脅威から解放しなかつた。

彼等は、翌十日に成ると、急遽出帆準備を整へて、鋭い一聲の汽笛を鳴らすと共に

彼等の揚言した如く琉球方面に向ふべく靜に船首の廻轉運動を開始して、浦賀灣頭を

離れんとしたが、不意に又方向を變へたと見ると、俄に深く江戸灣内に進入して、本

牧沖に其姿を現した。そして悠々と沿海の測量に従事した。

それと見ると驚いたのは、海岸警備の我が軍隊で、忽ち急報を幕府に致すと共に、

愈々もう日米戦争の勃發を豫期して、イザと云つたら餘儀なく戦端を開くつもりで、

幕閣からの最高命令を待つてゐた。

幕府では、もう「速に歸帆」したものと思つて居た米艦が、我が防禦配備をも眼

中に措かず、國際禮儀を無視して、江戸と目睫の間にある本牧沖まで進入して來たと



いふ事を聞くと、老中を始め若年寄、三奉行等は事態容易ならずと認めて、各自皆武装に身を固めつゝ、總員悉く登營し、夜を徹して之が防禦戰の準備に着手したが、米艦の此の江戸灣侵入は、固より何等の異志も有つたのではなく、只他日の事案解決に利するが爲、其回航に臨んで最後の脅威を試みたものであつたから、驚き騒いで海岸に群集する我が警備隊を尻目に見つゝ、翌十一日、再び其煙突から例の黒雲を捲起して、悠然として灣外に去つた。

我が官民等はそれを見ると、初めてホツと胸を撫でた、そして救はれたやうな心持で急いで海邊の警戒を解いた。殊にさう云ふ外交關係に無知識な市民等は、それでもう一切の事が結了して、再び脅かされる事のない太平の世を恢復したやうな心持に成つて、無性に慶び合つた。

## (二十九) 第二の蒙古來

然し固より、そんな事で、中々萬事が結了するものでは無かつた。只解決の時が來

春の回答期迄繰延べられただけで、和戰何れに決するかといふ重大な懸案は、ペルリの齎して來た國書と共に、強く幕府當局の胸を壓して居た。

彼の國書には何と書いてあるか？ といふ事、それは實に、幕閣の重臣等が、密かに皆、恐ろしい物でも見るやうな大きな危惧の念を以て見んと欲した所であつたが、然も彼等は之を披見するに及んで、其要求の豫期よりも遙に重大なのに驚いた。

先づ、大統領から將軍へ宛てられた書柬は、要するに「日米の兩國は海を隔て、近く相對する國であつて、若し蒸氣船を以てするならば僅少の時日で容易に交通し得る地理的關係にあるのだから、兩國はどうしても互に通交し通商すべき必要に置かれてゐる。それに兩國共に其物産は饒多であるから、若し此の兩國が互に通商關係に立つに於ては、其利益は共に莫大なるものである。貴國の祖法が互市を嚴禁してゐる事は我等の熟知する所であるが、今日は何時迄もそんな鎖國などといふ頑固な事を言つて居られる時世ではない。貴國は此際速かに之を解禁して、假令一時的にでも通商貿易の方途を開かれない。それから又、貴國近海で海難に遭つた弊邦の船、及び支那に往



來する我が商船に對して、薪水食糧の給與を得せしめる爲に、願くは貴國の南海に一港を開かれ度い」と云ふ事を穩かに書いたものであつて、其主張の強硬な割に頗る外交的修辭に富んだものであつたが、今一通のペルリから將軍宛の書柬は、露骨に脅嚇的の文字を用ゐたもので、

「貴國は從來海難に遭つて貴國の海港に救助を求めた我が艦船に對して、理不盡な迫害を屢々加へたが、これは實に國際正義の上から非難さるべき行爲である。本提督は今回只僅に四隻の小艦隊を引率して來たに過ぎないが、本國には更に之に數十層倍する大艦隊を有してゐる。だから次回に再び我艦隊が貴國を訪問する前に、充分世界の太勢を視て、豫め通商條約締結の準備をして置く方が、貴國の利益であらう」

と、云ふ事が頗る暴慢に書かれてゐた。

米國が特使を派して斯の如く我國に開港を要求するに至つたのは、我が近海に來つて捕鯨事業に従ふ自國の船舶を保護し、且又米清兩國間を往來する商船の仲繼港を得

せしめる爲め、是等諸船舶の炭水又は食糧補給所を我が海岸に求める必要を感じたのが其第一趣旨であるが、然も又それと同時に、我が國が貴金屬の産地として饒多の富を地下に埋藏してゐると云ふ事が、マルコボロ以來一種の傳説的觀念として外人の間に信せられて居る、夫れが一層彼れ米國の新利源開發慾を挑發して、彼をして自國の其欲望を達成する爲には、多少の恫喝的態度を用ゐても、日本の開國を強要せなければ成らぬと云ふ決心を強くせしむるに至つた事は争ふべからざる事實で、即ち此時米國が我國に向かつて採つた態度は、彼の元の侵略主義王忽必烈が、我が國に無盡藏の金産あることを聞いて、我に勸降使を發し、陽に通商貿易を勸誘して、自國の強大なる威力を誇示し、「兵を用ふるに至ると、夫れ孰れか好む所ぞ。王其れ之を圖れ」と云つたのと同様であつて、其暴慢無禮の態度は、之を讀終つた幕府當局をして、少からず強烈な刺戟を感せしめた。

「何を糞ッ」と云ふ憤慨の意氣が、流石に誰の胸にも起つた。假令彼れ米國が海上には如何に其暴力を誇つても、陸戦にかけては、到底彼れ等如き者に引を取る日本人



ではないと云ふ強い確信の下に、此際我國は何も開戦を忌避することはないと憤激して強硬論を主張する者もあつた。

然し責任のある立場に居る者は、暴虎馮河の勇とでも云ふか、兎に角さう云ふ無責任な放言をして一時の快を貪つて居る事は出来なかつた。實際何と云つても、彼の間には格段な戦闘力の差異があつた。戦ふ以上は、薄弱な武備を充實して、彼に負けないだけの大艦巨砲を備へてからでなければ、却つて我が國を危地に陥れる基であつた。伊勢守は充分にそれを知つて居た。

然も其國防の充實と云ふ事は、金があつて初めて出来る事であるのに、其金が幕府の府庫には缺乏してゐる。明春米艦が重ねて返答を聞きに来る時までには、彼に對抗する丈の武備を整へると云ふやうな事は、言ふ可くして行へない事である。それでは米國の言ふ儘に随つて、通商を許し開港を承諾すれば可いかといふと、此の方は開戦論程に壯烈でもなく、又屹度國內の大反對を招くに定まつてゐる態度である。殊に尊王攘夷論などと云ふ事を熱心に唱へてゐる者があつて、それが可なり民間に潜勢力を持

つて居る今日、迂濶な事をする、人心は直ちに幕府を離れて了ふ。——さう思ふと、伊勢守はどうすれば可いか分らなかつた。

寧ろ幕府々庫の空虚に近い事を可なり廣い範圍に訴へようか。さうすれば妥協の餘儀ない事を輿論も認めて、軟弱外交などと云ふ言は出まい。とも思つて見た。然しこれは只さう思つて見たと云ふだけで、幕府としての利害關係上、到底出来る事では無かつた。

彼は此のデレンマに陥つて、晝も夜も苦み續けたが、第一に考へたのは、此の場合どうしても我が國としては到底開港の外は無いと云ふ決定であつた。それから次に考へたのは、此の場合、尊王攘夷論者を利用して、彼等の手で和戦の決を採らしめるといふ事であつた。彼等とても猪勇に逸るものばかりではないから、結局責任の位置に立てば通好論を採る外がない事は定つてゐる。さうして彼等の責任で和好が出来る事に成れば、それで萬事が奇麗に解決する。と斯う云ふ目算が立つと、彼は初めて莞爾とした。



今までからが、伊勢守の高等政策は、尊王攘夷論者の大立者である水戸齊昭侯を自分の味方に引附けて置いて、一方では又頻に京都尊崇の實を擧げ、斯うして京都の御威光と、當時衆望の府であると云つても可い水戸藩の勢力を後援に、幕府の施政を行ふ事にあつたが、彼は今度の國難に面してからは、一層其方策を盛に用ゐて、一にも二にも、悉く齊昭の意見を聞いた。そして夫れと同時に、今まで幕府政治に對する京都の干渉を一切排斥して居た先例を急に破つて、愈々幕議で國書受理の事が決すると、直ぐ其當日たる九日に所司代脇坂淡路守まで其事を急飛脚で言つて遣つて、十三日に其書面が着くと直ぐ、主上に奏聞させた。

此事が幕府に對する尊王攘夷論者の反抗的態度を多少緩和した事は勿論であつた。斯うして置いて、和戦の決を尊王攘夷論者の水戸齊昭侯に採らせれば、誰も何とも云ふまいし、一つには又責任を少からず轉嫁することも出来る。斯う云ふ考へで、伊勢守は十四日に成ると、其腹心の部下川路左衛門尉聖謨、筒井肥前守政憲の二人を駒込の水戸家別邸へ遣つて、其多年の蘊蓄に基く外交政策を、此際教示せられんことを

求めさせた。

此時水戸老侯は、邸内に在つて廣々とした庭に面した廣間に端座しつゝ、心靜に史書を読んで居たが、スルリと襖の開く音がして、其處へ近侍の者が現れると、彼の前に手を支へて、

「ハッ、只今、川路左衛門尉、筒井肥前守の御兩名が、御城内から見えました」

「ナニ、川路と筒井が見えたか」

と、侯はさう聞いて書物から目を離したが、

「此處へ通せ」

と、改めて命令した。

近侍に導かれて來た二人が、侯の前へ出て來て、恭しく敬禮を終ると、

「隠居は昨日勢州殿から參つた手紙の返事を、まだ差出さずに居たが、どうぢや幕議の決定は？」

と、侯は靜に其答を促した。



二人はさう聞かれると、自分等がこれから言はうとした事の機先を折られたやうに「ハッ」と言つた儘、互に顔を見合はせたが、川路左衛門が先づズツと一膝乗出して、「其事に御座ります。有司の中には神后の御征韓、又た故秀吉の朝鮮征討、元寇撃退の古例を算へ上げて、我が日本は未だ曾て外夷と戦うて敗れた事は無い國柄ぢやで、何も米利堅の軍艦を恐れる事は無いと申した仁も御座りまするが……」

と云ひかけると、老侯は、

「ホウ、神風ぢやな。さう言へば、此間何とか云ふ落首を見たぞ。あゝさうぢや、さうぢや、神風は昔の事よ千早降る神や佛に俄追従」と云ふのぢや。」

と二人を茶化すやうな事を言つて、

「あゝ、それで結局は何とぢや。」

「其結局と申しますのは……」

と、流石の川路も、事柄が事柄だけに少からず言溢つたが、思ひ断つて、

「何を申すにも今日の武備不足の有様では、彼に對して屹度した處置を採ることも出

來かねまするで、徐ろに利害を計較致した結果、彼の求めまする通り交易を許さうかと云ふ事に内決定致しました」

と、言つて退けた。

すると、今まで幾らか穩やかに見えた齊昭老侯の顔は、俄に緊張して、

「フウム、それでは彼等夷狄の申す通りに成らうと申すのぢやな。キリシタンの教と交易とを振翳して、此の日の本を侵略せうとする夷狄の思ふ儘に成らうと云ふのぢやな。今其方は頻に武備の不足といふ事を申したが、其武備の不足は誰がした事ぢや。此の隠居が屢々國防の缺陷を患ひて、一日も早く銃砲を備へろ、大船を造れと申したのを、勢州は何と聞いて居られたのぢや。餘人は兎もあれ我等東照神君の裔を受けた身として、祖宗の嚴禁を背く事は相成らん」

と、云つた辭色は實に厲しいものであつた。

それと見ると、筒井肥前守が又、恐る恐る膝行出て、

「左様ござれば、何とか事に假托けて、返答を延ばし置きまして、充分に武備が整ひ



ました上、決然たる態度に出ますれば宜しいで御座りませうか」

と、反問したが、老侯は流石に夫れをスルリと躲して、

「イヤ必ずしも隠居は、如何爲いとは言はん。さう云ふ手段が成功するやうなら、それも結構ぢやが、些とそれは難かしからう。兎に角交易を許すか許すまいかと聞かれれば、予は許すことに不賛成ぢやと斯う断言するまでぢや」

と、さう言ひ断つて二人を返した。

此の返答は、伊勢守の意外とする所だつた。斯う成ると彼の計畫は根本から崩れてしまつたわけで、依然として難場の責任は自分一人にかゝつて居る。今まで自分の味方に立つて居た齊昭侯を、意見が違ふからと云つて反對の側に廻して了へば、假合目前の解決だけはそれでサツバリと附いても、後が大變だ。矢張どうしても老侯の勢力を無視してかゝる事は自分の地位として出来ぬ。福井侯の松平越前守も、現に齊昭侯の意見を尊重せよと云ふ事を姻戚として私に勧めて呉れた。それに自分とても開國が必ずしも我國永遠の利益だとは思はない、出来る事なら烈しい列國の競争場裡に此

の日本を立たせて、恐ろしい渦の中へ我から飛込むやうな眞似はしたくない。出来る事なら、此際外力の壓迫を排攘して、超然として日本独自の静な環境の中に安住して居たい。噫然し、それをするには、國防の充實、そして金……金だ、然も其金が無いのぢやないか、とさう思ふと彼の心は暗く成つた。

彼は二人の復命を聞終つて、それを退座させて了ふと、靜にチツと腕を組んで考へて居ると、其處へ顔色を變へて、息せきと出て來たのはお坊主で、

「只今上様御重態、急いで閣老を召しまする」

と、言終ると、急いで又周章と馳けるやうに引退つて行つた。

「將軍重態！」

と、聞くと、伊勢守は思はずハツとした。

此の大切の時に及んで、若し將軍が御大漸に成つたら……とさう思ふと、彼の胸は何かで斯う強く引緊められるやうに痛かつた。

將軍家慶には、其病態に影響することを恐れて、今度の米艦渡來の事を一切秘密に



してあつたのであるが、然し將軍は、いつの間にかそれを聞いて知つて居た。それで召に應じて伊勢守が其病室へ入つて行くと、將軍はそれを枕頭に近く招いて、「正弘、予はもう所詮助からぬ、それに就いて其方に申して置きたいのは外國の事ぢや。予が此様の重病に罹つて居ねば、又何とか其方達の意見と云ふのも聽いて處斷をするのぢやが、さうする事も得爲いで、國家の一大事を前に見乍ら、徒らに死んで行くのが氣懸かりぢや。予が亡い後は、家定殿はあの通りの病身ぢやで、萬事は水戸の前中納言に相談して、過のないやう取計らうて呉れい。頼み置くぞ」と力無げな聲でさう言はれたが、それだけの事を言つてしまふと、疲れたやうに又眼を閉ぢて、ウト／＼と昏睡に陥つた。

### (三十一) 英明鍊達の人齊昭

將軍の死が發表されたのは、米艦浦賀退去後十日の後に當る六月二十二日の事であつたが、伊勢守は、家慶將軍の遺命を思ふにつけても、如何しても此處で水戸の老侯

と聯合を保たなければ成らないとすれば、勢ひ攘夷と云ふ事は免れぬ所である。然し夫れかと云つて明春までに米艦を撃攘して戦闘を開始するだけの自信ある武力を備へることは到底出来ないから、歸結する所は一時開港を承諾するか、それで無ければ何とか口實を構へて回答を延ばして置いて、充分此方の戦備が整うた處で、機會を見て攘夷を決行する外はあるまい、と斯う云ふ事に決心した。

今でも残つて居る品川沖の砲臺を、其以前十八日の日に若年寄の本多越中守、勘定奉行の川路左衛門尉聖謨、目付の松本十郎兵衛、戸川中務少輔、代官の江川太郎左衛門英龍、大番頭の九鬼式部少輔隆喜等が房州半島並に武相二州の海岸を巡視して來た結果に徴して修築することにしたのは、實に此の時の事であつて、伊勢守は、幕府の方針未定の間にも、斯ういふ風に絶えず心を多方面に注いで、和戦兩様の準備を整へて居た。

家慶將軍の葬送の事が終ると、彼は急いで其遺命を奉じて、齊昭を駒込の隠栖から起す運動を始めた。侯を顧問の地位から責任ある地位に引張出さうとするのだ。これ



には「英明老熟天下此老侯を措いて他に大事を決する人はない」とまで、齊昭を崇敬して居た福井侯松平慶永の後援もあつた。「老侯の一言は舉世の人をして龜卜よりも深く信せしめる力がある」と推奨して居る川路左衛門尉と云ふ協力者もあつた。そして是等の人々が皆力を協せて、大手搦手から迫つて老侯を動かさうとした。其の結果は、無論齊昭侯が、政局の表面に立つ事と成つたが、伊勢守は又それと同時に、此の國家の一大事に就いて諸侯伯の精神的協力を求める方針を採つた。諸侯伯に國政を諮詢するといふ事は、實に此時初めて開かれた新例であつたが、彼等は皆七月一日例式登營の際に、米國から來た國書の譯文を示されて、それに就ての發言の機會を附與されると、争うて皆其藩論を取纏め、續々と提出に及んだ建議書の數が、數百通の多きを數へた。

十條五事の建言として知られてゐる水戸齊昭の意見書は、實に此の時に提出されたものであつたが、然も其他の諸侯伯は果してどう云ふ意見を持つて居たかと云ふと、其中で斷然開國を主張した者は、僅に彦根侯井伊掃部頭、浦賀奉行戸田伊豆守、儒者

古賀謹一郎、小普請勝麟太郎、砲術家高島秋帆、伊豆山代官江川太郎左衛門、仙臺の藩老大槻盤溪等の少數新知識のみであつて、其他の諸侯諸士の多數意見は、悉く皆攘夷論に一致してゐた。是等攘夷論の根底に横はつてゐる思想は區々であつて、一概に論ずることが出来ないが、就中最も多數を占めて居るものは「舊來の祖法を外夷の爲に變改すべきではない」と言ふ主張に基礎を置いたものであつた。此場合に之を輿論と云ふのは、聊か語弊があるが、兎に角天下の多數意見が斯う云ふ歸結を見たのは、「從來我が國に通商を求めて來た歐洲諸國船の態度が常に横暴を極めて、彼等は通商に名を藉つて我が國を侵掠せんとする志を持つて居るものである。よし又彼等に異志がないとしても、經驗上彼等蠻夷との交易は、彼にのみ利を與へるものであつて我より彼に與ふる者は生活の必需品であるに對して、彼より我に受くる者は奢侈品に屬する器玩織物の類に過ぎないから、我國にあつては一毫の利する所もない。さう云ふ不利益な事を彼から迫られて、輕々しく承諾するといふのは屈辱も甚だしい」といふ觀念が、我が國民の腦裡に古くから浸染して離れなかつたからであつて、中には「將



軍の職は、昔から征夷大將軍とも云つて、夷人を征するのが其本務である」と主張する者もあつたに至つては、聊か滑稽の感があつたが、然も天下輿論の傾向が實際此の通りであるとするれば、八面玲瓏主義の伊勢守としては、どうしても矢張最初の豫定通り、翌春ペルリが再び渡來して返答を促した時には、口實を設けて圓滑に謝絶し、交渉の遷延して居る間に充分武備を整へて、相當の防禦力が出来たら、人心の盛に昂奮して居る機會に乗じて、斷然戦闘を開始すると云ふ不確定な方針を採るより外に、別的手段は無かつた。

斯んな事に成つたと言ふのは、畢竟阿部伊勢守の政策の過ちであつて、今日から觀れば、彼が或は京都奏請の新例を開き、或は當時の衆望を鐘めてゐた名君齊昭侯の意見を徵し、或は諸侯に諮詢して、所謂萬機を公論に依つて決せうとしたのは、確に進歩した文明的の態度であつたに違ひないが、然も其結果は、責任内閣としての權威を失し、幕府の鼎の輕重を問はれるに至つた事が少くなかつた。

否、單にそればかりではない。彼が斯の如く衆議に諮るの方針を採つたのは、責任

の矢面に立つ事を回避せんとする意圖に出でたものであるが、斯の如く、何方附かすの國策を執るの止むを得ざるに至つた結果は、開國攘夷の兩論者から、不徹底なり、一微温的なりと云ふ非難を受ける其焦點に立つ事と成つて、遂に彼は優柔不斷なりとの罵倒を受けるに至つたのは勢ひの免れざる所であつた。

斯うした伊勢守の不人望を看て取つて、早くも臺閣覬覦の志を起したものは、新進氣鋭明敏な頭腦を持つて、密かに天下の形勢を觀望しつゝあつた彦根侯井伊掃部頭であつた。

彼は阿部伊勢守が島津家のお家騒動の犠牲に成つて四十過迄不遇の位置にあつた島津齊彬を、特に幕府から干渉して家督相續をさせた上、更に齊彬と謀つて藩の一家老島津豊後の娘を近衛公の姫君と云ふ事にして將軍夫人に爲ようとして居る事も知つて居た。駒込の塾居生活から不平不遇の水戸齊昭侯を救ひ出して來て、齊昭の末子慶喜を、將軍家の養子として將軍跡目相續の家柄である所謂御三卿家の一橋徳川を繼がせた事も見て知つて居た。そして是等の事が皆、自分の勢力を臺閣に張るが爲の魂膽



である事も、充分に知つて居た。

掃部頭は、伊勢守のさうした仕組を、「野郎、猪口才な事をするなッ」と言ふ心持で、目を放さずにチツと注視して居ると、伊勢守が其聰明穎達の天資に任せて、種々の策を弄し乍ら、眼から鼻へ抜けるやうな伶俐さで切つて廻すに従つて、従来は伊勢守の後援的地位に立つてゐた保守派の人々が、段々伊勢守の周囲から離れて、其反對者側に廻り動いて行く事を機敏にも見て取つた。

此處で少し或る點に力を加へれば、彼を倒す事は雑作も無いぞと思つて居ると、今度の事が起つた。

彼はそれを見ると「最早愈々伊勢守も壽命が無いな。彼が倒れたら、全體俺の家は先例として大老に成る可き家柄なんだから、今度は俺が立つ順序だ。俺が立つたら飽く迄俺の専制政治をして見せる。頭腦の古い水戸の隠居を後見に頼んだり、今までの例を破つて餘計な京都の公卿達の機嫌を伺つたり、當然區々に成る事の分つてる諸侯の意見を聞くといふやうな馬鹿な事をするから、收拾する事の出来ない難局に立たね

ば成らなくなるのだ。俺なら彼の蟲の好かない齊昭といふ老爺の元老面なんか眼中に置かないで蹴附けて了ふんだがなア、彼奴は伶俐なやうでも膽力が無いから駄目だ。」と、獨でニヤニヤ氣味の悪い笑ひ方をしてゐた。

### (三十一) 呪詛者の眼 (井伊直弼の野心)

然し伊勢守は、自分の後から、然うした自分の呪詛者が監視の眼を放つて附覘ふて居る事を知らなかつた。

そして、一方では其月即ち七月十七日に、今後五ヶ年間諸雜費節約の布令を出して其期間内は諸侯伯の登城の際にも、下着などには綿服を着て來ても差支がない、又實際向供廻などの事も同様に心得て可いと、言ふ細い事まで命令した上に、一方では又盛に國防を充實する事を奨励し、次いで其月の二十一日からは、前に其築造の決定をした品川灣内十一箇砲臺の建設に着手して、毎日早曉の六時頃から、數千人の人夫を督して今の御殿山附近からドンドン土を運ばせては、海面を埋めて行つた。



斯う云ふ風にして、阿部内閣が、海岸防備と武力の充實とに總ての事を忘れて懸命に成つて居ると、其うちに又、八月の初頭に成つて、更に露艦來の聲が、長崎から聞こえて來て、上下の人心を駭かした。

此の露艦が長崎に來たのは米艦が浦賀を退去してから約一ヶ月後の七月十七日で、彼が來航の目的は米艦の來朝した事を聞いて、機會均等の利を收めようとするにあつた事は言ふ迄も無いが、然も彼は米國が頻に武威を示して恫喝の態度を採つたに反して、寧ろ懐柔的の態度を採り、故ら長崎を撰んで入港し、其接見應對頗る丁寧懇懃を極めた事は、少からず長崎奉行に好感を與へた。

然し、恫喝、懷柔其何れにしても、曾て我が千島全島を強奪し、樺太の半部に其食指を付け、尙折もあらば我が北門を衝かんとしつゝあつた彼れ露國が、其水師提督たるブーチャチン少將に、其海上威力たるフライゲートバルラス、ホストック、オールラ、ナバリノの四艦を引率せしめて、我が長崎港に來らしめたといふ事は、我國にとつては確に大なる脅威であつて、彼ブーチャチンが其本國を出發するに當つて若し米

艦が日本に對して開戦する形勢が見えたら、特に我が日本に與して米國と戦ひ、我に恩を賣つて、之を口實に利權を獲得するやうにとの命令を受けて居た、と云ふに至つては、彼の虎狼の志や、實に米國以上に恐るべきものがあつた。

此の露艦來朝の報が幕府に達すると、阿部閣老は急に又閣僚等を集めて、其國書受領の可否を議すると共に、更に書を齊昭侯の許に致して其意見を求めたが、既に一旦米國に之を許した以上、露國に對して別異の態度を採ることを得ないのは無論の事であつたから、今と成つては何人も之に異議を唱へるものは無かつた。

そこで伊勢守は八月三日、長崎奉行に令を與へて、彼が若し承諾する者ならば、一應國禁の事を諭告して、それでも聞かなければ、其時に初めて國書を受取れ、と云ふ事を言つて遣つたが、彼は其間にも例の武力充實といふ事に一所懸命に成つて、六日には曾てモリソン號事件の飛沫を受けて幽閉された洋式砲術家高島秋帆の罪を赦した上、大砲製造の事を大に各藩に奨勵し、十四日には又造艦の事を三奉行に諮問し、翌日は又松平肥後守齊正に大砲五十門を鑄造せしめ、二十五日には更に萬石以上の諸藩



に命じて、洋式訓練を其士卒に行はしめた。

此時に行つた洋式訓練と云ふのは、和蘭式の銃隊を編成して、皆が尻割羽織を着用し、大小を差した儘で、銃を持ち、合圖の太鼓に依つて進退したもので、其銃といふのは皆ケーベル銃であつたが、其間に長崎の方では、奉行が八月の十九日に露國使節と會見して國書を受領し、二十一日に夫れを吏僚に托して江戸へ持たせてよこした。

此の國書と云ふのは皇帝から將軍へと云ふやうな然う云ふ重々しいものではなく、露國外務大臣ネスセルロード並に水師提督ブーチャチンから何れも老中へ宛てたものであつたが、然も是等の書柬中、殊に注意すべき一事は、彼が單に通商貿易を要求するばかりでなく、別に兩國永遠の平和の爲千島及樺太に於ける國境を定めたいと云ふ事であつて、殊にブーチャチンの書面には、此事は兩國の爲一日も早く決定する必要があるから、直接老中に面會したい。と云ふ事が書いてあつた。

乃で幕府では、事國家の境界に屬する以上、打捨て、置く事は出来ないといふので十月八日、大目附筒井肥前守、勘定奉行川路左衛門尉兩人を正使に、目附荒尾土佐守

儒者古賀謹一郎を其介添に命じて、改めて露使と接見する爲め十月三十日を以て江戸を出發せしめ、境界決定と云ふ事は豫め充分の調査をした上で互に慎重審議を重ねる必要があるから、今日早急に會商することは出来ない。又通商貿易の事は米國からも既に其要求を受けてゐるが、其決定は各般の手續を経る必要があるから輕々しく議定する事は出来ない。と云ふ意味の答を書いた老中の書柬を持たせて、尙口頭を以て諸多の意思を表示する爲に長崎に遣つた。

此時の老中の書柬で見ると、多少露國の欺瞞的態度に誘はれて、彼に許した傾きはあつたが、兎に角米使ベルリに對した態度の純摺衷的であつたのに比べると、著るしい變り方で、僅一ヶ月の間に斯うも形勢が變化したものかと驚かれるばかり、交讓的であり妥協的である點が見える事は、頗る注意すべき事であつた。

是等幕使が長崎に到着したのは、十二月八日の夜であつたが、彼我兩使の交渉は其月の十四日から始まつて翌安政二年に至つても決せず、正月四日我が兩使の手から

一、日本が若し通商を許す事とならば、露國に先づ之を許す事



二、諸外國と日本との間に通商關係が結ばれる事とならば、露國は最惠國として特別の待遇を受くる事  
と、云ふ二條件を保障した契約書を得て、境界決定の事は他日に譲つて漸く歸航の途に就いた。

斯の如く兩國使の交渉が約一ヶ月に亘つて、容易に其決定を見なかつたのは露西亞が其貪婪飽くなき領土慾から、擇捉並に樺太の全部を以て自國の領土たることを主張し、強辯を以て我が幕使を瞞着せんとしたからであつたが、然も川路等の幕使が彼をして他日の言質を得ざらしめんが爲め飽く迄之に抗辯したので、彼も遂に其動かす可からざることを知つて、僅に通商貿易に關する他日の言質を得た事だけで満足して歸去つたのであつた。

然も一難去つて又一難來るで、斯の如くにしてブーチャチン等の露國艦隊が正月八日に長崎を退去してから、僅にもう一週間経つか経たない間に、曩日の返答を聞かんとするペルリの米國艦隊は、海波を蹴つて江戸灣近く進んで來た。而して内には器

嚴として起る攘夷の叫び！ 伊勢守は、此時既に攘夷の到底行ふべからざる事を熟知し乍ら、左を顧み右を慮つて、其自ら播いた種から出來た莠草の中に獨自ら焦慮しつゝ歩み悩まねば成らなかつた。

### (三十二) 米艦の江戸灣侵入

ペルリが又來たと云ふ事は、屠蘇の酔のまだ醒めきらぬ江戸の市民を、不意に又惑亂の淵に陥れた。

流石に幕府では、近々に米艦が又來るといふ事を鹿兒島藩から前以ての急報で承知してゐたので、萬一彼が此前のやうに深く江戸灣内に進入して來た場合に處する戰闘準備や何かの事を定めて、此前には、危急を報ずる爲に早半鐘を打つと云つた前例を變更して、今度愈々の時には拍子木を叩くといふ事を市中一統に觸れ出したり、儒者の林大學頭、松崎滿太郎、町奉行の井戸對馬守、目附の鶴殿民部少輔等を亞米利加應接掛に命じて、米艦浦賀來着次第發遣するやうに手筈を定めたりして、豫め彼の再



來朝に備へて居た。

所が米艦は正月十五日に江戸灣の前面に現はれると浦賀灣へは入らずに翌十六日、直ちに江戸灣に進入して、彼が前回の會見に揚言した如く、今回は其艦數を増倍して全艦隊八隻、突如として木牧邊の防禦正面に投錨した。

不意を打たれた幕府の驚きは言ふ迄も無かつた。此時には最早幕府の要路は大抵開國論者に依つて占められて、幕府の後見とも云ふべき水戸齊昭侯と其直系の人々だけが、相變らず強硬な攘夷論を主張して居たが、米艦が神奈川沖まで深く入つて來たのを見ると、『そら如何だ。だから言はない事ぢやない』と云はんばかりに熱り立つて、急に沿岸守備の各藩を鼓舞する命令を發したり、浦賀へ急いで出立せうとする林大學頭等と呼附けて、齊昭老侯から『國辱に成らぬやう注意して取計らへ』と云ふやうな事を嚴そかに諭告したりした。

此の時江戸灣の沿岸防備は、品川の第一臺場を松平誠丸、同じく第二臺場を松平肥後守、同じく第三臺場を松平下總守、木牧を松平相模守、神奈川を松平兵部大輔、

浦賀大津を細川越中守、三浦三崎を松平大膳大夫、高輪を松平越後守、芝増上寺を松平加賀守、御殿山を松平越前守、鐵砲洲と佃島とを酒井雅樂頭、濱御殿を御書院御小姓の兩番頭、芝濱屋敷前を松平薩摩守、鮫洲を松平土佐守、深川洲崎を松平越中守、大森を松平阿波守、大井を松平隱岐守、伊豆下田を水野出羽守、房州洲崎を松平内藏頭、上總の富津を立花飛彈守、同じく姉ヶ崎を水野壹岐守、下總の寒川を堀田備中守、同じく銚子を松平右京亮、同じく濱村を森川出羽守等の各手の者が之に當つてゐたが、其兵員の總數は明かに分つて居る者だけでも實に三百三萬六千餘人で、東京灣の沿岸のみにこれだけ澤山の人數が集まつたといふことは、江戸開府以來空前であつた。

然もペルリ等は、沿岸各地の此の物々しい警備振が宛で眼に入らないやうに飽く迄も例の強硬の態度を續けて、十九日の晩に浦賀に着いた林大學頭等幕府の有司が浦賀へ引返す事を要求しても、更に此方から折れて出て鎌倉を會見地に指定しても、悉く夫を拒斥した。そして若し貴國に於て飽く迄も此の場所に於て接見することを忌避



するならば、進んで江戸へ行く外はない、と一流の恫喝で交渉委員を撥附けた。

其事を聞いた齊昭初め攘夷派の憤慨と云ふものは實に一方ならぬものであつたが、然し大勢は、もう動かす事が出来なかつた。米艦が更に進んで来て神奈川の前面に投錨した二十七日の翌曉の如きは、熱し立つた齊昭侯が登營するや否や、火の附いたやうに溜間詰の諸役人を自分の前へ召集して、愈々これから防戦準備をするのだと云つたが誰も耳を傾ける者が無かつた。さう成ると齊昭侯の憤慨は益々加はるばかりで、翌二月の四日には又、態々神奈川表から林大學頭を召還して、

「屹度通商貿易を許しては成らぬぞ」

と、云ふ嚴令を下した。然し林大學頭は其以前既に老中から全權を授けられる場合に、

「應接の意味厚く申談じ候やう致す可く候」

といふ内命を受けてゐたので、表には恐悚の意を示し乍ら、心の中では一笑に附して顧みようとしなかつた。

斯うして談判はトントン拍子で、米使の好都合に運んで行つた。一月の二十八日から交淡が始まつて翌々月の三月三日には、所謂アメリカ應接係四名の連署で、十二ヶ條の暫定條約が出来て了つた。其中には伊豆下田、北海道函館二港開港の事も含んで居た。

勿論米使は其結果に満足して其月の二十一日に歸つたが、さう然う成ると國內の攘夷派が承知しなかつた。齊昭侯は勿論の事、曾て諮詢を受けた時に其内心は兎も角も表面は大勢に雷同して祖法不變改、外夷斥攘主義を主張した各藩までが黙つて居なかつた。彼等は顔を合はすとは皆、幕府の軟弱な外交を罵つて、殆ど完膚が無い迄に之を攻撃した。

「伊勢守と云ふ男も案外な男ぢや。あれ程確に攘夷の方策を我々の前で主張して置き乍ら、まだ一年経つか経たぬに彼の腰拔振はどうぢや」

「聞けば伊勢守は、異國の使のあの蝟のやうな顔をしてゐるベリーとか云ふ者から、墨西其戦争とやらの畫圖を貰うて、其畫の物凄いのに脅かされて、夢中にフラフラと



あんな約束をする氣に成つたのださうだ」

と、云ふやうな事を口々に言ふ者もあつた。

固より自分が談判の局に當つて見ると、あの小村でも分る通り、自國の懐工合といふ事も胸算用をしてかゝらねば成らぬし、眼前に恐ろしい巨砲の威力や、電氣とか蒸氣とか云ふやうなものを利用した新しい文明の利器や、節制ある軍隊の進退などを見せられては、直接に其脅威を感ずるのは當然の事で、局外に立つては威勢の好い事ばかりを言つてゐるやうな連中の言ふ通りにも成らぬのは、何とも仕方のない事であるが、傍觀者の眼から見ると、總ての事が缺陷だらけで、見て居られなかつた。實際此時の幕府の態度には、寧ろ熱心な開國論者で、然も阿部閣老の腹心である川路左衛門尉や、筒井伊賀守迄も、無主義と云はうか無定見と云はうか、昨日の宣言を今日忽ち變改して憚らない其遣方に呆れ果て、俺達は幕議の方針に随つてプーチヤチン等と一所懸命に論争して、兎に角我が國威を立て、歸つて來たのに、其不在中に此様な馬鹿な事をされては堪らない。と、歸府早々大反對を唱へて、阿部閣老と激論し

たが、其時はもう既に大事が去つた後であつた。

尤も此川路左衛門尉等の今度の神奈川條約に嫌らない點は、其開港主義を非難するのが本意でなく、恰度今日の帝國議會に於て、自分の意見如何に拘らず、院議を尊重すると云ふのと同じであつて、苟くも幕議として攘夷主義の外交方針を宣言した以上飽く迄も其宣言は自ら遵守しなければ成らぬ。然るに僅五六ヶ月の間に、曾て一旦宣言した事を自ら破棄するといふ事は、幕府の宣言の權威を失はしめるものであると云ふのが趣意であつたから、純粹攘夷派の意見とは異つてゐたが、然も攘夷派が颯つて攻撃した點も此處にあつたから、閣老伊勢守は其内外から挾撃される形に成つた。彼に對する不信任の聲は、斯うして日に益々高く成つて行くばかりだつた。齊昭侯の如きは、遂に「あゝ云ふ男と責任を分つて居る事は出來ない」と云つてブンブン怒つて病氣を言立てに又駒込の隠居所へ引込んで了つた。

さう成ると伊勢守は、愈々もう絶體絶命の地位に立つた。流石の英明な水戸老侯も此頃は老耄せられたのか、餘りに大局を見る眼が無さ過ぎるから困ると心では思つた



が、然しまだ、水藩の勢力といふものは偉いもので、少くとも全國の大半を制するだけの力があつたから、之を無視する事は出来ない。どうかして之を逃がさない工夫をしなければ成らぬ。と夜の目も寝ずに考へた結果が、齊昭侯の満足を買ふが爲に武備充實令を出す事にして、

「此度米使の願を許して一二の開港をしたのは決して幕閣の本意ではない。實は我國の軍備が充實を缺いて居る爲に、残念乍ら暫くの間あのやうな約束を定めて置く事にしたのであるから、向後は一層海陸の兩軍を充實せしめて、萬一の場合に備へるやうにせねば成らぬ」

と云ふ事を、其年の四月九日に成つて大小目附へ通達した。

然し伊勢守が折角の苦心の甲斐も無く、齊昭侯は容易に再起の模様が無いので、伊勢守も到頭匙を投げて、其翌日の四月十日に到頭辭表を出した。

此時に伊勢守の此の辭表が許されたら、彼も責任の地位を免れて、悠々と其餘命を樂む事が出来たのであるが、恰度折も折とて京都からは内裏炎上の通知が来る。米艦

が又下田へ來て追加條約の交渉調印を迫る。内外の繁多な出來事は、到底彼の桂冠を許さなかつた。

### (三十三) 吉田松陰と佐久間象山

露艦の下田廻航、附屬條約の締結、其間には實に二ヶ月の日子があつた。露艦は其間に一たび去て、次には又、パウハタンとミシシッピーの二隻だけで引返して來たのであつたが、有名な吉田松陰の事件は、實に此の間に起つたものであつた。

吉田松陰!! 彼は世にも珍らしい時代の先覺者だつた。長藩の兵法家の子として生れたわけあつて、彼は殊に其家學たる兵法に關して天才的の閃きを持つて居たが、嘉永三年其二十才の歳藩侯に隨つて江戸へ出て、色々な刺戟を受けるに伴つて、今まで只章句に拘泥して居た眼は、漸次大局の上に注がれるやうに成つた。其時は露英米各國の異船が屢々我が近海に現れて、攘夷の聲が天下に旺盛たる時であつたが、松陰は早く既に浦賀に眼を著けて、外夷の侵犯を防ぐ爲には第一に先づ浦賀の防備を嚴にせ



ねばならぬ、と云ふ事を主張した。

彼の此の説は、當時不幸にも餘り世人の認める所と成らなかつたが、其後僅に三年と経たない嘉永の六年に至つて、果して浦賀は外艦來侵の目標と成つて、諸多の國難は浦賀を中心として群がり起つた。

松陰が、或は勢及私言を著し、急務餘議、攘夷私議を著して、大に時事を痛論するに至つたのは、實に此時からであつて、彼は人と逢ふ毎に、必ず其舌端火花を發して、悲憤の言を作したが、彼の其燃ゆるが如き思想は幸田幸貫の家臣にして曾て其藩主から豪傑の名を以て稱せられた佐久間象山を師とするに及んで、益々其燃焼を強くした。

象山と松陰との間には、年齢に於て二十の差があつたが、象山は殊に此の松陰を愛し、松陰は又殊に象山を敬して、二人は父子の如く兄弟の如く、或る時は又、親友の如く其肝膽を相照らして語つた。今日も

『先生、亞墨利加の軍艦が立去つたと思ふたらば、又今度は魯西亞の軍艦が長崎へ參

つたと申しまする、私は實に無念で成りませぬ』

と、松陰がブーチヤチン來朝の事を聞附けて來て切齒し乍ら象山に物語ると、象山は何度も頷いて、

『然様か。それで其方は無念ぢやと云ふのか。然し其無急と云ふのは、何が無念なのぢや』

と然う聞いた。

『勿論、我が防備の足りぬ爲に彼等を撃攘致す事が出来いで、彼等に乗せらるゝ事が無念なのでございます』

『フウム、然様か。それで其方は只さう言ふて悲憤慷慨して居れば、彼等異國の兵力に對決の出来るだけの實力が附くと思ふて居るのか。』

『否、決してさうでは御座りませぬが、……』

『さうで無ければ如何しようと言ふのぢや。大砲の鑄造も、洋式の訓練も結構ぢやが今日のやうな萬事が只形だけの武備では、無暗と武力の充實を叫んだ所で何の補足に



も成るものでない。所詮盛なのは口だけの攘夷騒ぎぢや」  
「それでは、先生は」

「眼を大きく見開いて遠い所を見るのぢや。拙者は決して攘夷と云ふ事に反対するものぢやないが、頻りに口囁しく攘夷攘夷と威張つて居る人達に、どうして攘夷をする心算かと云ふ事を聞いて見たい。其方は藩侯に随従して房總の沿岸を巡視したと云ふから、定めて見たであらうが、あの態は何ぢや。あの様の疎漏な物で外敵が防げると思ふて居るのは呆れた話ぢや。此頃は又品川沖で砲臺が頻りに築造されてゐるが、拙者の時から見れば、彼れも畢竟子供だましぢや。流石に今度和蘭から買入れた軍艦だけは立派なものぢやが、然もそれを動かす得る人が無ければ、これも寶の持腐れで、萬一の時には、和蘭人に頼んで戦をして貰ふ外はあるまい」

「成る程一々皆、先生の仰せられる通りでございます」  
「フム、道理と思ふか。道理と思ふたりや、其方もコセコセした攘夷論者と成らずに大局に眼を注ぐ大きな攘夷論者に成れ。外夷の事情を知らぬ人々は、只眼前に彼の軍

艦だけを見て驚いて居るが、西洋の學問と云ふものは、恐ろしく進歩したもので、彼等は蒸氣の力を假りて船も走らせれば、車も走らせる、中には一日に百里を突破すると云ふ車もあるさうぢや。武器なども悉く皆精銳なものばかりで、兵力、武器、軍資、共にとても我國の及ばぬ所ぢやと聞いて居る。誠に夷狄を攘はうといふ大志があれば、彼を攘はうとするに先づ、彼を知る事が何よりも肝要ぢや。拙者も事情が許せば、國家の爲に奮發して、今からでも萬里の海波を蹴つて、海外を歴遊して來ようと思つて居るのぢやが」

と、彼一語、是一語、互に時事を語り合ひ乍ら、象山の大處から斷じた談論を聴く毎に、松陰の若い心は、もう抑へんとしても抑へることの出来ない踴躍を感じて、其眼は爛々と希望の光に輝き、其吐く息は炎の如くに熱するのを見たが、頓て深い決心の色を、其眉宇に現して、

「先生の御教訓、肝に銘じて御座ります。誠に仰の如く致してこそ、初めて眞に外侮を禦ぐ事も出来るで御座りませう。それには幸ひ魯艦が長崎へ來航したと云ふ事で



御座りまするから、某これより直ちに九州へ立越えて、彼の艦に便乗を請うて魯國に渡り、世界を經廻つて、彼の形勢を見て參らうと存じまする』

それを聞くと、象山の顔色も動いた。

「ムウ、其方眞に其決心をしたか。」

「ハイ、彼を知つて己を知ることが、兵家の第一義ぢやと、幼い時に學びましたのを未だに能う記憶えて居りまする』

『良い覺悟ぢや、さらば行かれい。我等壯士を送る詩を作らうぞ』

と、象山は直ちに家人に酒の用意をさせて、二人で意味の深い別れの盃を舉げ終つた後に、墨痕淋漓と壯士を送るの詩を書いた詩箋を松陰に手渡して、

『さア、これが臚の志ぢや』

と言ひ乍ら、靜に朗々と吟じ出した

少し暖れて聞こえる太い聲の男聲獨唱！ それが其場合には、妙にシンミリと聞こ

えた。筑を打つて荆軻を送る易水の別のやうな悲痛の心持が暫く其室内に漂ふた。

二人は、そして遂に別れた。

然し松陰が、其長い苦慘な旅を終つて、漸と長崎へ着いた時には、ブーチヤチンは最早其軍艦を率ゐて、歸つて了つた後であつた。

松陰は既に一艦の影も留めない空しい海の上を見ると、思はずハラハラと落涙したが、涙を呑んで又悄然と江戸へ引返した。

そして江戸へ歸つてからも、鬱々として只籠居してゐたが、其様子を見て心配したのは、下僕の金子重輔だつた。

「先生、變な事をお伺ひ申すやうで御座いますが、私が參つてから、ついぞ一度も餘所へおいで遊ばした事も無く、常住鬱々とばかりしておいで成されますが、如何成されたので、御座います。私はそれが氣がしりに成つてたまりません』

と誠心を現してさう言ふのを、

「イヤ、心配して呉れるのは嬉しいが、只色々の事を考へて氣が鬱するまでぢや。それよりも其方、此程から讀みかけて居た地理書の學習は如何致した。過日も申した通



り、人間は大地を踏まへて立つてゐる者ぢやで、大地を離れて人間は無い。だから凡そ天下に事を成さうと思ふものは、地理の研究を忘れては成らん。可いか、分つたら此方の事など氣に致さんで、一心に勉強する方が可からうぞ」

と松陰は、何氣なく答を外らして、靜に教へるやうに言つた。

「御教訓難有うござりまする、最早一兩日を以て讀終る筈でござりまするから、寧ろ氣が勵んで面白く讀んで居りまする」

「さうか、夫れは恐ろしい出精ぢや」

と松陰は笑ましげに言つたが、

「それでは此次には禹貢を教へようぞ」

と主従が睦まじげに語合つて居ると、表で、

「頼まう、頼まう」

と頻に案内を請ふ聲が聞こえた。重輔は耳敏く聞付けて、

「おや、お客來らしう御座りまする」

と急いで立つて行つたが、

「肥後の宮部ぢやと仰せられますが」

と手を支いて然う言つた。

「何ッ宮部が來たか」

と、其時、松陰の顔には、急に今迄とは違つた晴々しい色が動いたが、

「直ぐこれへお通し申して呉れ」

と吩咐けると、殆ど入違へに宮部鼎藏が大刀を手に持つてノツソリと入つて來た。

「やア、宮部か、久々の對面ぢやのう。」

「吉田どうしたのぢや、此前長崎からの歸りぢやと言つて參つたきり、長らく逢はんが、貴方も健勝か。實は餘り音信が無いので案じて居たが、見れば少し顔色が悪いやうぢやな。此頃は兎角洋夷が跋扈しをつて、我國の國威を蔑ろにし居る。正に壯士立つて國に盡すべき秋ぢや。貴公も定めし聞いたらうが、あの傍若無人な振舞をして、神奈川へ參つたアメリカの軍艦共は、伊豆の下田へ向けて近々に神奈川を出帆するさ



うちやのう』

『ウム。』

と、松陰は夫れに對して氣の無いやうな返事をして居たが、其胸の中は俄に燃えるやうな希望で充滿ちて居た、そして心密かに斯うして彼様してと獨色々考へて居るのを宮部鼎藏はキツと見て、

『吉田如何した、何を考へて居る』

と、突如として驚かすやうに詰問した。

『否何別に考へてゐると云ふ程の事も無いが……』

と、松陰は、さう聞かれて少し言淀んだが、鼎藏の傍近く膝行寄ると聲を密めて、  
『宮部、實は我等密かに覺悟した事があるのちや。貴公も今言ふた通り蠻夷共の暴狀は憎んでも餘ある事ちやで、我等これから天に代つて彼等を誅戮する爲に下田へ參つて、詞を構へて彼の艦へ入つた上、蠻夷の大將ベルリを刺殺して一死國に報じよう云ふのが、我等の決心ちや』

『其決心は少し悪いぞ』

鼎藏はそれを聞くと、直ぐさう云つて止めた。

『イヤ止めて呉れるな、我等もう固く決心したのちや』

宮部鼎藏は烈しく頭を振つて『イヤ、乃公は飽く迄も貴公を止める。貴公は一人の將を殺しさへすれば、それで我が日本に對するアメリカの國策が變改されると思ふのか。止せ止せ。一人のベルリを殺したからとて、彼の外にはまだ百人千人のベルリがあるのちやぞ、唯だ一人の夷狄と引換に貴重な命を捨て、何に成る。犬死は無用ちや』と言を盡して止めようとしたが、松陰は頑として聞かなかつた。

『否、親切は難有いが、實は我等には同志の者もある。一旦武士が約束した事を、假令犬死ちやからと言つても、妄に破ることは出来ん、止めるな』

と、一旦さう言ひ出したら、とても聞かない性質な事を鼎藏は知つて居たので、強ひても止めなかつた。そして殘惜しさうに種々の事を遅くまで語合つた上、愁然と獨別れて歸つて行くのを、松陰も表まで見送つた。淡い月光に全身を照らされた影を長



く地に曳いて、宮部鼎藏が立去る姿を、松陰は暫く其處に立つたまゝヂツと見送つてゐたが、間もなく其影が横町の闇に吸はれたのを見ると、

「宮部、許して呉れ、今のは偽ぢや」

と血を吐くやうな聲で言つて、續いて自分もフラリと出ると、急ぎ足で佐久間象山の家を訪れた。

象山の家の戶外へ行つて見ると、早もう寢に就いたと見えて、表戸は堅く鎖してあつたが、思ひ切つてホトホトと叩くと、中から聲をかけたのは門人だつた。

「何誰で御座るな」

「吉田寅次郎で御座る。今宵の中是非先生にお目に掛りたい事があつて参つたので御座る」

と、松陰がさう言ふと、直ぐに潜戸は開かれて、中に招せられたが、象山は顔を見ると突如、

「久しう見えなんだな。然しそれは咎めん。拙者は其方の志を知つて居る。然し何

日行く」

と然う言つて問ひかけた。松陰はさう聞かれて唯一言、

「今日にも参りたいと存じて居りまする」

と言つたが、其一語には實に千鈞の重みがあつた。

其座には暫く水のやうな静かさが流れて居たが、象山は頓て一封の金を傍の文庫から取出して、

「實は今日にも参るぢやらうと思ふて用意をして置いた、志は松の葉ぢや」

と、それを松陰の前へ差出した。

松陰は思はず其目に涙を浮め乍ら、

「御志辱く頂戴致しまする。」

と、押戴いて懐中したが、

「御寢の所をお妨げ致しました。唯一目御面謁をしてと存じましたが、これで望も遂げました。それでは御健勝に」



と言ふと、默然として眼を屢叩いて居る師の前に、一禮して、靜に座を立つた、象山はヂツと其後影を坐つた儘で目送して居たが、

「それでは態と送らぬぞ。」

と言つた聲には、千萬無量の思が籠つて居た、

松陰も態と後をも見ずに一目散に我が家へ駆けるやうにして歸つた。

歸つて來て見ると、何と思つての事か、下僕の金子重輔は甲斐々々しく旅装を整へて、松陰の旅装までチャンと揃へて待つて居た。松陰は夫れを見ると驚いて、

「重輔、其方の扮装は？ そして又何と思つて此方の旅支度など致したのぢや」

と答める顔を、重輔は屹度見上げて、

「先生、お怨めしう御座りまする」

と言ふとハラ／＼と、落涙して、

「諄い事は申しませぬ。先生、私もお伴れ下されませ」

とさう言つた時の眼は、涙に濡れ乍らも炯々として人を射る強い光があつた。そし

て下賤乍らも人に恐れぬ不屈の魂が、其光の中に在つた。

松陰は暫く沈思してゐたが、

「さては其方は、此方が先程宮部に言ふた事を聞いたのぢやな。然し有様は、宮部に申した事は、彼れは嘘ぢや」

「エツ」

「否驚く事はない、我等志は外にあるのぢや。近う參れ。それを申し聞かさう」

松陰はさう言ふと、靜に重輔の耳へ口を寄せて何事かを囁いた。そして再び重輔の顔を見ると、

「此事は象山先生と我等との外、何人にも漏らすまいと存じて居たが、其方の今の死をも怖れぬ面魂を見て、其方とならば、事を共に致しても可いと言ふ氣が起つた。

それでは一緒に來て呉れるか」

とト問ふやうに言つた。すると、

「參る段ぢやござりませぬ、先生と御一緒に斬死致さうと思ふた此の重輔でござりま



する』

と重輔は莞爾と笑つて見せた。

二人が素早く一切の用意を整へて、家を出たのは翌日即ち三月五日の味爽だつた。又候ふ米艦の引揚げぬ間に着かねばと云ふ算當から、松陰は殊に急ぎ立つて、在るだけの交通機關を利用しつつ、一日も早く下田へ行着かうとして苦心したが、それでも漸と二人が目的の下田港へ着いた時は、米艦が近々函館に向つて出帆するツモリで、既に其準備を終へた安政元年三月二十日過の事であつた。

二人は未だ米艦が沖合に姿を示して居るのを見ると、初めてホツと安心した。そして、

『あゝ先づ可かつた』

『先生、好都合でござりました』

と、主従互に喜び合つたが、松陰は夜に入るのを待つて米艦へ乗入らうと云ふ考へがあつたので、それ迄に種々の準備をする爲と、一つには又、人目を避ける爲とをか

ねて、只有る旅館の一室に着いた。

女中が火鉢へ入れる火を搬んで来て、態とのやうに身慄して見せ乍ら、

『まア、何と云ふお寒い事でございます。異國の軍艦が参つたせいか、今朝などは急に寒氣が致します』

と云ふのを、松陰は、

『さうぢやな』

と氣の無い返事をして聞いて居たが、女中は一向お構ひなく、

『然し、どうやら今夜あたりは蝦夷の方へ立つさうで御座ります。異人船さへ居なくなれば、此の下田も又、前通りに成りませう。旦那方も緩然お泊りに成つて、此町の繁昌も見て下されませ。伊豆の下田に長居は無用縞の財布が空に成るとか唄では申しますけれどホ、、、』

と獨ではしやいで、獨で饒舌つて下りて行つた。

重輔は其後を見送つて、



「ハ、ハ、ハ、能く饒舌る女でござりまする。したが先生、今の女が申した所では、どうやらアメリカ船は、明日にも此港を出帆致すに御座りまするが」  
「ムウ、拙者もそれを考へて居た」と松陰も腕を拱いて、

「さうと成れば愈々もう猶豫は出来ぬで、今夜に紛れて乗込む事とせう。其方は今から、夜釣を致すとか何とか口實を設けて舟の用意をして来て呉りやれ。拙者は其間にアメリカ船に與へる陳情書を認めて置かう」

とさう言ふと、直ぐ持つて来た行李から紙を出して、夫れを机の上に廣げ乍ら、豫て象山先生に直して貰つて置いた草稿に依つて、筆を走らせた。其陳情書と言ふのは次のやうなものであつた。

『日本江戸府の書生瓜中萬二市木公太、書を貴大臣各將官執事に呈す。生等賦稟薄弱、軀幹短小、固より士籍に列するを恥づ。未だ刀槍擊刺の技を精くすること能はず、未だ兵馬鬪争の法を講ずること能はず、汎々悠悠、日月を玩愒す。支那の書

を讀むに及んで、稍歐羅巴米利堅の風教を聞知り、乃ち五大洲を周遊せんと欲す。然して吾國海禁甚だ嚴に、外國の人の内地に入ると、内地の人の外國に到ると、皆貸さざるの典有り。是を以て周遊の念、勃々然として心胸の間に往來す。而も呻吟躊躇、蓋し亦年有り。幸に貴國の大軍艦、橋を連ねて來つて我が港口に泊す、日と爲て已に久し、生等熟觀稔察、深く貴大臣各將官の仁厚物を愛するの意を悉し平生の念、又復觸發す。今や則ち斷然策を決し、將に深密に請託して、假に貴艦中に座し、潜かに海外に出で、以て五大洲に周遊せんとす。復國禁を顧るに暇あらざる也。願はくは執事辱く鄙衷を察し、此事を成すを得せしめば、生等の能く爲す所、百般の使役、惟命是聽かん。夫れ跛躄者の行走に於ける、行走者の騎乗に於ける、其意の歎羨如何ぞや。況んや生等終身奔走すとも東西三十度南北二十五度の外に出づること能はず。是を以て夫の長風に駕し巨濤を凌ぎ、電走すること千萬里、五大洲に隣交する者を視ては、豈特に跛躄者の行走者と、行走者の騎乗者との譬のみならんや。執事幸に明察を垂れ、請ふ所を許諾せば、何の惠か之に尙かん、但



し吾海禁未だ除かれず、此事若し或は傳播せば、則ち生等徒に追捕を見るのみならず、勿斬立ろに至ること疑ひ無し。事或は此に至らば、則ち貴大臣各將官仁厚物を愛するの意を傷くること亦大なり、執事願はくは請ふ所を許し、又當に生等の爲に委曲包み隠して開帆の時に至り、以て勿斬の慘を免るゝを得せしむべし。他年自ら歸るが若きに至らば、則ち國人も亦必ずしも往事を追窮せざる也。生等言ふ所は粗暴なりと雖も意は則ち實に確し。執事願はくは其情を察して、疑ひを爲すこと勿れ、拒みを爲すこと勿れ。萬二公太同じく拜呈。」

松陰が達筆に其れを書終へた所へ、金子重輔が恰度歸つて來たのを見ると、松陰はそれを重輔に示して、

「之を見い、其瓜中萬二とあるのが拙者で、市木公太とあるのが貴様ぢや。どうぢや面白からう」と莞爾笑つて見せた。

重輔は「結構でござりまする」と云つて、其陳情書を恭しく疊んで返し乍ら、

「お舟の事は、御安心なされませ。萬事取計らうて參りました。」

「可し、可し。それで萬事が濟んだと云ふものぢや。然し夜に成るまでにはまだ多分の時刻があるので、其方も些と寛げ、我輩も少しは浩然の氣を養はうぞ」

と松陰はさう言ひ乍ら、激し立つてゐる精神を、暫く鎮靜させる心算で、ゴロリと横に成つた。暫くすると室内には、靜な躰が春晝の和かな空氣の中に聞こえて、それが妙に獨起きて居る者の胸に、ひっそりした心持をさせた。

重輔は何と云ふ事もなく、故郷の父母の事を思ふて涙ぐんだ。そして松陰の眼を覺まささないやうにソツと障子を開けて廊下へ出た。

### (三十四) 天の聲と人の聲

重輔はヂツと故郷の空と思しい方を、遠く望み乍ら、見るとも無く其所から町の人通りを見下ろして居ると、何處かで面白い節を附けて唄のやうなものを歌つて居る聲が、不圖耳に入つた。



ヂツと聞いて居ると、如何やらまだ年の行かぬ少女の聲のやうで、それと共にトンと鞠を突く音が、如何にも春らしい感じをさせた。唄の文句は、

「苗や〜飛んでも苗、此頃騒ぎのアメリカ船諸役人手中出しが苗、それなり置いては身がすま苗、肝魂も落付か苗、大名物入りたまら苗、見えも拳こんも續か苗、こはいと云つても立切れ苗、夜るもとつくり寝られない、思ひ過ごして氣がいかない。大筒打つても届か苗、あめりか些とも恐れ苗、異人の打つのは溜ら苗、」

と云ふのから初まつて、  
「御上の御心配もつたい苗、同じく御評議定まら苗、伊勢さん兎角おあぶ苗、隠居のお世話は氣に入ら苗、木綿の紋服水戸も苗、馬具師具足師世話し苗、出来た具足にきたへが苗。」

と云ふ文句も中にあれば、又、「去年の秋から氣が晴れ苗、年が明けても春めか苗、梅が咲いても見手が苗」とか、「小田原評議おつつか苗、御固め場所さへ定まら苗、だまつて居ても智慧が無い。世間一同おちつか苗、神風吹か苗是非も苗」とか云ふやうな

文句もチラチラ聞こえた。

「何者が教へたのか知らぬが、年齒も行かぬ小娘までが、あゝ云ふ事を唄うてゐる。情無い事ぢや」

と重輔は夫れを聞いて思はず歎息して居ると、いつの間に目が覺めたか其後には松蔭が立つて、これもヂツと其唄に耳を澄まして居た。そして感に堪へかねて、

「あゝア」  
と太い息を吐いた。

重輔は其聲を聞くと、驚いて振顧つて、  
「おゝ先生、お目覚めでござりましたか」

「あゝ今し方目が覺めたばかりぢやが、實に何と云ふ情無い唄を聞く事ぢやらう」  
と、松陰はヂツと居たゝまれないやうに身悶えしたが、

「自體何者が唄つてるのぢやらう」  
と言つて重輔の顔を見た。重輔も夫れには返事が成りかねて、



「左様でござりまする。十二三の小娘の聲かと聞きましたが……」

と言つて居ると、其處へ女中が晩餐の膳を持つて来て、

「些とお早うござりますが、此頃は、お客が少うござりまするので、早仕舞に致しますので」

と、言譯のやうな事を言つて、サツサと給仕の支度にかゝつた。

それで、松陰も據ころなく膳の前に坐り乍ら、

「飯は餘り食ひたく無いが……重輔今夜はウンと腹ごしらへをして置くが可いぞ」と、目顔で知らすやうにしてさう言ふと、女中は怪訝な顔をして、

「まア何方へいらつしやるので御座います」

と、不思議さうに聞いた。そして、

「姉さん、今夜は二人で夜釣に行くのぢや」

と、重輔が、横から其返事を引取つてすると、女中は卑しい笑を浮かべて、

「ホ、何の夜釣にいらつしやるのか知たものぢやア御座いませぬね」とチロヂ

ロ二人の若い顔を見た。

「馬鹿な事を言ふな」

と、重輔は、それを半、笑で受けて、

「時に姉さん、先刻此の樓下で、娘さんの聲で、手鞠唄のやうなものを歌つて居るのが聞こえたが、此地では此の頃あんな歌が流行るのかい」

と云つて聞くと、女中は急に眞顔に成つて、

「まア、彼れをお聞きなされたので御座いますか。何アにね、あれは流行唄でも何でもござりません。昨夜江戸の御客が面白い文句ちやと言つて書抜いてお置きに成つたのを、此所の娘さんが見て面白がつて、ツイ子供心に何の氣も附かず鞠唄にして歌うたのでござります。先刻もそれを女將さんが聞いて、今日は外にお客も無いから可いが、二階にはお武士様がおいでに成るのに、若しかそんな唄がお耳に入つては、どんなお咎めを被るかも知れぬ、と申して急いで止めさせたのでござります。お耳に入りましたら仕方がござりませんが、どうか子供の事でござりますから、お慈悲にお



聞きのがし下さいませ』

と平蜘蛛のやうに成つて、松陰の前へ頭を下げた。松陰もこれには始末に困つて、『イヤ、さう恐れる事はない。俺はさう云ふ事を咎める役目の者でも無し。又、そんな事を咎める意志もない。只面白い唄ぢやと思つて聞いたまでぢや』と軽くさう言つて、女中が「後程主人がお詫びに出る」と言つたのを、無理に押し止めて、晚餐が済むと、女中を下へ追下ろした。

女中が最後の食器を持つて階子段を下りて行つた姿を見ると、松陰は、重輔の顔を見て、吐出すやうに、

『天に口無し、人を以て言はしむぢや。聞く所ではあの唄の本歌も、どうやら落首の類ぢやらうが、民心が次第に幕府を去つて行く傾向は、あの文句を聞いても分る。世間では俺を等し並の尊王攘夷の徒と視て居るやうぢやし、象山先生も、或はお前なども、さう思つて居るか知れぬが、然し俺は頑固一轍の攘夷論を唱へる者ではない。どちらかと申せば寧ろ俺のは、開國論と云ふ方かも知れぬが、開國をするには、彼等夷

狄の申す儘に成つて、他から動かされての開國では駄目ぢや。それでは國家の威權と云ふ物が立たん。開國は我が日本自ら進んで我とすべき事で、それをするには先づ、彼等の要求を悉く撥付けて、我が國威を充分に示した上でせねば成ぬ。それを何ぞや、今度のあの神奈川條約は、只もう無理押附に押附けられて、國家の一大事を一時延ばしにして居る形ではないか。開國でも、攘夷でもなし、四方八方に遠慮氣兼をして居るやうな政治の執方では、とても此の日本を危急の淵から救ふ事は出来ぬ。先刻聞いた文句の中にも、伊勢さん何とやら云ふ事が讀込んであつたが、勢州殿も彼れでは困ると言つたが、其顔には消し難い暗愁の色が浮かんで居た。

果然松陰も矢張り、何等の主義もない伊勢守の優柔不斷な、どちら附かすの施政方針を撥斥して居たのだつた。彼は梁川新次郎、梅田源次郎、森田謙藏、鵜飼吉左衛門等の錚々たる攘夷論者とも交際があつたし、又、梅田源次郎と相前後して、南朝舊都の跡を見て廻つて、賀名生の皇居跡などで、無量の感慨を詩に寫した事もあつたが、松陰の志は、決して頑固一點張の攘夷論では無かつた。彼は閣老阿部伊勢守も、水



戸齊昭侯も、個人としては確に尊敬して居たが、公人としての態度には慊らない所が多かつた。彼は果して阿部閣老が専制政治内閣の首班に在り乍ら、思ひ断つて獨裁政治を断行することが出来ずに左顧右盼してばかり居る上に、自己の責任で事を爲ることを避けて、今日の元老政治とも云ふべき不合理な干渉機關の下に幕閣を置いた没主義的な態度を非難するだけの頭が其當時にあつたかどうかは疑問であるが、確に松陰が幕閣の施政の煮え切らないのに愛想を盡かして居た事は事實であつた。そして其根源が、干渉政治にあることを認めて居た。

斯う觀て來ると、それならば、彼がどうして梅田雲濱や其外森田節齋など云ふ純粹攘夷派と多少でも意見の一致を見たかと云ふ事が、當然問題に成つて來るが、これは實に攘夷派即ち尊王攘夷派の其尊王といふ點に於て一致を見たのである。此意味に於て我輩は、松陰を以て敢て尊王開國派と認めるものであつて、畢竟彼は此の尊王と云ふ二字の爲に、當時の危険人物として、幕府の黒表中に書入れられたのである。そして其第一歩は實に彼が金子重輔と共に、米艦に投せんとして失敗した此時に在つた

のである。

松陰は、其二十七日の晩、重輔と共に、晚餐を終ると、豫て手筈をして置いた通り密かに其夜二人で例の小舟を操つて夜暗に紛れつゝ米艦間近く漕寄せたが、然も其結果は只儼として高く絶壁のやうに聳え立つて居る舷側に近き得たと云ふだけの事で、一夜が明けるまで漕廻つても到頭陳情書を投込む事は愚、物と言ひ入れる機會さへも無かつた。

其翌朝二人は、悄然として又、元の旅宿へ歸つて來た。

「如何でございました。夜釣は？」

と、女中が調弄ふやうに聞くのを、二人は苦笑で聞流して、急いで自分等の坐敷へ入つたが、其翌晩も、翌々晩もそれから殆ど毎晩のやうに夜釣々々と云つては宿を出て、港内を彷徨き廻つて機會を覘つた。そして漸つと十五六日目に、上陸して來た一米人に逢うて、人知れず前に書いた陳情書を渡す事が出來た。其時の陳情書と言ふのは、豫て象山に朱筆を加へて貰つた漢文の分と、別啓の文一通、外に和文で認めた書



翰と都合三通であつたが、二人はそれを渡すと、初めて喜びの肩を暢べて、一たび旅宿に引返してから、愈々最後の覺悟を決めて、出立の際象山から送られた贖けの四兩を感ずる所あつて送り還す手筈をした後、宿屋の拂を全部濟ませて、又江戸へ引返すやうな顔をして旅宿を出た。

そして夜に成るのを待つて、密かに、又、海濱へ行くと、今夜は豫め舟を備ふ事が出来なかつたので、恰も其處に乘捨て、あつた何人かの漁舟に、音を忍ばせてヒラリと二人で乗移ると、其處らに落散つてあつた竹竿を臨機の櫓に代へつゝ、一生懸命に米艦目蒐けて漕寄せたが、其夜の海上は生憎の暴風で、恐ろしく波が高かつたので、二人が必死に成つて漕進めようとしても、後へ後へと押返されるばかり、一寸も前へ進む事が出来なかつた。

然し決死の覺悟をした二人は、そんな事には飽く迄も屈しなかつた。其うちに二人共、髻は勿論、禪までも竟に切れて、頭は大童に、着物は殆ど帶寛裸に成るといふ慘憺たる姿に成つたが、一切夢中で、只一心に目標を米艦に注ぎ乍ら漕進めて居ると、

漸との事で、一隻の米艦の舷側へ其小舟を乗着ける事が出来た。

それと見ると第一に松陰は身を跳らせて先づ舷側の梯に取附いた。重輔も直ぐ其後に續いて、片手に持った纜を其舷梯に繋がうとしたが、折柄烈しく吹いて來た風に、思はず舟を強く引かれて、ハツと思ふ間に、二人が乗つて來た小舟は、二人の兩刀や旅行用の行李一切を乗せた儘で、海上遠く漂ひ去つた。

米艦の中では夫れと見ると、直ぐ二人を艦内に扶け上げて、色々働つた上、一室に案内して、日本語を巧に操る一將校が面會した。が、君等の手紙は提督も見、非常に其壯烈な志望を賞美して居たが、今日既に貴國と我が米國とは、修交國としての新關係に立つて居る。既に修交國と成つた以上は、妄に貴國の法律違反者を幫助すると云ふ事は出来ない。それに君等は何と聞いて來たか知らぬが、僕等の艦隊が愈々貴國を離れて歸航するのは、我國から申込んだ追加條約の調印後だから、それまでには未だ少くとも二三ヶ月の猶豫はある。だから君等も今日は一度引返して、他日改めて國家の承認を得てから來る事にするが可い。其時には欣んで我等の艦隊は、君等を歡



迎する」

と云つて、二人が必死に成つての肝腎の願は、どうしても聽容れて呉れなかつた。松陰はそれを聞くと、暫く黙然として何も言はなかつたが、重輔は堪りかねて、進んで出て、

「貴官の仰は確に御尤もであるが、我等の爲に、どうか枉げても御承諾を願ひたい。我々は今日貴艦に拒まれたら、空しく國法の犠牲に成つて死ぬ外は無い」と、云ふ事を、殆ど哀訴に近い口調で言つた。

然し、それでも米艦の將校は、飽く迄も冷然たる態度で、それを撥附けて、

「こんな暗い晩だ。どうして発見されるものか、警戒して歸ればいゝだらう」

と云つて、直ぐに艦載ポートを下ろさせると、殆ど強行的に、二人を海濱まで送還した。

松陰は、志を遂げるまでは誓つて踏むまいと覺悟して出た埠頭の土を再び踏むと、慨然として天を仰いで、

「あゝ天命ぢや」と、言つた。

米艦からの密告書と、海岸へ漂着した小舟の中の遺留品とが證據に成つて、二人は勿論佐久間衆山までが連累者として投獄されたのはそれから間も無い後であつた。

其時の二人の年は、何れも二十五だつた。

### (三十五) 大阪灣頭の黒船

松陰先生年譜を見ると、松陰が米艦に投じたのは安政元年三月二十七日で、陸上に還送されて縛に就いたのは其翌日の二十八日、江戸に護送されたのは四月十五日と云ふ事に成つて居るが、然も米艦が轉じて函館に赴く爲め下田を去つたのが又恰度此の日の事で、今度又五月に成つて引還して來た時には、其二十二日に林・井戸・伊澤等の幕府委員と追加條約十三ヶ條を定めた上、滯留約一ヶ月、翌六月の十日に成つて初めて全部我が國の領海を離れた。



幕府の方では、米艦が出發したので、漸とそれでホツと息を吐いてゐると、それから三ヶ月と経たない閏七月の十五日に、又候ふ今度は英國艦ウキンセス外三隻の軍艦が、英國水師提督ゼームス・スターリングに引率せられて突然長崎に入港した。是等の英國艦隊は、我が弘化三年即ち彼に在つては一八四六年にバルマーストンの新内閣が組織された結果、英國の對外方針に變更を生じて竟に英露開戦と成り、隨つて其餘波を極東にも及ぼしたので、極東露領を攻撃し且つ露國東洋艦隊の海上に於ける跳梁を制して自國の貿易船を保護せんとする目的の下に來航したものであつたが、スターリング等は其艦隊の行動上又將來の新利源開發上、我が國の港灣に寄航の自由を得る事の必要を認めて、それで其來航の機會を利用して交渉の爲めに出て來たのである。

さう云ふやうな事情であつたから、スターリングは極力露國の異圖を攻撃して、彼は歐羅巴を併呑して其饕餮の慾を満たさんとすると共に、貴國の領土たるサガレン並に千島諸島を侵奪した上、更に手を貴國の本土に伸ばして、鴟梟の慾を縦いまゝにせ

んとしてゐる、と言を盡して露國に對する我が憎念を挑發した上、此憎むべき露國を討伐する爲に、我英國艦隊に假根據地を與ふる意志を以て、適當なる貴國の港灣に、將來我が艦船の自由入港を許可せられたいと云ふ事を我が長崎奉行に要求した。

此事が長崎奉行水野筑後守からの飛書に依つて幕府に報せられると、幕府では色々又評議の結果、戰爭を幫助するやうな行爲を我國として採る事は斷然拒絕することにしたが、然も艦船の自由入港といふ事は、既に之を或る一國に許した以上、其他の國に許さないといふ事は出來ないので、急遽目付永井岩之丞を長崎に差遣し、戰爭以外の目的で入港するに於ては函館並に長崎を許すといふ事を、七ヶ條の協約書に定めて八月二十三日之に調印した。

此の協約が出来て、スターリング等の英國艦隊が長崎を出發したのは、其月の二十九日であつたが、其翌月の九月に成ると又、露國のプーチヤチンが函館へ來て『豫て要求して置いた通り通商條約の締結をしたい、聞く所に依ると既に米國に許されたこと云ふ事であるから、豫て筒井・川路兩全權委員に依て承認された既得權に據つて、我



が露國は續いて協議を進めたい」と云ふ事を書いた老中宛の書東を提出した上、我等はこれから直ちに其談判の爲に大阪に赴く心算である。それとも若し貴國の都合上、江戸の方を便宜とするならば、其旨を大阪の方へ通告して置いて呉れと云ふ事を言置いて歸つた。

此の報知が江戸政府に達したのは、九月も最早月末の二十八日であつたが、軍艦の方はそれよりもズツと早く、十八日の日に最早大阪灣に姿を現して、濛々たる黒煙を吐きつゝ、陸岸近く進入した。事が不意であつただけに京阪人の驚きは非常なもので、灣頭には大阪城代土屋采女正指令の下に、防禦配備が初まる。附近の諸藩から繰出された多數の武士が例の陣幕を張渡した假設陣地へ火事裝束で集合する、市民は市民で又、

「そら、異人船が来た」

と、云ふと、今にも戦争が始まりでもするやうに、家具家財を片附ける、女子供を遠方の親類へ避難させる。殆どもう全大阪中が引繰返るやうな騒ぎであつたが、其うち

に江戸からの指令があつて、會見は伊豆の下田ですると云ふ事に成つたので、大阪人が「えらいこツちや。異人船は大阪を黒焦にして西京の禁裏御所へ攻上る心算やろ」と、恐れを抱いてゐた事も杞憂に成つて、さしにも大阪人を脅かしたオロシヤの黒船も、十月の三日に成ると、俄に安治川口を出帆して大阪人の視界から影を沒した。

此の大阪へ行つた魯艦は、勿論ブーチャチンの乗つて居たフライゲート・デアナであつたが、然も此京阪を脅かした露艦が大阪を發して下田回航の途に向はんとした前一日の十月二日は大地を覆へす有名な安政の大地震が、關東を驚かした日であつた。西方の外寇侵逼難が終るか終らないに、更に又、關東の大地震！ 何と云ふ皮肉な對照だらう。然も今にして考へれば、此の安政の大地震こそは、水戸の老隱居齊昭侯の勢力的地盤に大影響を與へると共に、其齊昭侯を有力なる後援の支柱とする阿部内閣に大龜裂を來したものであつた。而して又、政治上、經濟上、軍事上に再び癒すべからざる巨大の創痍を受けた徳川氏の基礎が、漸く搖ぎ初めたのも、實に此の安政の大地震以後であつた。



私は曾て此の頃に行はれたのだといふ

泰平の世を大へんにゆり返し

上もゆらく下もゆらく

と、云ふ落首を讀んで、僅に三十一文字の諷刺詩が、當時民心の動搖と、幕閣基礎の動搖とを巧に併せ歌うて居るのを見て、感嘆措く能はざるものがあつた。上もゆらく下もゆらくとは、實に當時の世態を道破し得て至れり盡せるものである。

### (三二十六) 大地震と幕閣の動搖

安政の大地震は、單に地震としても大きなものであつた。當時此の地震に會うた人で今日まだ生残つて居る人が随分あるが、夫等の人の話に據ると、其搖り初めは夜の四ツ時、即ち午後の八時頃で、子供などは最早寢床へ入つた時分であつたが、さア地震だと云はれて出て見ると、もう殆ど其邊が一面の大火事に成つてゐて空までが眞赤に焼けて居たと云ふ事である。其位の地震であつたから、随つて被害の程度も大きな

もので、統計の無かつた時代であるから固より委しい事は分らないが、崩壊家屋だけでも一萬四千三百四十六軒、並に千七百二十四棟、壓死者及び焼死者は、男千六百十六名、女二千二百七十九名、此の總計が三千八百九十五名で、焼失區域の廣さは、幅に於て平均二町、長さに於て二里十七町に及んだと云ふ事が當時の記録に出てゐる。然もこれが單に市民間の災害統計で、武家は之に加はつて居ないと云ふのだから、以て其惨害の程度を察す可しである。

濛々たる黒煙は天に沖し、壓死者焼死者負傷者の呻吟號泣の聲が江戸中に物凄く響き渡つたと云ふのはに確に誇張を交へない本當の事で、中には求める血族の姿が見えないので、もう半狂亂に成つて聲を振絞り乍ら

「兄さん」

「お母アさん」

と呼ぶと、崩壊した家の下から、「此處だ、此處だ」と呼ぶ聲が聞こえるので、迂路迂路し乍ら、



「早く出て下さい、早く出て下さい」

と、聲を限に呼ぶと

「今出る、今出る」

と、云ふ中に、バツと其聲の所と思しい邊から下を廻つて来た火が、勢猛く燃え上つたかと思ふと「今出る、今出る」と云ふ聲が、段々細く成つて、終には絶果て、了つたと云ふやうな悲惨な話もあつた。

藩邸と云ふ藩邸は、此時大抵崩壊したが、其中に水戸の小石川屋敷もあつた。

其時刻には最早側用人であつた藤田東湖も齊昭侯の御前から下つて、奥の間で静に書見してゐたが、素破地震と聞くと、我を忘れて主君齊昭侯の居所へと駈出す所を、二度目の動搖に足を取られてバタリと倒れた。そして起上らうとする間も無く上から崩れて落ちて来る梁に壓されて、遂に無慘の死を遂げた。

一説には地震と聞くと一旦無我夢中で玄關まで駈出して行つたが、不圖「母は」と氣が附くと、又、我を忘れて奥の間へ駈込んだ其時に惨死したのだとも云ふし、又、

田口卯吉氏の日本人名辭書には

「東湖馳せて烈公の燕室に至り、促して園庭空濶の地に避けしむ、屋梁忽ち破裂して東湖を壓す、東湖逃るゝ能はず、遂に歿す年五十。烈公悼惜、命じて郷里に歸葬せしむ」

とある。どちらが事實であるか知らないが、然し何れにせよ東湖の死が齊昭侯の胸に大きな衝動を與へた事は、論を要しない所であつた。

齊昭侯の事業は、全部東湖の事業であると云つても可い位で、水戸の藩政革新も、弘道館の建設、文教武備の奨励充實、總てこれ東湖が君側に在つて終始獻替を怠らなかつたが爲であつて、東湖と云ふ側用人が無かつたなら恐らく齊昭侯も世間並の名君所で、一生を終つたに違無かつた。中には、齊昭侯を激烈な攘夷論者に仕立上げて、其晩年を誤らしめた者は東湖であると言つて、非難する人もあるが、然し水藩といふ攘夷論の大根源があつたればこそ、攘夷論が天下の輿論と成つて、遂に維新の大事業が出来たのであつて、此點に於て東湖の業績は如何なる立場から觀ても確に没す可か



らざるものである。

齊昭侯は、東湖が震死したと聞くと實際落膽した。何だか自分が地震の爲に負傷して、一時に手足をものがれて了つたやうな氣もした。

あゝ本當に、あの男は俺の爲に盡して呉れた。忘れもせぬ俺が幕譴を受けて、江戸へ呼出された時に、東湖は可なり重い病氣に罹つて寝て居たが、俺の大事だと思ふと、醫者や妻子の止めるのも振切つて、何アに此位の病氣で死ぬ乃公ぢやないと言つて、熱の高い身體で無理に俺に従いて來て呉れた。そして江戸へ着いてからは、一層病が重つて、殆ど一週間程と云ふものは流動食で榮養を攝つて居たが、それでも彼は毎日チャンと出仕を續けて他の者を驚かした。邸内では其時一同が、俺の事を主君は屹度非常な嚴譴を被るに違ひない。恐らく水戸家が取潰されるかも知れないと云ふやうな噂をして居たが、東湖はそれを聞いて、非常な覺悟をして、もう斯う成つたら徒らに騒いでゐても仕方がない、主君の家が立つか立たないかの羽目ぢや。拙者は此上はもう幕府に哀訴する外に道は無い、と思ふ。それには此俺はどうせ今日明日の知れない

重病で、如何して死んでも畢竟死ぬる命は一つぢやから、此の命を投出して、幕府の同情を求めよう、と云つて自殺しようとしたのを、俺が聞付けて、それは東湖にも似合はぬ以ての外の不心得ぢやと云つて段々と諭すと、あの男は泣いて詫を云つて、

「如何にも私が不心得でございました。既の事に犬死をして、御主君を一層の危地に置く所でございました。成る程仰せの通り、私が自害して死ねば、世間の嫌疑を餘計に深めて、東湖が死んで詫をするからには、何か其處に暗い事があるに相違ないと云ふ事に成るのでした。どうして私が其處へ氣附かなかつたのでせう」

と酷く感激した様子だつた。

それで愈々俺の罪が定つて、俺が隠居を命ぜられて、慶篤が俺の代りに乗出す事に定つてから、俺が其事をあの男に話して、

「お前もさう成つたら、續いて勤仕する氣はあるまいから、若しお前が其氣なら致仕しろ」

と言ふと、東湖は、



「餘人は知らず、私は到底お咎を免れまいと存じますが、若し幸に何事が無くとも、貴君のおいでに成らない御殿に勤める氣はございません。其曉には屹度どう云ふ寂しい砂濱へでもお供して参ります」

と、彼は熱誠な態度でさう答へた。

果して彼も罪を被つて、三年の間と云ふものは予と逢ふ機会も無かつたが、俺はあの男が獄中で作つたといふ正氣歌を讀んで、思はず泣かされた。

其東湖が死んだのだ。俺の師匠とも杖とも云つて可い筈の男が死んだのだ。俺は今後どうやつて俺の道を歩いて行かう。俺があの狡猾な伊勢守に引出されて、二度の乗出をやつたのも、あの男が傍に居て俺の缺陷を補充して呉れると思つたからだ。

俺は、あの男が死んだからつて今更止める事も出来ないが、あの男は俺の全部で、あの男の死は、確に俺の死だ。

とさう思ふと、齊昭侯の頬には思はずポロポロと熱い涙が傳はつて落ちた。

實際それからの齊昭侯は、氣の抜けた辛子のやうに、殆ど其潑刺たる英氣が無く成

つた。或る時には非常に激し立つて、發作的な眞似をするかと思ふと、急に又悄氣返つて無能に近いやうな愚劣な説を吐いたりした。兎にも角にも安政の大地震以後の齊昭侯の政治的生命は情力的であつた。

社會の侯に對する信任が、さう云ふ風で東湖の死を一轉機として段々薄らいで行くのを見ると、幕閣の侯を信頼する限度も随つて段々薄く成つたが、然し齊昭侯の勢力が情力的に減すると共に、幕府の箔も段々剥けて行つたので、阿部伊勢守はどうしても矢張齊昭侯を放さうとはしなかつた。そして幕府の態度に不平を抱いて、拗きつて引込んで了つた齊昭侯を、賺すやうにして又臺閣へ伴戻して、其機嫌を損じまいとする事に色々骨を折つた。

前からの行懸りもあつたが、其大地震の年即ち安政元年の暮に押迫つた十二月の二十一日に、英米二國に對すると同様の條約が到頭又露國との間にも締結された時に、其翌々二十三日に成つて其事を老中全員の連署で、京都所司代に傳達し、奏聞を遂げさせ、別に又武家傳奏の人達へ内々通知したのも、又、話は前後するが其翌年の安政



二年に諸國の寺院にある梵鐘を鑄潰して、大砲小銃に鑄造させる事の勅許を朝廷に求め奉つたのも、それから又斷然舊法を變改して大艦建造の禁を解いたのも、皆水戸侯を引止める爲の政策から出たもので、元年の十一月には、既に軍艦製造の事までも齊昭侯の専務にして、其歡心を買ふ事に務めてゐる。然もそれが果して、幕閣として當を得た政策であつたらうか。

### (三十七) 阿部内閣の倒潰

齊昭侯の軍備擴張政策に對する責任當局者の迎合！ これこそは實に幕閣をして其破綻の期を早めしめたものであつた。

我輩は曾つて、屢々、明治時代の内閣が、軍備擴張問題の爲に代々財政上の重傷を負うて、中にはそれが爲に自ら崩壞の運命に陥つた者も少く無い事例を見た。尾崎行雄氏が其軍備制限論中にも説いて居る通り、軍費の節減は、實に人類の文化を進め、軍備の底止する所無き擴張は、結局人類を蠻力鬪争の犠牲たらしめるものである。然

も何時の世、如何なる時代に於ても國防と云ふ事は、列國競争場裡の世界に免れ難い事であつて、世界の或る一國が、他國より優越した軍力を持つといふ事實が存在する以上、軍備競争は止む時があらうとも思はれないのである。

斯う云ふ場合に於て軍務の局に當つた者が、殆ど國力の全部を費しても、陸海軍備の擴張に力を致したいと思ふのは當然の事であつて、其場合に軍務當局と財政當局との利害衝突を見るのも、これ亦免れることの出来ない自然の數である。

齊昭侯の場合もさうであつた。侯は殊に早くから武術の奨勵に熱心した人だけであつて、幕府が軍備を怠つて居る事が久しい以前から氣に成つて氣に成つて堪らなかつたのであるが、然し責任當局者でもない自分が、妄に干涉する事が出来ないで、ムツ痒さを堪へてヂツと齒を食ひ緊つて居た。

所が何と考へたか、伊勢守が其處へ、どうか海軍擴張の事をお引受願ひ度いと云ふ事を申込んで來たのだ。

其時の老侯の得意思ふ可しで、侯は今までの幕府の自分に對する不満足な待遇の不



平も忘れて了つて、我から乗氣に成つて、従前一ヶ月に三度しか爲なかつた登營を、隔日毎と云ふ事にして、熱心に事務を見た。

伊勢守はそれを見て初めてホツと胸を撫下ろしたが、然し阿部内閣の危機は實に其時に胎んで居た。

固より此場合武備の充實と云ふ事は確に必要な事で、屢々外艦に見舞はれる浦賀の要塞内に、豫備砲彈が毎砲僅に十個しか無かつたり、直接外洋に面して然も陸軍の防禦配備の不完全な、房相沿岸の砲臺に、一貫目以上の備砲も無かつたり、海上防禦武力たる軍艦が一艘も無かつたりするのでは、一朝開戦と成つた場合に、如何に死力を盡しても到底優勢な武力を備へてゐる敵に對して勝味が無いのは知れ斷つた事であるが、然しそれには限度といふものがあつた。國家の財力の許す範圍内で、漸進的に行らねば成らぬといふ數理上の約束があつた。

所が齊昭侯のは、只攘夷一點張で、幕府當局が府庫の空乏を訴へても、そんな事は耳にも懸げずに、一意國防の充實に盲進した。

齊昭侯の此の傾向は、早く既に嘉永六年にも現れた事で、其時にも如何に海外の事情を知らなかつたとは云へ、侯は和蘭に托して軍艦蒸汽船五六十隻を一時に購入させるやうにと云ふ事を長崎奉行に命令させた程のお殿様振を遺憾無く發揮して居る。其お殿様振を充分に知つて居乍ら、齊昭侯の離反を恐れるが爲に、之に海軍の擴張を新に囑托したといふのは、確に阿部伊勢守の失策で、其結果は、齊昭侯自身寒暑風雨も厭はず現場に出張して熱心に監督して漸と完成した見かけは雛型通りの天晴立派な大艦が、前部の輕過ぎる爲に、幾許動かさうとしても自若として動かなかつたと云ふやうな滑稽劇を屢々繰返して、厄介丸と云ふ名を民間で附けられたり、

動かざる御世は動きて動くべき

船は動かす水戸もなき哉

と云ふ恥晒しの落首を張出されたりして、然も夫れが爲に受けた幕府財政上の打撃はそんな事が無くつてさへ窮乏のドン底にあつた幕府の府庫を、殆んど空しうする迄に成つた。



さう成ると、伊勢守は兎も角、其他の閣僚が承知しなかつた。

「御隠居にも困つたものだ。國防の充實といふ事は、必要に違ひないが、それが爲に肝腎の國力が疲弊しては堪らない。然もそれが滑稽な失敗ばかりでは何の爲に多額の費用を使つて居るのか分らぬ、勢州殿にさう云つて可い加減に止めて貰はなければ。」と、云ふ意見が、頻に出て、其苦情が悉く閣老阿部伊勢守の前に集まつた。これには伊勢守も少からず閉口して、齊昭侯の機嫌を成るべく損じない程度で、少し宛侯の要求を削減して行く方針を執つた。

今日の眼を以て観れば、此の事毎に當面を糊塗する妥協的小策を弄するといふ事が、確に阿部内閣の病根で、伊勢守が優柔不斷の宰相として終始したのも、實に此の病根の祟りだつた。所が伊勢守は、好んで其妥協策を取り續けた。

勿論此の當面糊塗策が成功したら、申分は無かつたのであるが、事實は伊勢守の豫期に反した。これには先づ齊昭侯が怒り出した。俺を閑地から引張出して、激務に當らせて置き乍ら、此頃は頻に俺の主張を阻止する。勢州がさう云ふ心算なら俺はもう

御免を蒙ると言つて、總てを抛つて逃さうとした。

驚いたのは伊勢守で、今度は極力閣僚間に齊昭英豪説を宣傳して、其反齊昭熱を壓抑しようとしたが、少壯閣僚殊に溜間詰の有力な諸侯等と聯絡を持つて居る上田侯の松平伊賀守忠俊や、西尾侯の松平和泉守乗全等は、此場合妥協的政策の國家を誤るものであることを固く主張して、どうしても屈しなかつた。此の消息は無論内通者があつて、手に取るやうに齊昭侯の方に聞こえて居たので、伊勢守が、侯の留任を懇望すればする程、侯の態度は益々強硬に成つて、

「全體貴公が不可ん。貴公が果して攘夷主義を捨てないつもりなら、苟苴逡巡の態度を止めて、牧野備前も、松平和泉も、松平伊賀も、凡て俗論黨は斷然處分して了はなければ駄目だ。それが出来なければ、恐らく君の内閣の壽命もあるまいし、俺も下手を見ない前に潔く勇退したい」

と、云ふ事を猛烈に主張した。これが實に安政二年六月の事で、斯う成ると伊勢守は、斷然齊昭侯を其勇退に任せ



て、開國派の爲さんとする所を爲さしめるか、然らずんば内閣を改造して、齊昭侯の意に副ふやうにするか、二途其一を採らなければ、到底其内閣の運命を維持する事が出来なかつた。

然も此時の政情がどうであつたかと云ふと、第一が攘夷派で、これは天下に隠然たる大勢力を保持して居る水戸齊昭侯を主班に、其崇敬者たる越前侯の松平慶永其他大廊下席の有力な諸藩が之に屬し、第二が薩摩の島津、佐賀の鍋島等大廣間列席の外様大々名で、是等の諸侯は親藩又は幕府昵近の藩侯等と、其從屬關係を異にして居るから、彼等が幕府の制令に對して服従の意思を示して居るのは單に表面的で、内實は常に反抗的態度を持ち、密かに潜勢力を養うて、自ら備へて居た。此の二つの勢力は確に幕府が其政策を行ふ上に於ての大なる脅威であつて、一朝此二大勢力の反抗に會つたら、幕閣は當然潰滅する外は無かつた。

阿部伊勢守が、隻手に尊王攘夷主義を以て水戸老侯等の勢力と相結び、隻手に結婚政策を提げて島津齊彬等の勢力と接着したのは、確に此間の消息を解して、巧妙に立

廻つたのであつたが、然も彼は第三の勢力たる溜間詰諸藩主の嚮背如何を度外に置いて居た。

元來 溜間詰の大名なるものは、單に制度の上にては、在府の場合毎月定日に城内黒書院 溜間に出席して、老中に謁し將軍の前に參候し、其際政務に參畫して老中と討議し、幕府の重大事に際しては、殊に老中と共に諸侯の前に號令する權があるだけの事に過ぎなかつたが、然も之に任せられる者が、徳川氏の世胃近親又は前老中、老中待遇者等勢力家が多かつたので、其城中席次の如きも常に老中の上位を占め、事實上は暗に幕閣の後見者として、重要政務に關する最後の決定權を握つて居た。

所が當時、此の溜間詰諸侯の盟主として隠然牛耳を採つて居た者は誰であるかと云ふと、熱心なる開國論の急先鋒で、尊王派の副盟主松平慶永等とは殆ど氷炭相容れない革新的の意見を持つて居た彦根侯の井伊掃部頭であつたから、攘夷派の水藩を其頭に戴く伊勢守とは事毎に衝突して、それが漸次に内閣の運命を窮所に追詰める形を採つて居た。



然し伊勢守はそれを知らなかつた。尤も井伊掃部頭は根が伶俐な男で、機運が熟すと見る迄は、決してそれを明らさまに表現するやうなブマはしなかつたから、或は氣が附かない方にも無理はなかつたのであらうが、然し臺閣の中には既に反齊昭熱の高い然も多感的な松平伊賀と云ふ人物が居て、それが事毎に齊昭の政策を攻撃する一方、井伊一派と手を結んで、内閣に開國主義を宣傳して居たから、それでなくては外交の局に衝つて開國主義的傾向を持つて居た三奉行や海防掛等は、一層開國説に傾いて、伊勢守が竟に齊昭侯に服従して松平伊賀、松平和泉等を辭職せしめた時には、伊勢守等に對する反抗派の内閣覆滅計畫は、もう火を附けたらいゝばかりに、全然手が廻つて居た。

此時に罷められた伊賀守と和泉守との二人の中で、殊に齊昭侯が目を着けて居たものは伊賀守で、候は備前、和泉の兩老中に對しては單に無能だと云ふ理由で之を排斥したに過ぎなかつたが、特に伊賀守に對しては、『あの男は廟堂俗論派の元兇である。あれを捨置いて、備前和泉の二老だけを誅首したのでは改造の實は斷じて擧がらない。

あれは今に屹度君の次席に据わつて、君の勢力を殺がうとするに違ひない。本來なら久世大和を除いて、備前、和泉、伊賀の三人全部を處分すれば申分はないが、それが出来なければ、和泉と伊賀だけを除外して、備前と大和とを居据わらせる外はあるまい。何にもせよ疾風迅雷耳を掩ふに及ばずといふ敏速の態度で、決斷することを希望する』と云ふやうな事を、伊勢守へ手紙で言つて遣つて居る。

齊昭の此の強要は、確に開國派との意見の衝突に原因したもので、自分の主張を貫く上に邪魔な臺閣の異分子を排斥したものに過ぎなかつたが、其結果は、好人物で無能な只員に備はつて居るといふだけの備前守と、伊勢守の姻戚で齊昭崇拜派たる久世大和だけを残して置く事に成つて、觀様に依つては、如何にも露骨な黨争振を發揮して居るやうに見えた。

敵黨の方ではこれがグツと癢に障つた。假令其分ならば愈々内閣の切崩しにかゝるぞと例の井伊掃部頭がギロリと眼を光らせて、先づチリチリと搦手から迫つて居た。そして眞綿で首を緊めるやうに、伊勢守の施政方針を攻撃した上、自派の勢力を代表



する前老中の堀田備中守を、臺閣へ割込ませる事を強要した。

伊勢守は斯うして初めて敵に面したのだつた。

彼の内閣改造案は是に於て、全く彼を窮地に陥れた。元來内閣の改造と云ふ事は、毀れ屋の根柢をするやうなもので、既に改造せねば成らぬと云ふ所に、弱點の存在を物語つてゐる。其弱點を補充するのが所謂改造の改造たる所であるが、然も如何なる場合にも、其れは一時的のつゞくり普請を意味してゐて、然も其組織材料の新舊錯落たる所に、第二次崩壞の運命が胎んでゐる。だから内閣を改造しようとする場合に、異分子を其閣僚に入れると云ふ事は禁物で、最初の内は兎も角も、しまひには屹度内部の軋轢摩擦から火が出て、折角苦心して拵へ上げたつゞくり普請が全焼して了ふことは、それこそ火を見るよりも瞭かな事實である。

伊勢守もそれを知らなかつたのでは無いが、伊賀和泉の二老中を馘つた其後に缺員を拵へて愚圖々々して居た事が悪かつた。尤も齊昭侯の意見では、此場合缺員の補充は一人で可からうと云ふ事であつたが、其人選を伊勢守が例の八方美人主義で、自分

等の眼識に叶つた者を斷然採用する事が出来なかつたから、其虚に覘込んだ井伊派が、間髪を容れない態度で、到頭自派の堀田備中を押附けたのであつた。然も八方美人主義の伊勢守が、それを斷りきれなかつたのは勿論の事で、彼は齊昭侯が堀田備中を、大任擔當の人として信任せず、個人としても之に好感情を持つて居ない事を充分に知つて居乍ら、見す見す自分の運命を窮地に陥れる異分子を、其臺閣に迎へ入れねば成らなかつた。

### (三十八) 開國論の崛起

堀田備中守が溜間詰格として、溜詰派の勢力代表をすると共に、一方又開國派の代表者として井伊掃部頭の推薦の下に臺閣に入つたと云ふ事は、彦根派の勝利であると共に、確に水戸派凋落の端であつた。

尊攘主義と開國主義とが、互に矢面に立つて戦ふ時は、斯うして段々近いて來た。水戸齊昭、松平慶永等の尊攘派は、開國派の堀田備中が入閣したと聞くと、伊勢守



に出抜かれたやうな気がして、息巻荒く伊勢守に迫つて行つたが、それを見ると伊勢守は其絶體絶命の窮地からスルリと身を躲して、首班の地位を堀田備中に譲つて、自分堀田の蔭に小さく成つて居た。

此の小政變があつた後は、時代は勿論堀田備中のものであつたが、然も此の堀田備中の執政時代は、従來の外交難に輪をかけて、内外の政局に一層の紛糾を加へた時代であつて、彼が開國派の代表者であつただけに、此間に處する彼の苦闘と云ふものは、一方ならざるものがあつた。

尤も彼の蔭には依然として舊勢力の一部を代表する阿部伊勢守が居たから、尊攘派の鋭鋒は、まだ直接に開國派の前に加へられることは無かつたが、其うち安政三年の七月二十一日に成つて、米國總領事タウンSEND・ハリス氏が、來朝するに及んで、形勢は徐々變つて來た。

全體領事を受けると云ふ事は、まだ彼我兩國の間に正式の取極は無かつたのであるが、水師提督ゼームス・アームストロングに依つて率ゐられた米國軍艦のサンゼン

ト號は、此時突然伊豆の下田へ出て來るとハリス氏を置いて、委細構はず、引揚げて了つた。

此のハリス氏の來任は、豫てから外人を毛嫌ひして、外國人と云へば、侵掠者、邪教宣傳者、惡風浸染者とのみ考へてゐた尊攘派の勿論之を極力拒絶せんとする所であつたが、然も數に於ても實權に於ても、幕閣に勢力を占めて居た開國派は斷々乎として、ハリス氏の駐在を容認した。此の一事は實に開國派の攘夷派に對する挑戰狀とも見るべきものであつて、齊昭侯等が幕閣の當局に對して拔くべからざる憤恨の念を抱くに至つた第一原因も又實に此時に萌して居るのであつたが、然も既に第一手を我が國の開發に着けたハリス氏は、此時又更に進んで、下田函館兩港に於ける借地權並に家屋購入權其他居住に關する諸權利を要求した。

これが亦朝野を驚かした問題で、曾て安政二年の十一月に出來た日蘭假條約には、和蘭との永年に互る舊交を懷うて、特に蘭人の爲に長崎出島の地を限つて住居其他の所有權を認めた事に成つて居るが、それを敢て他國に及ぼすと云ふ意思は無かつた。



所がハリス氏は、其和蘭との條約を楯に取つて、或る他の一國に許した以上、當然我が米國も之に鬻賣すべきものであると云ふ見地の下に、之を條約當然の附加權利として要求して來たので、それと聞いた攘夷派等は、外夷の者共に其足跡を我が皇土に印せしめたのさへ残念千萬であるのに、更に之に土地家屋の借入又は買入を許すと云ふのは外夷の根を我國に植ゑて侵略の地歩を成さしめるものであると云つて絶叫した。所が幕閣は又安政五年の五月二十六日に成つて、立派に文書の上で之を承認して、下田函館兩港に米國人の在住を認めると共に、更に又函館には副領事を特置することを許した。

斯う云ふ風に、尊攘派の主張と、幕府の實行する所とは、互に柄鑿相容れざるものがあつて、それが尊攘派をして益々幕府に反感を抱かしめるに至つたのは勿論の事であつたが、然も是等幕府の態度が、如何にも外力の壓迫に堪へないで、退嬰的に讓歩してゐるやうに見える事は、一層國內の人心を激昂せしめた。所が更に又、ハリスを中心として大問題が湧起つた。それはハリスが自ら參府して

老中に謁見したいと云ふ主張を初めた事であつた。此の要求は、ハリスの渡來後直ぐに起つた事で、彼が斯う云ふ事を言出したのは、重譯の書面に依る交渉の徒らに煩鎖な手續に屬するのみでなく、屢々誤解を招き、時日遷延の大原因となる場合が少くない事を認めたらからであつて、將來は兩國の國交に重大な關係のある事項に就ては、直接老中に謁見して商議する事にしたい、と云ふのが、其要求提出の趣意であつた。所が之に對する幕閣の意向はどうであるかと云ふと、何しろまだ阿部伊勢守が老中として餘威を保つて居た時であるから、流石に其處までは讓歩することを憚つて、急に其要求を容認しようとはしなかつたが、此時最も進歩的な意見を持つて居たのは、海防掛大目附目附の連中で、其中には筒井肥前守、岩瀬修理、伊澤、大久保等の新知識が含まれて居た。是等の人々は、幕閣樞要の人々が、徒らに國體の尊嚴を言立てにして、末節に拘泥してばかり居る結果は、竟に彼をして武力を弄せしむる基と成つて其爲に止むなく屈服するやうな事があつては、却つて外侮を招き國體を損する譯である、と言ふ主張の下に立つて、領事參府と云ふ事は、既に、和蘭甲比丹の先例がある



のであるから、米使ハリスも亦其例に倣つて參府登城させて、老中が之に面謁した所で、決して國威に拘る事はあるまい。と頻に其事を閣老等に勸請したが、矢張どうしても多數が拒絶説に傾いて居たので、堀田閣老も斷行し兼ねて、躊躇して居るうちに、ハリスの方では、益々其主張を強調して、其翌年即ち安政四年の二月七日と三月三日とに、又囂しく催促して來た。そしてしまひには此方にも覺悟があるぞ、と言ふやうな事を口頭でも文書の上でも仄めかすやうに迄成つたので、幕府でも到頭仕方が無から許さうかと言ふ所まで行つたが、何を言ふにも阿部閣老が對内政策上出来る事ならハリスの登城だけは阻止したいと云ふ意見を固持して居るので、中々直ぐ實行と云ふ手筈には進まなかつた。

然し其うちに和蘭領事からは清國に於ける英佛聯合軍の勝勢を報告して來て、若し愈々清國が最後の敗衄をしたら其餘波が日本に及ぶのは心定だから警戒しろ、と言ふ事を注進して來る。幕閣の急進開國派岩瀬修理などは又、ハリスから聞いて來た海外の目まぐるしい程急激な國際的生存競争の有様を述べて、「英佛の強要を被つて不利益

な條約を締結さされる様な事が無い前に米國と平和の裡に充分我國の利益を考慮した條約を結んで置く方が可い。それにはハリスを怒らせないやう、早く彼の言ふ所を聽いて遣ふことが必要だ。と云つて盛に其主張を反復する。もうさう成つては對内政策などを顧慮してゐる事が出来なく成つたので、愈々其年の六月に成つて、

「參府の事は承知したが色々國內的の事情もあるに因つて其時期は改めて當方から通知するから、それ迄待つて呉れ」

と、云ふ事を、下田奉行に言はせた。

すると又、其時分からハリスは新主張を初めて、大統領の書翰は直接將軍に渡した

いから、其都合をして呉れと言ふ事を言出した。  
只見る幕府は踏んだり蹴つたりの有様で、此方が一步を退けば、向ふは又一步を進め、随つて退けば又随つて進み、捨て、置けば何處まで彼は附上つて來るか知れなかつた。

然し最早話が出府を許すと云ふ所まで進んでゐる以上、後は只將軍に謁見させるか



させないかと云ふ問題が残つて居るだけの事なので、到頭七月の二十一日に参府及登城謁見の事悉く之を承諾して、それから三ヶ月を経た十月の二十一日に、愈々彼の素志通り、ハリスを江戸城内に延いて、禮装の各大名列座の席上で、將軍に謁見せしめ、ハリスが來てから一年目に初めて大統領の書柬を受領した。

會て其年の五六月迄は屢々躊躇逡巡して、單にハリスを参府させて老中が之に面會すると云ふだけの事にさへ難色のあつた幕閣が、どうしてさう云ふ急轉的態度に出たのであるかと云ふと、それは確に外力の壓迫、急進派の躍起運動が與つて力あつた結果である事は言ふ迄もない所であるが、然も其間にあつて、堀田備中守が、安政三年十月二十日から外國事務専任と成つた事と、會て自ら對内方面を擔任して専ら諸勢力の調和に當りつゝあつた阿部伊勢守が、翌安政四年の閏五月初旬頃から重病に罹つて、全く登營を絶ち、六月十七日遂に三十九歳を一期として永眠した事は、政界の當面に於ける暗潮の波動を察すべき重要事實であつた。

噫然も、それで果して尊攘派が黙つて、外夷の將軍謁見と云ふやうな事を視て居た

らうか。伊勢守の同盟者であつた島津家や、水戸系の大藩達が、指を啣へて引込んで居たらうか。政界の分野は、實にこれによつて益々明瞭に、攘夷開國兩軍の旗幟は彌これで鮮明に成つた。

### (三十九) 幕府反抗の大旗

第一に先づ反抗の大旗を翻へしたものは、水戸の齊昭侯であつた。侯は元來が堀田備中を蘭癖家又佞佛家として擯斥し、最初阿部閣老から内相談があつた時にも、「愚眼にては大臣擔當の人とは存せず、且一體の据わりも宜しからず」と、言ふ手紙を遣つて居る程であるから、愈々堀田備中が幕閣の外務大臣と成つてからは、幕閣に大不平を持つやうに成つて、安政四年の正月以後は殆ど一回も登營しなかつたが、伊勢守が罹病して、竟に卒去すると、堀田内閣はもう明かに侯の前に敵意を示して、彼等がハリスの要求全部を聽從する事を閣議に於て決定した翌々日、即ち、安政四年七月二十三日を以て、公式に齊昭侯の機務參與を廢罷する旨を通告した。



齊昭侯が此の挑戦狀を投附けられてブンブン忿つて居ると、其處へ又重ねて、幕閣は侯の怒の火に油を注ぐやうに、翌月の八月五日を以て、ハリス登城面謁の事を、他の二親藩と共に三家の一たる水藩に封書を以て通達して來た。

此封書は諸藩に公告する前に豫め三家の意見を聞くと云ふ意味で先づ發せられたものであるが、溜問詰の諸侯は夫れより先既に七月の二十日に於て内諭を受けて居るし、又諸奉行は同じ月の二十四日に其口達を受けてゐた。そして夫れが三家への通達と成り、更に一般諸侯への布達と成つたのは、八月十四日の事であつた。

此時の布告書には、外人謁見の先例は寛永以前にも屢々あつた。今度のは其先例を趁ふたものだと言ふ理由書が附加されて居たが、然も此の内諭や通達や布告が、夫々の手續を以て受信者に到着すると、反對論は一時に臺閣の外に勃發して、先づ第一に溜問詰の諸大名が建白書を提出して、先づ斯の如き重大事を豫め溜問詰の者に諮詢しなかつた手續上の失態を攻撃し、且將軍外蕃延見の事を非として、登城參府共に許す可きものでない、と云ふ事を可なり強烈に主張した。

溜問詰大名を代表する堀田備中の内閣に對して、斯うした一種の不信任狀を與へると云ふのは、一見甚だ不可思議な事のやうであるが、これは恰度貴族院の研究會が、自派から大臣を送つた内閣に屢々反對の決議をしたのと同じ關係であつて、其處に自づから溜問大名の權威があつたのである。

大廊下大廣間の諸侯に至つては、流石に之を抑止するまでの事は無かつたが、其主義的色彩が皆比較的鮮明であるだけに、其反對意見の主張も亦溜問諸侯に比して一層猛烈であつて、或は之に附帶決議を爲し、或は斯の如き國家の重大事に對しては、將來幕府に於て獨斷擅行せず、廣く之を衆議に聽かんことを要求した。

何等の恩怨關係もない一般諸侯ですら其有様であるから、それで無くてさへ殆ど對敵關係にあつた水藩が、重ね重ねの暴慢な態度に極度の憤慨を感じたのは言ふ迄も無い事であつて、齊昭侯は例の通達書を見ると直ぐ、尾張侯の所へ人を遣つて、連名で幕府へ抗議書を送つて、ハリスの入城を抑止しようとしたが、これが先づ第一に捨てて省みられなかつた。



さう成ると今度は少し焦り氣味に成つて、又別の使を今度は熱心な尊攘派の一人で、然も齊昭公の崇拜者である松平慶永侯の所へ遣つて、どうかしてハリスを中途で食止める方略をお互に講じようでは無いかと云ふ事を言はしめた。

此時使者に行つたのは、安島彌次郎と云ふ侍であつたが、彼が越前侯に會はうとして面謁を求めると、有名な篤胤門下の尊王家中根鞆負が出て應對して、使者の來意を越前侯慶永に申告した。

然し其時の慶永侯の意見といふのが、餘程變化して來て居て、是迄のやうな攘夷一點張では無く成つて居たから、固より幕府當路者の態度に賛成はしてゐなかつたが、幕府と争うて迄も前議を覆へさせようと云ふやうな考は無かつた。随つて齊昭侯への返事も、

「それでは御一緒に、ハリスの入府阻止に力を致しませう」とは成らなくて、

「もう一旦彼に通告した以上、今更仕様が無いでは御座らぬか」

位の所に成つた事は、當然推察せられる所である、

果然、今度こそはと齊昭侯に大きな期待を置かれて出て行つた使者の彌太郎は、悄然と使命を空しうして歸つて來るより外は無かつた。

彌次郎から其復命を聞いた齊昭侯は餘りに事が意外なので、最初のうちは何だか嘘を聞いて居るやうな氣がした。幾許何でもあれ程熱心な攘夷の主張を持つてゐる慶永侯が、「今更仕様がないぢやないか」と言ふやうなそんな冷淡な挨拶をする事があらう筈は無いと思つた。然し事實は明かに事實である。侯は、此時、越前侯が何處までも俺を信じてゐて呉れると思つたのは間違だつたのだ、と云ふ事に氣が附くと、急に眼の前が暗く成るやうな氣がした。凡ての勢力が自分から離脱して、一人去り二人去り、そしてしまひには寂寞たる曠野に、自分だけが孤立するのだ、と思ふと、妙に心細いやうな氣もして、あゝ東湖が生きて居たら、と云ふやうな愚痴も出た。

然し、夫れを表へ現すやうな齊昭侯では無かつた。侯にも矢張り水戸家一風の飽く迄も剛情我慢な所があつた。何糞ッ負けるもんかと云ふ其剛情我慢な心持が、今や其



勢力の急激な凋衰を感じて極度に尖つてゐた神経に觸れると、侯は忽ち沈憂の底から憤激の絶頂に撥き上げられた。

齊昭侯の京都入説は、實に此の微妙な反動から生れた結果だつた。騎虎の勢に乗つた侯の攘夷論は水戸家傳來の尊王主義と結び着いて、幕府に得られず、自己の崇拜者にも得られなかつた「熱烈な同感」は、新に京都に向つて求められた。

侯は其激し立つた感情を其儘筆に移して、二人の姉弟である鷹司政通と、二條齊信とに書送つた。そして又、九條關白に宛て、自分の年來の主張、之に對する幕府の態度を事明細に書いた建白書を、其後から追駈けるやうに送つた。

侯の頭腦の中には、此時國家の前途に對する憂慮と、幕府の態度に對する鬱憤とで、充滿に成つて居た。そして其憂慮を幾分でも散じ、其鬱憤を少しでも晴らす手段としては、さうした手紙を京都へ書いて送るより外に無かつた。

或る時は、蘭學者の淺識に迷はされて、目前の糊塗策にばかり努めて居る幕府當路の失政を罵つて遣つた。此の日本を侵掠せんとする洋夷に、毎時も乗せられるやうな

眞似ばかりして居る老中達にも困つたものだと言ふ事を慨いても遣つた。幕府は勝手に恐怖し、勝手に驚駭し、國內の民心までが其恐怖と驚駭とに共鳴して居るやうな事を云つて、只々退嬰謙讓の態度を採つて居るが、我が國民精神の底流には、今日現に潑刺と傳統の血が躍つてゐる。否寧ろ廟議の優柔不斷をむづ痒く思つてゐる。「攘夷」と云ふ一聲が懸かれば、彼等は直ぐ其刺戟に感じて、鬱然と奮起して外敵に當るに定つてゐる。我々が其事を言つて幕府の當路者を責めると、當路者共は只「金が無い」の一點張で追拂ふが、それは金が無いのではなくて、誠意が無いのだ。本當に攘夷をする氣に成つて、どうしても國家の前途の爲には、國防充實を徹底させると云ふ確固たる決心さへあれば、まだまだ行政整理を行つて、國防費を捻出する餘地は充分にあるのだ。それをしないで只尻込ばかりしてゐては、國威が何處で立つ。此頃は又、ハリとか云ふ夷國の小吏を、江戸城へ參入せしめて、將軍に謁見させると云ふ手筈を進めてゐるが、これなどは實に非常な後患を貽すものである。それで我々は極力之に反對したが、幕府は之を用ゐようともしない。此上は最早朝廷の御威光を以て幕府に



御殿命を願つて、夷人の參府を阻止する外は無い。僅に一人の夷狄の如きは採るにも足らぬ事のやうであるが、彼の後には隙を覗つて居る幾多の外蕃がある。それをも顧みず妄に彼の言ふが儘に聽従して、前例の無い蕃夷入城と云ふやうな事をさせる結果は、更に彼等をして我が國威を侮蔑せしめて、今後又どういふ難件を迫つて來るか知れない、だから此際是非朝廷の方で御奮起に成つて戴きたい。諸國諸藩の中には、朝旨を奉じて其貫徹に力を盡さうとする者が現に幾許もあるのである。と云ふ意味の事も書送つた。然し前言つた通り、凡てが憂國の至誠と、當路者に對する憤激の念に基いたもので、此時の齊昭侯の心には、決して朝廷の勢力を借りて、幕府を倒壊しようと思ふやうな意志は微塵も無かつた。只どうかして目前の夷人の入府を阻止したいと云ふのが、其豫期した目的の全部だつた。

然も其の結果はどうであつたかと云ふと、肝腎齊昭侯が、望んで居たハリス入城阻止と云ふ事は到底其目的を貫徹することが出來ないで、内心ハリス入城に反對の意志を持つて居た者も、結局一列に直垂、狩衣、大紋、布衣、素袍等の式服を着用して、

目前に米國大統領の書翰を捧呈する夷人ハリスの謁見禮に立會はねば成らなかつた。そして其次には又、愈々通商條約の締結要求といふ事が當然の順序として起つて來た。

#### (四十) 公武兩勢力對抗の序幕(堀田備中と岩瀬肥後)

米國領事の參府謁見強要に次いで、又、米國の通商條約締結強要！斯うして幕府の當路者は、段々デリデリと追詰められて行つた。齊昭侯の豫め憂ひた所が、正しく事實と成つて現れたのである。

今日から考へて見れば、此時に於ける米國の要求は、決して鴟梟飽くなきの慾を満たさんとしたものでも何でも無く、謂はゞ開港に關する神奈川條約の缺陷を補はんとする爲の當然の要求である。神奈川條約に現れて居る開港と云ふ事は、只名義上の空疎なもので、いくら開港が承諾されても、肝腎の通商關係を結ぶ事が、他日に延期されて残されてゐるのでは何にも成らなかつた。元來がこれは最初の條約に依つて既に定められなければ成らぬ事であつたが、其論難の爲に交渉が遷延するので、ペルリは



之を濟崩しにするツモリで、先づ前提條件文を定めて歸つたのだつた。即ち、今度は其「開港」と云ふ空虚な重箱の中へ、通商條約と云ふ中味を入れに來たのであつて、前に開港を約した幕府としては、どうしても支拂はねば成らぬ勘定だつた。

此の米國の通商條約締結要請は、安政三年の七月頃から、既に和蘭領事からの通報に依つて我が幕府當路に豫知されて居た事で、當時和蘭領事館は、通商條約の締結要求が殆ど日本に對する世界各國の要望である事を告げ、若し日本が是等の要求を無謀に拒斥するやうな事があつたら、恐らく日本は四周に敵を受ける事に成るだらう、と云ふ勸告を、其通報と同時に致した。

當時はまだ伊勢守が臺閣に勢力を占めて居た時代であつたが、此の豫告が致されると直ぐ八月四日に會議を開いて、之に對する處置を議し各有司の意見を徴した。此の時斷乎として貿易開始の主張をしたのは、在長崎の永井玄蕃頭、岡部駿河守を初め、比較的外國事情に通じて居る大目付目付の人々であつて、是等の人々は皆、眞の強兵と云ふ事は富國の後に來るもので、現在の如く貧弱な財政の下に無理算段をして迄、

苦し紛れの不徹底な國防充實を圖るのは、決して國家を永久の幸運に置く所以の方途では無いと云ふ事を、盛に主張したが、伊勢守と云ふ者が居る以上、幕府が攘夷派大藩の反抗勢力を無視して迄も、其進歩意見を採用することを爲得なかつたのは、言ふ迄も無い事だつた。

所が其年の十月に成つて堀田備中が外國事務專任に定まると、形勢が急に一變して、開國の政策は驚くべき進歩を示した。貿易取調係といふものが特置されて、大目付跡部甲斐守良弼、土岐丹波守頼旨、勘定奉行松平河内守近直、川路左衛門尉聖謨、目付岩瀬修理忠震、大久保右近將監、勘定吟味役堀越藤助、中村爲彌が、相並んで新任命を受けたのも此時の事であつて、其取調が漸次進むと共に、幕府の對外人態度は、其後斥攘主義から、漸く近接主義に轉じ、次いで又親交主義に變つて行つたが、安政四年十月の將軍謁見の如きは、全く其傾向を事實の上を示したものであつた。然も此時米國領事ハリスが江戸參府をしたと云ふ事は、更に幕府の態度を開國に傾けたものであつて、ハリスは十月二十一日登城謁見の後、二十六日に堀田閣老を其私



邸に訪うて、世界大勢の推移と其新勢力の極東に波及する影響を陳べて、此際日本が開國をして通商貿易をすと云ふ事は、自ら其孤立の地位から免れる所以の方途であるばかりでなく、大いに國を利する基である、と云ふ事を諄々として説いて、少からざる刺戟を堀田閣老に與へた。が、幕府は其結果としてハリスの供述を筆記した物を諸侯に示して、之に關する意見を徴した一方、着々通商條約締結の計畫を進めて、豫め下田奉行井上信濃守、目付岩瀬肥後守にハリスと下交渉を爲さしめた上、十二月二日堀田閣老は再び自邸に於てハリスと會見し、彼我の交渉應接十三回の後、竟に翌安政五年正月十二日古來の先例を破つて、實に日本空前の通商條約を結んだ。そして、其中には米國官吏の内國駐在及び其自由旅行權の確認、從來の下田函館二港以外、更に神奈川、長崎、新潟、江戸、大阪、兵庫等を或る年月の後に開市する事、原則としての自由貿易、領事裁判權等の事が含まれてゐた。

此の通商條約が、其腹案の出來た十一月十二日頃に於て、前にも言つた通り、幕閣はハリスの供述筆記を、三家は勿論溜間詰並に在府の大廊下大廣間の諸侯に交付し、

一般諸侯へも之と相前後して同様の旨を傳達して、愼思熟慮の後公正なる意見を供述すべき事を命令したが、更に十二月に至つて、ハリスと井上信濃岩瀬肥後兩全權の間に、大體の草案が出來ると、一方に於ては前例に隨つて條約の勅許を得る爲め、豫め當時の京都所司代脇阪淡路守から廣橋前大納言光成、東坊城前大納言聰長等の武家傳奏衆を介して、九條關白尙忠を経由し、其草案の要項を上奏せしめた後、更に又事の茲に至つた経過の概略を奏上し、口頭を以て草案の説明を補充せしめる爲め、十二月十一日を以て儒者林大學頭、目付津田半三郎の兩名を上洛せしめ、これと同時に、其月十五日又諭達を一般諸侯に發して、此際斷然古制を破却して、新に外國貿易を許可した旨を告知し、二十九日には特に溜間詰、在府の大廊下大廣間諸侯に登營を促して、條約締結の止むを得ざる理由を説明した。

此日の柳營は、實に記録に値する嚴肅な光景を以て満たされたものであつた。

徳川氏の祖法といふ大きな偶像に對する破壊の斧は、實に此の記念すべき日に於て下されたものであつた。此處に呼出された諸大名は、何れも豫め其内容を知つて居た



ので皆が強く緊張した心持で、ヂツと其破壊の宣言の下されるのを聽いて居た。其時は皆脇目もふらず正面を睥視めて居た。

此時政府委員席を見ると、老中全員も皆残り無く出席して居た。そして其後には、少し下つて海防掛大目付土岐丹波守、目付鶴殿民部少輔、岩瀬肥後守等が居流れて居たが、やがて座が定まると、堀田閣老は静に口を開いて、總論的に開國の竟に止むを得ざる所以の綱領を演述した。彼の聲はさう大きくは無かつたが、座がシーンとして居たので、彼の言ふ事は、能く諸侯の耳に響いた。

閣老は、演述を終ると、ズツと座中に眼を配つたが、静に又、『此事に就いては既に充分所論を盡した事で御座るから、何れも方にも格別の御異議は御座るまいとは存するが、然し御存じ寄りも御座らば、腹藏なく充分の議論を爲されたい。就ては只今、海防掛の者に米使と折衝の始末を報告致させますから』と云ふと、後を振り返つて、土岐丹波守等の方を見た。すると、其時海防掛を代表して進んだものは岩瀬肥後守忠震だつた。彼は當年四十

歳、正に人生の分別盛り、事業盛りであつたが、流石の彼も苦慘な外交の難局に衝つて、心を勞した爲か、其鬚髮に二三本の白髪を交へて居るのが、妙に目に著いた。

然し彼は其相貌にも似ぬ若々しい元氣の溢れた明晰な口調で、條理を正して其顛末を詳述した。彼の一言一句には他を燒盡さねば止まない熱烈な至誠が籠もつて居て、愛國心が決して尊攘派ばかりの専有物でない事を思はせた。多少の反對意見を持つて居た者も皆、熱血の迸り出るやうな彼の烈しい言葉を聽いて居ると、自づから其威に打たれるやうな氣がして、しまひには彼の顔を正視し得る者も無かつた。

彼は悠揚として自分の管掌事務の報告を終ると、積重ねた重要書類をキチンと揃へて静に帛紗の上に置いて、『如何でござる。御議論はし御座らうか。先程からも申上げた通り、今度の條約は我等國家の爲を思ふて心血を注いで締結したもので御座るが、何れも方に御意見が御座らば、此場で明かにそれを御表示願ひたうござる』と先刻堀田閣老がしたやうに、重ねて又ズツと一座を見廻して尋ねたが、岩瀬の流



暢な然も力ある雄辯に魅せられた諸侯等は、沈黙して一語を發する者も無かつた。

實際此の時の諸侯間の外國に對する意見は、餘程以前とは其傾向を異にして居たのであつて、水戸一門は格別、其他の諸藩に至つては、福井藩の如きを以てすら、從來の鎖港攘夷説から一躍して開國進取説に豹變し、外様大名の島津齋彬侯の如きも亦、勤王主義者として然も開國進取の止むを得ざる事を認めて居た程であるから、其餘の確乎たる主義主張なく、單に大勢に雷同附和するに過ぎない諸藩や、深く自ら韜晦しつゝあつた諸藩が、敢て條約締結に對して非難の言を放つ者が無かつたのは、蓋し當然の事であつたが、岩瀬肥後守は、ヂツと満座の中に端座して待つて居ても、竟に一語を發する者も無いのを見ると、念を押すやうに、

「それでは何れも方此の條約には御異議が無いものと認めて宜しう御座るな。今日何の御異議をも仰せられいで、他日彼是の御沙汰のないやう、忠震後日の爲に之を確め申す」

と云つて、更に暫く其返答を待つた後に、靜に會釋して自分の座に引退つた。

此日の事が終ると、翌日は更に又、帝鑑間以下の諸侯を召集して、同一の手續で、同様の事を達したが、これも矢張其場で面と向つて堂々と反對論を主張する者は無かつた。

只此際最も激烈に正面から反對論を振擧して打つて蒐つた者は、御三家中の水戸齊昭侯だつた。

齊昭侯はそれより前、ハリスの演述筆記が十一月の中旬に配られた抑もから、もう喧嘩腰に出て、其臣下ですらハラハラして御見消しを内願する程の過激な論調で、雜りつ氣のない攘夷論を主張し、ハリスの要求する所の如きは、我等に問ふ迄もなく斷然拒斥すべきものであるといふ意見を痛烈に述べて居た程であるから、二十九日に海防掛の川路左衛門尉、永井玄蕃頭兩名が、參候して條約締結の止むを得ざる所以を説明しようとする時、齊昭侯は突如頭から叱り附けるやうな態度で、

「老中共は何と云ふ呆氣ぢや。あのやうの條約を結ばうといふ心は、全體我が日本皇土の人としては許すまじき罪惡の心ぢや。これと云ふのも堀田備中や松平伊賀などの



輩が、天朝を天朝とも思はず、將軍を將軍とも思はず、徒らに夷狄の學に心を魅せられて半夷狄の心に成りかけて居るからの事ぢや。何も最早聞く事は無い。此上は皇國の爲、將軍家の爲に、兩人を切腹させ、ハリスの首を斬つて獄門にかける迄ぢや』と満面朱を注いで、二人を睨みつけた。

川路永井の兩人は、此の權幕に恐れを成し、恰度其處へ來合はせた一橋慶喜卿が、兩方を宥めるのを好い機會に、這々の體で引返して行つたが、幕閣へ歸つて其事を報告すると、堀田備中は鼻で笑つて、

「フン、あの狂人親爺に、何が出来るものか」

と、言はんばかりに冷嘲に附してゐたが、其處には、最早あの親爺も時代から捨てられようとして居る。論より證據、あの人の共鳴者であつた筈の越前も島津も、今では明かに俺達の仕事に賛意を表してゐるぢやないか。あの老人は、幻滅の悲哀に打たれて、可哀想に氣が狂つたんだらう、と云ふ優越感が、自派の勝利を思はせた。

然し彼の此の考へは、實際少し割引する必要があつた。如何にも水藩の勢力が、攘夷派の漸減と共に多少凋衰したのは事實であるが、夫れにしても苟くも徳川氏の親藩として、假令情力的にもしろ尙多くの崇拜者を率ゐて居る齊昭侯を、さう云ふ風に輕視し過ぎるのは確に誤つた話であつて、此時既に京都へ植込んだ尊攘論の苗は、眞

の力ある同情者に飢ゑて居た宮廷有識者の胸の中で蠢々と伸びて、俄に刈取る事の出來ない大きな勢力に成つて居た。そして夫れに、外様の大藩、殊に徳川氏に對して深刻な怨を持つて居る長藩などの勤王運動が絡はりついて、それが京都と關東との二大勢力が相對して抗敵關係に立つ素地を作つて居た。

然もそれを堀田備中も、幕末の三傑と言はれる岩瀬肥後すらも覺らなかつた。

## (四十一) 活氣横溢

堀田備中が、如何して京都を閑却して居たか？ これは維新史を研究するに於て、是非共其注意を逸す可からざる問題である。

それは第一に慣例上の問題である。徳川氏は皇室から御大政の絶對委任を受けて居



て、徳川氏の施政に對しては、皇室から何の御干渉も無いと云ふのが從來の先例であつた。寛永の時にも、其他の場合にも、一切の對外關係を一切幕府限りで處理して、それが何の抗議も受けなかつた。それを阿部伊勢守に至つて初めて、事一國の消長に關する重大事であるからと云ふので、事毎に奏上する新例を開いた。固より新例と云ふ程であるから、假令如何なる重大案件にもせよ、幕府から外交頭末を報告すると云ふ事は、原則に對する例外であつて、慣例の上から云ふと、是非さうせねば成らぬと云ふ事では無かつた。だから朝廷の方でも、それに對しては形式的の御會釋だけで、安政元年下田函館開港に就ての日米暫定條約が締結された時にも、豫め御裁可を経る事なく、事後承諾を願ひ奉る形式で、調印後に其事を奏上したのに對して、何の異議も止めず、其儘單純に勅許に成つて居る。だから今回も無論、前以てお届け申上げる形式で、單純に勅許を賜はるだらうと閣老等は思つて居た。

それから次に第二の問題としては、京都公卿の窮乏無力と云ふ事である。政權が武門に歸して以來、京都は殆ど武裝を解除せられた軍隊の如く、爪牙を拔去られた獸王

の如き有様であつて、從來武士の上に立つて統率指揮の權を執つて居た藤原一門の公卿は其兵力と共に財力を握有し去られて、今や只官位を有する泥人形と化し去つて居る。そして其結果は關白の尊貴を以てしても、烈しい窮迫の爲に、屢々黄白を以て動かされること云ふ情ない状態であつた。大阪の留主居役と同じく京都にも亦諸藩の留守居役と云ふ者が置かれてゐて、夫等の者が借金までして公卿等と交渉を持つ事に努めたといふ事を屢々聞くが、是等も確に京都の公卿が金力で動かされ、往々亦金力で買はれんことを自ら要求した傾があることを證明するものである。斯う云ふ風であつたから、公卿等が苟且にも幕府の勢力に對して反抗するやうな言議をする事はあまないと、幕府では確く信じて居た。

所が安政四年十二月の十四日に江戸を出發した林大學頭等が其二十一日に京都の所司代邸へ着いて、當時の所司代本多美濃守忠民等と内協議の上、中二日を置いた二十四日に、武家傳奏の東坊城前大納言聰長、廣橋前大納言光成の二卿を呼んで、嘉永六年以後の涉外關係を詳述し、ハリスの演述筆記を提出して、



「右様の次第で御座いますから、幕府に於ても已むを得ず米使の願を差許す事に議定致しました。世間には何か幕府の處置を弱腰で、外國の武威に壓されて居るやうに申す者もあると承りましたが、今回の條約などは、實に我が皇國の利害を深く考へて、十數回の論難を重ねました未定めたものに御座います。就ては開きます港の義も先方の申し條では十港以上と申しましたのを、様々に言ひ拵へて凡そ五港に迄減じました。近頃名を尊王の大義に借りて攘夷の論を唱へる浪士なども、此の京邊には御座る由を承りましたが、今日に至つて攘夷などは唯一時を快うするに過ぎぬ無謀の空論にございます。何卒兩傳奏には、篤と此邊に御心を留められて、速かに條約勅許に相成るやう御執奏を願ひまする」

と、只管懇願した。兩傳奏は之に對して、何事も深くは言はず、「然様か」

と、云つて引上げて行つたが、即日朝廷へ參ると、急いで奏上の手續を採つた。所が當時の京都と云ふのは、決して幕府が百二十里を隔てた江戸で想像して居た様

な状態では無くつて、齊昭卿からは充分に手が廻つて居る。それに絡まつて西國の大藩が勤王運動を内々で初めて居る。豫てから京都を中心として濃厚なアトモスヒアを作つてゐた尊王斥覇主義が、諸公卿の潜在意識から蘇つて來て居ると云ふ風で、折もあらば關東を壓さへ附けて京都の威光を見せて置いて遣らうといふ意氣込は少壯公卿の間に勃然として起つて居た時であるから、對米條約締結と云ふ事が朝議に上ると、さア此機會だと云はんばかりに頑張り出した。

其時の公卿會議は、實に今迄に餘り見た事もない活氣横溢たるもので、中にも梨木町の内大臣三條實萬卿は萬里小路卿と連名で、激烈な建白書を提出して、「外夷共は通商貿易に事を托して、人民を誑惑し、我國併呑の野望を逞しうせんとするものである、斯かる輩の申す事は速かに拒斥して攘夷を實行する事が、國家の爲である」

と云ふ事を主張すると、大勢は悉く其說に傾いて、關東と特別關係にある鷹司前關白がそれを覆へす事に盡力しても遂に朝廷では攘夷論が勝を制して、



「一切の政務は幕府に任せてあるが、特に重大の政務に關しては、豫め太政官符を請求して天下に布告する手續を探るべきである。それをしなかつたと云ふ事は確に違法である。曾て安政二年に梵鐘を銃砲に改鑄しようとした時にも、特に太政官符を請求した先例がある」

と、云ふやうな事を引つ懸りにして、中々條約の勅許が下らなかつた。

さアさう成ると今度は買収運動で、黄白は、あらゆる縁故を辿つて暮夜の門に飛んで入つた。黄白以外の軟化運動も色々講せられた。或は姻戚關係を利用して、或は其他の特殊關係を利用して、幕府は近代の内閣の秘密運動よりも、もつと烈しい、もつと露骨な手段を探ることを辭さなかつたが、當時の公卿の幕府又は諸藩に對する關係と云ふものは實に錯綜たるものであつたから、幕府の運動が微に入り細を穿つて行はれたにも拘らず、結局矢張大勢を動かす事は出来なかつた。

殊に最強硬派に屬した三條實萬は土佐の山内容堂侯と一面に於て舅姑の關係があると共に、一面又關東の所置を非難する諸有志を延見して常に斥霸の論をしてゐる熱心

なる勤王主義者である外、萬里小路卿と同じく曾て其父の時代に於て竹内式部の門人と成つて居た事のある家柄であるのが、今や其實勢力遙に關白を超越するものがあつた。夫れを打算の外に置いたのが、確に幕府側の遺漏であつて、幾何陣笠公卿等を數多く買収しても、何等の功を奏しなかつた。

是等の買収軟化運動は、堀田閣老が安政五年の二月五日に自ら上洛した上、其本館を旅館本能寺に置いて、勘定奉行川路左衛門尉、目付岩瀬肥後守等の外、幕僚十數人を指揮して行はれたもので、これは林、津田の二使から形勢危急の報に接した結果、是が非でも御裁可を得なければ、既に勅許を見越して正月の五日には假條約を締結した上、來る三月の五日には調印すると云ふこと迄ハリスとの間に約束が出来て居るのであるから一大事だと云ふ所から、驚いて出て來ての事であつたが、此時彼等が朝廷其他へ公然贈遣した物だけでも實に左の通りの物があつたのである。

朝廷へ將軍よりの奉獻品

一色繪鳳凰御香爐

壹具



- 一 御伽羅 壹本
- 一 黄 金 五十枚
- 准后への獻品
- 一 羽 二重 二十疋
- 朝廷へ將軍夫人よりの奉獻品
- 一大紋綸子 三十端
- 准后へ同上
- 一 色 綸子 十端
- 九條關白、鷹司太閤へ(各通)
- 一 白 銀 壹百枚
- 一卷 物 拾卷
- 東坊城、廣橋兩傳奏へ(各通)
- 一 白 銀 五十枚

- 一卷 物 五卷
- 勾當内侍へ
- 一 白 銀 三十枚

若夫れ秘密裡に受授されたものにあつては、不明であるが、當時の風説に依ると、最初は飽迄清廉潔白を守つて強硬説を唱へ、一切關東からの贈物を拒斥して、二十ヶ年來朝廷を粗略にした幕府の處置を憤慨した九條關白も、壹萬兩を以て遂に買收せられ、其他の人々に於ては鷹司太閤は勿論、議奏傳奏久我、廣幡、庭田、千種、綾小路、大宮等の輩も、悉く收賄者の仲間であると云ふ事であつた。

然もそれ迄にして、容易にまだ條約の勅許を得る事が出来なかつたと云ふのであるから、堀田閣老等の苦衷は非常なものであつて、彼等が其二十三日に條約不裁可の御書を受取つた時の悶々の情は、今日に於ても之を想像するに餘があるのである。

話は前後するが、此の二十三日の勅答を見るまでの宮廷會議に於て、如何に黄白の潜勢力が働き、如何に強硬派が其惡勢力を排除する事に努めたかと云ふ事を此處に書



いて置くのも徒爾では無からう。

## (四十二) 破壊の快感

朝廷に於て、幕府の奏請に係る條約勅許の可否に就て公卿會議が開かれたのは、閣老堀田備中守が、參内の上傳奏を経由して條約勅許の事を奏請した二月九日から十二日、廣橋、東坊城の兩傳奏が、議奏久我建通、徳大寺公純、萬里小路正房等と共に、堀田閣老を本能寺に兩度に互つて訪問して、備中守並に川路、岩瀬の兩人と、問答を上下した最後の日即ち二月十三日から八日の後たる二月二十一日の事であつたが、此時九條關白、鷹司太閤の二人は、劈頭に當つて先づ、幕府の主張の已むを得ざる所以を説いて、此際堀田閣老の奏請通り幕府の施政を是認すべきものであるといふ事を主張した。

此の兩上官の態度が、相應に鼎沸しつゝあつた雷同派大勢順應派の強硬論を鎮靜せしめるに於て力があつたことは勿論であつて、今まで三條公等に響應して、盛に幕

府の非違を罵つて居た多數の公卿達は、關白、太閤の二高官が、幕府の措置に賛意があるを見ると、忽ち前説を忘れ去つて、浮萍の如く、見る見る間に誘はれ寄つて、大勢は既に其方に決せんとする傾きが見えた。すると、それを見て驚いたのは、三條公を中心にして固く結束して居た所謂七人組の公卿達で、此處だと言はんばかりに大原三位重徳が強く咳拂ひすると、ハツと夫れに衝動されたやうに身住居を直した三條公は、滔々と幕府一任の議を排斥して、極力幕府要路の近頃にはける専横の態度を攻撃した。彼れ等自ら言明する如くんば今や我國は精神的にも物質的にも直接外來の影響を受けて、恐ろしい變轉機動搖機に臨んで居ると云ふ。そして夫れが爲には舊來の制度も變改は止むを得ないと云つて居る。然るに條約改正と云ふやうな重大事を、豫め朝廷へも奏請せず後に成つて取定めると云ふやうな、さう云ふ専横な非條理な態度は一層許すべからざるものである、と云ふやうな事を盛に辯難して。一つには、民心協調の爲に改めて三家以下の諸藩に幕命を發して、忌憚なく其意見を披瀝せしめ、其上書を一つも隠す所なく窺覽に供へ奉る事。



二つには、假令開港の議は已むを得ないとしても、京師直近の國に外人の居住を許すと云ふ事は斷然許す可からざる事であるから、大阪兵庫の開港は幕府をして撤廢せしむべき事。

三つには、京師の防備を充分にする爲め相當大藩の兵力を以て護衛し奉るべき事を、此際幕府に命じて、是等の事が完全に遂行せられるまで、勅許を保留すべきものである、と云ふ事を極力主張した。

と忽ち強硬派の旗色は立直つた。流石の鷹司九條二卿も、此の正々堂々の論據に對しては、到底正面から之を破却することが出来ないで沈黙して居ると、其うちに一方では久我、徳大寺、中山、正親町等の諸卿が口を揃へて盛に賛成意見を述べた。忽ち大勢は強硬派の勝利に傾いて、三條公の主張は其儘勅答の内容と成つて、皇祖天照大神以來祖宗の神靈に對せられても此度の事に就ては叡慮安からず思召される。速かに是々の事を實行せられて可からう」と云ふ御命令が兩傳奏議奏の人々に依つて、本能寺に滞在する閣老備中守に達せられた。

斯う成ると、幕府は確に受身に成つた形で、堀田閣老が「老中の權威で行けば京都の清公家位歴さへつけるのは何でもない、何アに直ぐ解決をつけて歸つて來ますし、其出立間際に越前侯の松平慶永の前で放言して別れた豫期は、見事に根本から覆へされて了つた。關東では飛ぶ鳥をも土下座させる老中の權威も、勃然として新に其熟眠から覺醒した京都へ行つては一個の貧乏公家三條實萬の勢力にも如かなかつた。

堀田閣老は初めて、政權の力を物ともしない恐ろしい力の反撥を其面前に見た。それは黄金の力を以てしても、其他の如何なる力を以てしても、到底壓服することの出來ないものであつた。

皇室を中心とする民衆の自覺した運動！實際それこそは恐ろしい幕府の敵であつた。閣老等は其様な恐ろしい大敵が京都に潜んで居ようとは知らなかつたのだ。

阿部伊勢守と堀田備中守との相違は實に此處にあつた。伊勢守は其八方美人主義の爲でもあつたらうが、彼の閣老として皇室に對し奉つた態度は、確に皇室至上の觀念を有し、天子を一段の尊貴に置き奉つて、何事にも朝廷を尊崇する忠誠者の態度であ



つた。彼が外交上の重要案件を、一々宸聽に達し奉る新令を開いた事は前にも述べたが、尙彼は、家定に對する將軍宣下の勅旨を奉じて三條實萬が東下して來た時にも、極めて謙讓の態度で三條卿に對して、具さに軍費不足、國防缺陷の狀態を陳べた上、固より幕府は宸襟を安んじ奉ることを以て其本務とするものであるから、叡慮に斯くと思召さるゝ事があらば、速かに斟酌なく御下命を願ひたい、伊勢守誓つて勅旨を奉するで御座らう、と云ふ意味の事を申告してゐる、伊勢守の斯の如き態度は、傳統的の尊王主義者たる齊昭卿の感化に負ふ所が少く無かつたであらうと思はれるが、兎に角斯うした伊勢守の態度が、京都側に好感を與へたことは、言ふ迄も無い所であつた。所が、其伊勢守が物故して開國論者たる純然たる堀田内閣が出來ると、幕府は先づ尊王主義者にして攘夷主義者たる水戸齊昭侯と絶つて、之を不平黨の中心地たる京都の勢力中に投せしめた。

齊昭侯晩年の熱狂振は、公平な眼から觀ても、少々病的であり發作的である觀を免れない位であるから、幕府が之を亂心の所爲と見て顧みなかつたのは當然であるかも

知れぬが、候が頻々と激越の辭に滿ちた書柬を諸公卿に送つて、或は此際斷乎として攘夷の勅許を賜はらなければ天下大亂の基であらう、攘夷反對の聲は今や天下に滿ちて、有力な諸候は多く皆幕府の處置を非難して居ると疾呼し、或は、近時幕府の施政は事として皆國家大患の種でないものはない、我等は力を盡して幕府要路の此の惡傾向を匡正しようとしたが、彼等が頑然として應じないから、今は思早施すべき策も盡き果てた、といひ、或は「若し一朝禁闕に事があつたら、齊昭自ら諸兵を率ゐて、何人よりも先に宮闕を保護し奉るであらう」と言つた事が、少からず諸公卿の反幕府氣分を煽揚した事は勿論であつて、是等の各書柬は、之を單に斷片的に見れば、個々の意見の臚列に過ぎないが、之を同一基調から分派された意見として繋ぎ合せて見ると、其處に自づから脈絡相通する一貫した強い主張を認める事が出来るのである。幕府の親藩として、衆望を集めて居る水戸の齊昭侯すら、今度の條約締結には、猛烈な反對論を唱へてゐる、そして若しもの事があつたら、京都を援助することを辭さないと云つて居ると云ふ事！それが如何なる影響を不平家の淵藪たる京都の精神に



與へたが。

不平家の淵藪！ 當時の京都は、實に此一句で盡きて居る。何故京都が不平家の淵藪であつたかと云ふと、それは言ふ迄もなく生活難の爲であつた。

當時の公家が貧乏であると云ふ事は前にも屢々言つたが、これは京都勢力の反抗を恐れて、幕府が故意に之を貧乏の状態に陥れて置いたのである。彼等を貧乏にさへして置けば、彼等は決して幕府に宣戦して立つ事が出来ない、と斯う睨んで居たのである。成る程其考へも一應道理ある事で、如何にも最初のうちは其考へ通り、公家達は其貧乏なるが故に理由の無い壓迫に屈從してゐたが、然も彼等は其貧乏が段々徹底すれば徹底する程、鬱勃たる反抗感を段々育成された。そして彼等は其反抗感の熾盛な燃焼から受ける餘りに強い刺戟に堪へかねて、最初のうちは其猛炎を消す爲に讀書三昧に入る方法を考へたが、然も其讀書の領域が段々擴張されて、一種の文學的遊戯たる歌書から更に、古今の勢力興廢を説いた史籍、時勢を論じた著書にまで進んで行くに伴れて、今まで只詩歌管絃の柔媚な感情的世界より外知らなかつた少壯公卿の

頭腦は、活世界の凡ての事象にまで、新たな知識の眼を開いた。そして其處に彼は理由の無い不合理な被壓状態に置かれた皇室を見た。其廻りを蒼白い顔をして取巻いて居る憐れな疲弊者のグループを見た。そして夫れは幕府に依つて苦められてゐる自分等である事を明かに看取した。

尊王斥霸の論議がやがて、尊王斥霸の傾向に進むと共に、公卿階級の幕府に對する不平が勃然として起つて來たのは、實にこれが爲であつた。

不安で、そして不利益な經濟的地位、保障の無い生活！ 彼等は其處に屈辱の血汐と悲惨の淤泥に塗れた自分等の姿を、ヂツと正視して居るに堪へなかつた。そして如何すれば、此の惨めな間違つた生活を、本當の正しい生活、幸福な生活に引直す事が出来るかといふ事を考へた時に、彼等は初めて、自分達の前に聳えて居る大きな壁のやうな幕府の勢力を認めた。そして其大きな壁が絶えずヂリヂリと前へ運動して居るのを見た。それで周章して後を顧みると、直ぐもう三寸と餘さない所で大地は盡きて、千仞の谷が自分等を吞まうとして居た。



齊昭侯の應援状は、其時に飛んで來たのだつた。第一の不平の火と、第二の不平の火とは斯うして一團と成つた。

と其處へ又、別な方面から、更に不平の火が集まり寄つて來た。それは充分の知識を抱いて然も其精神的肉體的の兩方面共に満足を得ることの出來ない無産無職の人々だつた。彼等の中には、武家の二三男もあつた。藩内に於ける黨争に敗れて、不平の極出奔して來た者もあつた。或は又、農家の二三男が止み難い功名慾に驅られて知識の吸収に趨つた結果が徒らに知識だけを持つて、これを應用する財産もなければ、又雇傭されて俸給生活をする手蔓も持たない爲に不知不識不平憤悶の思想に導かれた人もあつた。彼等は才不才と無く、皆如何なる人材であつても、世襲の特権を持つて居る者か、さも無ければ或る金力を以て其特権を買ひ得るだけの富を持つて居る者でなければ、空しく草莽に伏して憂悶と悲惨との生活を送らなければ成らない幕政治下の不完全な社會状態を罵つた。そして幕政を呪ふ思想は、やがて同じく幕府の壓抑を受けて居る京都の衰勢に同情し、之と相寄つて幕府の壓力を反撥せんとする思想を作

つた。實に嘉永頃から諸國諸藩の放浪者が密々京都に入つて、盛に尊王を説き攘夷を主張した數は、少からざるものであつて、是等の高等放浪者等は幕政に對して抑へ難い不平を持つ公卿等と同氣相求めて、時に或は昂然として幕威を冒すの言を吐き、往又倒幕策を縉紳の間に上つて、悔るべからざる勢力を作つてゐた。

此の力が又、其處へ別個の勢力として加はつた上に、今度は更に京都の大勢の動きに目を着けた各藩の不平家が、在藩の儘新な運動を始め、其藩に在つては吐き得ない萬丈の氣焰を京都へ吐きに來た。

彼等は固より單なる不平家の集まりで、彼等個々の運動の間には、何等の連絡も無ければ、握手も無かつたが、然も彼等は皆尊王攘夷の旗印を掲げる事に於て、主義的に統一されて居た。

彼等は本當に皆が相寄つて、心を一にして幕府の勢力に當る事としたら、親藩たる水戸藩の力——京都公卿——諸國の浪人、これだけの集合力を以て、幕府の大きな城壁を破壊する事は何でも無いと思つたが、然も集團としての堅緻な實際的結合の方法



が無いのに悶えてゐると、其處に又、新たな勢力が、更に西方から來り加はつた。それは長州藩の後援だつた。

長州と云へば、五十萬石の大藩である。然も其五十萬石といふのは單に表高であつて、隠されたる實力の富は寧ろ加賀百萬石を凌いで居た。そして然も此の恐るべき大藩は、關ヶ原戰以來、萩に退いて表に恭順を装ひ乍ら、密かに多大の潜勢力を養うて、敢て政争にも關らず、二百有餘年來の不平と鬱憤とを霽らすべき、機會を一心に覘うて居た。

さう云ふ心持で居た長州藩が、密かに腹心の家臣を派して、或る場合には後援を辭さないといふ口吻を漏らして來たといふ事は、不平家の單なる不平運動に一種の政治的色彩を加へ確に又一種の戦争氣分を加へたものであつて、今まで單に親藩の同情的激厲の書柬に強く慰められつゝ、浪士等と相會して無責任なる放言に心を遣るに過ぎなかつた不平家の運動は、漸く實際運動の範域に入つて來た。

もう大丈夫だ、何時でも天下は自分の跡からついて來ると、彼等は思つた。

三條實萬卿は實に是等の在京運動者によつて、其中心に推された人であつて、彼等は皆敢然として敢て何者の力にも動かされない三條卿の人格を信賴して、其趨く所について行つた。そして三條卿も亦、彼等を周る者の言に能く聽いて行動した。

彼等は斯うして皆濃厚な、肉的なそして溫柔な江戸の雰圍氣には引きかへて、北歐の天地を思はせるやうな、荒涼たる氷原の上の地獄を思はせるやうな、陰慘な、そして暗鬱な、美しい花の色も、優しい匂ひも、柔かい寢床も無い寂寥の中に、灰色の呼吸をし乍ら、自分等の前に聳えて居る大きな勢力——幕府と云ふ怪物の大きな勢力を破壊した時に、初めて萬人の上に普く照り渡る太陽の赫輝たる光耀に浴し得る日を想像して、破壊の快感を夢みて居るのだつた。

### (四十三) 魔の手の誘惑

三條公の強い主張の蔭には、實にさう云ふ色々の勢力が潜んで居た。是等の秘密關係は三條公の主張を見ても、其主張が更に廷議でコンデンスされて、勅答と成つて現



れたものを見ても、極めて明かに看取することが出来る。

第一に三條公の主張の首項にある「今一度諸侯の意見を徴して之を叡覽に供へよ」と云ふ事、第二に又、同じく其三項にある「相當大藩をして宮闕の護衛に當らしめよ」と云ふ事とは、其裏面に何者かがさう云ふ機會を求め、さう云ふ任務に就かん事を求めて居る者が潜在して居る事を示すものであつた。それが何者であるかと云ふ事は、前後の關係を見ると頗るよく分るのである。次に又、三條卿主張の第二項に當る兵庫開港撤廢の議は、當時罪を得て禁錮中にあつた佐久間象山から門人の馬場と云ふ者を京都の梁川屋巖へ遣して、通商條約の事に關し愛國の至情を訴へて、どうか此事を九條關白殿下に申達して呉れと云ふ事を書いて來た書柬の中にも、兵庫の開港は斷じてお差止を願ひ度いとあるし、又、越前家即ち松平慶永の家臣中根鞆負から鷹司の家臣三國大學へ書送つた書柬の中にも他事は兎も角、帝都の近接地に外人を雜居せしめると云ふ事は、萬一の場合、禍を蕭牆の内に發する基である、と云ふ事を書いてある。即ち知るべし、三條公の主張は、實に其背後にある勢力の反映であることを。堀

田閣老が、老中の權威を以て臨んで、結局一個の貧乏公卿三條卿の主張に破られたのは、是等背後の力の動きを充分に豫知することが出来なかつたからである。是等の後背勢力中で、水戸侯の態度、長州藩の態度、浪士等の運動の事は、既に前に述べたが、其他の諸侯も内々皆盛に京都手入を遣つて居たもので、夫等の消息は、右に引いた中根鞆負から三國大學宛の手柬を見ると能く分る。右の書柬は隨つて又本問題に對する越前家の態度を知るべき有力な資料でもあるから、左に其一節を抜いて見よう。

〔前略〕宗藩に於ては、官武兩全 皇室の神威を汚さざる様幕府の根本を強固にし列侯一致私心を挾まず、内亂を未萌に消滅し、且外夷の覬覦を一拂する事、六十餘州の人物、孰れか其れ欲せざる等の至論明確、吾藩の儀と同一轍にして、間然すべき事無之候。併し乍ら來示中淵底計り難く、且辯せざるを得ざる件々は左に陳述に及び候。人心の折合、國家の重事に候ふ間、三家始め諸大名の赤心 勅問の趣き恐れ乍ら天意の御疑惑は御尤も至極に存じ奉り候へども、右疑惑の根本は、來示の

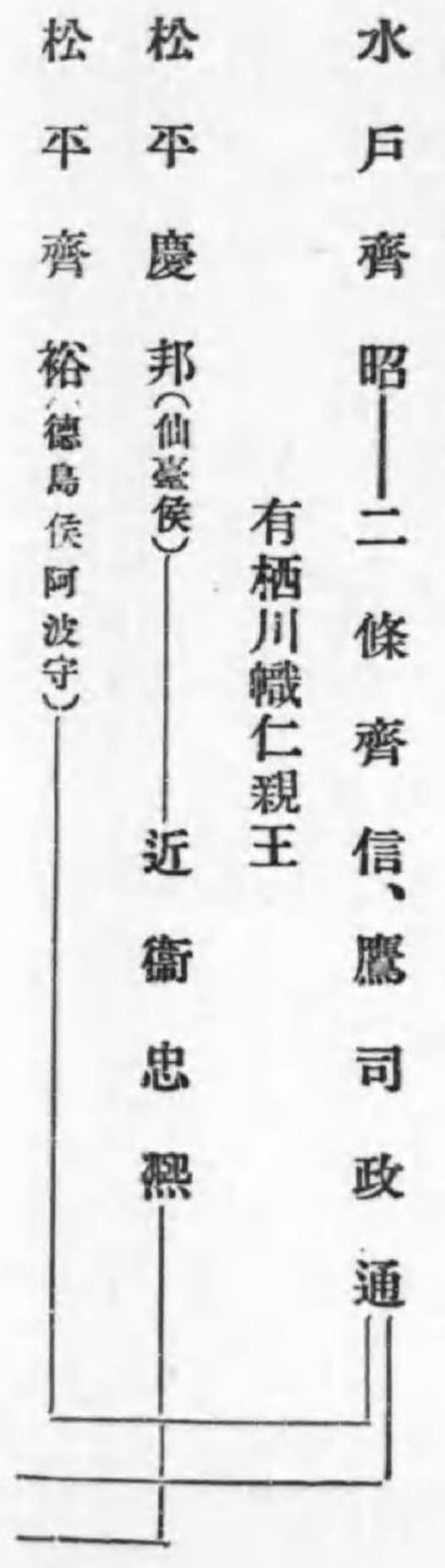


如く、宗藩大藩より所縁の縉紳衆へ、直筆の密啓有之るより起り申し候。別して阿  
候密告の如きは更に信用に及び難きも、此事若し實ならば阿侯諫諍の次第一々御糺  
問有之り、一々忠誠に出て時務に益ある事ならんには、其條御内々關東へ御心添に  
相成り、又反覆に出でて不當ならんには阿侯へ御懇諭有之、内訴の道を過絶成置か  
れ候はゞ、官武兩全の御處置に有之る可き歟、(中略) 吾藩の如きは幕府の親胃、休  
戚を一にし、身心を貳にせず、幕府を奉ずるは、天朝を奉ずる也。天朝ををいて幕  
府無く、幕府を措いて 天朝あることを覺えず、生死窮達身命を幕府に委す、征夷  
の號、將軍の職、尊王攘夷の四字に出でず、親列胃侯も此四字を奉ずるに出でず。  
之に依つて有志の列藩に於ては、萬國の形勢を察し、夷狄の情狀を明かにし、其機  
に投じ其會に乘じ、和戰宜しきに適うて遂に神州の威風を九夷八蠻に偃べ、辱く  
も日本 天皇を奉じ、四海萬國の至尊に推戴せん事を希望する權略宏圖を懷けり。  
當分の形勢にては、掛けまくも畏き事實に候へども、天皇の御元祖とあらせらるゝ  
日の大神は、遍く地球を照臨ましまし、萬國其恩頼を蒙らざる事なきに、日の大神

の 皇孫は、僅に日本一洲の至尊として、剩つさへ夷狹の睥睨を受けさせ給ふ事、  
大和魂ある者は切齒憤慨、髪上つて冠を衝くの秋に候。此時に當つて瑣々たる尺寸  
を争ひ、粟散邊土に跼蹐して死を決し國を守るは、猶溝瀆に縊るゝ愚に等し。眼孔  
濶大の志士は曾て取らざる所也。此に於て吾侯の赤誠策略は既に幕府へ呈露し、尊  
皇攘夷の大功業大勳績を賛成窮極せんことを欲せる也。(中略) 仄かに聞く、廷議紛  
紜として歸着無く、上洛の執政有司の失策亦少からず、之に仍つて遷延旬に亘り、  
區々の浮説、喋々の流言殆ど列國に充滿せり。(中略) 當時の形勢外夷は固より、列  
國も偕置、公武の内亂已に萌すに非ずや。幕府の威權は天朝に仰いで立ち、天朝の  
威風は幕府に命じて偃べしむ。幕府威を外夷に失するに似たるを怒つて其奏上を拒  
み、其宰臣を窘辱せるは、僅に其鬱憤を泄暢するに似たれども、畢竟幕府威を失ふ  
の甚だしきものにして天朝の威を隨つて墜さざるを得ず。小憤の爲に大體を誤るの  
嫌あり。云々。』  
即ち此の書柬に依つて見ると、所謂直筆の密啓は獨り水藩主ばかりでなく、他の幾



多の諸藩からも縁故を辿つて發せられたのであつて、中根軀負の意見に従へば、夫等の諸侯は「關東へ反覆を抱く歟、朝廷へ阿諛する歟の兩途を免れざる」ものであると共に、萬一是等密啓の諸侯を朝廷に於て褒美信用の思召があるやうでは「嫌疑蕭牆の内に入り、東西中四の諸侯四分八裂の基」であると云ふのであるが、然も其四分八裂は、最早一越藩の力を以てして到底支ふ可からざる自然の勢ひであつて、此時既に凋衰に傾きつゝあつた幕威は、最早其四分八裂を制する實力が無いばかりでなく、實は却つて四分八裂を促す原因だつた事を知らねば成らぬ。我輩は諸侯の密啓が如何なる方面から如何なる方面に送られたかと云ふ事を暗示する爲に、諸侯と京紳との婚姻關係を茲に明かにして置かう。



松平 豐 信(土佐守高知侯)——三條 實 萬  
 松平 齊 恭(加賀宰相、金澤侯)——鷹 司 輔 熙  
 松平 齊 彬(薩摩守、鹿兒島侯)

是等諸公卿と姻戚關係のある諸藩中、其藩内に於て最も強烈なる尊王攘夷論が新勢力者の間に行はれて、保守派と慘憺たる黨争を開始して居たものに水戸藩、薩摩藩、土佐藩があり、之を外にしては長州の毛利、熊本の細川等は、同じく兩黨の競争頗る激しい藩であつた。然も此間注意すべき事實は、尊王藩必ずしも攘夷藩で無かつた事であつて、普通に王室派と呼ばれる列藩の間にも、自づから劃然として別れてゐる二大潮流があつたのである。此の傾向は後に至つて攘夷派即ち討幕派と成るに及んで、一層明瞭な派別を見たのであつて、尊王攘夷派、尊王佐幕派の二つが即ちこれである。乃ち此の區別に隨ふと、薩長二藩の如きも、最初の出発點に於ては、一は純粹なる尊王討幕的傾向を執つて直進して居たに反して、他の一は寧ろ尊王佐幕の傾向を持つて居た事が認められる。後に至つて薩長が常に軋轢を反覆し、明治大正の今日に至つ



ても、尙其餘蘖を存して、事毎に争鬭する風があるのは、實に此の最初の出發點を異にして居るからである。知る可し、薩摩の島津と長州の毛利とは、畢竟最初から同一點を相重なつて通過した線では無く、別個の點から別個の點へ進んだ二個の相列んだ平行線に過ぎないのであつて、此の條約論が紛々として居た時の薩藩主は寧ろ開國説を採つて遙に北越の福井藩と肝膽相照の關係にあつたのである。

是等諸藩の藩士が、此の時に當つて密かに京都へ出入した者の數は、實に算へ難い程であつたが、其外彼の尊攘黨の四天王と云はれる池田大學、梅田源次郎、梁川星巖、賴三樹三郎の如きも、此以前早く既に縉紳の間に遊説して、抜く可からざる尊攘黨の勢力を培うて居た。

これ等の諸勢力が、盛に活動して、朝議を攘夷に傾けた事が幕府側に知れると、幕府側の運動は俄に又激烈を加へて來た。殆ど奏請拒斥に等しい勅答を直接に受けた堀田閣老が、其部下の川路、岩瀬等と必死に成つて東奔西走、形勢の挽回に努めた事は云ふ迄も無い所で、殆ど諸公卿の間を戸別訪問に等しい方法で、表裏に互つて盛に運

動したが、彼等が運動すればする程、尊攘派の方でも之が對抗運動を遣つて、しまひには互に他の地盤の猛烈な切崩しまで始め出した。

今日のやうに新聞と云ふものが當時は無かつたから、其一張一弛の狀態がよく分らないが、元來公卿と云ふものは大體に於て定見が無く、宇内の大勢に暗いものが多かつたから、斯う成ると、昨日強硬説を唱へて居た者も幕府側の魔藥が廻ると、今日は俄然として軟論側に與し、今日軟派の骨頂と言はれた人が、又、尊攘派から熱烈な宣傳を聞かされると、卒然として硬論派に變ずると云ふ風で、九條、鷹司二卿の如きは、諸勢力の複雑な運動の爲に、實に幾度び其態度を變更したか知れなかつたのである。だから、

「公家衆は一旦は何れも強硬であるが、堀田閣老に會うと、それが直ぐグニヤグニヤに成つて了ふ。あゝ云ふ人達の強硬と云ふ事は畢竟陰辨慶で、少し強く出れば、どちらへも、靡いて了ふし、又少し藥を利かせればどうにでも成る」

と、云ふ幕府側當時の觀察は、決して見込違ひでは無かつたのであるが、彼等は自派



に與し易い公家衆が、又敵派にも與し易い事を忘れて居た所に計算の遺漏があつた。幕府側は最初鷹司卿が關白の現職にこそ居ないが、内覽の宣旨も受けて居て、宮廷第一の勢力家であるし、全體が保守主義の人である事を充分知つてゐたので、此人さへ味方に附けて置けば、事は易々と運ぶであらうと云ふ見込で最初に之を買収した上、更に三條卿の過激論が少壯公卿を動かして形勢の惡變して來たのを見ると、今度は關白の職に在り乍ら強く攘夷を主張してゐる近衛忠熙卿を決戦間に射落して、これで大丈夫勝利は此方のものだと思つてゐると、豈圖らんや内大臣三條卿の主張が廷議の容れる所と成つて二十三日の勅答と成つた。

乃で、これは不可ないと見て取つた堀田閣老等は、早速其事を幕府の留守師團へ報告して置いて、三月五日に松平(伊賀)、久世、脇阪三老中の連署で、

「民心協調の事に就て御宸念あらせられるのは誠に御尤もの事であるが、其儀に就ては幕府に御一任有之りたい、誓つて叡慮を安んじ奉るであらう」

と、云ふ意味の奉答書が來ると、急いでそれを傳奏衆に提供するや否や、遽然として

對戰準備に着手して、曩に自派に買収して置いた傳奏東坊城を仲介に、盛に又諸方に黃白を飛ばして激烈な買収運動を開始したのであつたが、是等幕府側の運動が、益益激烈と成るに随つて、漸次其方法が露骨に成つた爲め、收賄者に對する宮廷内外の攻撃は、一時に高く成つた。此時既に世間では、

「太閤殿下は、關東から随分お貰やしたさうとすエ、近衛はんかて然うや。何でも一萬兩のお墨附と云ふのが天降つたんやさうや。一萬兩と云ふたら、途方も無い大きいもんやさかいな。何でも井伊掃頭さんの御家來衆の長野主膳たら言ふお侍が、九條さんの公家侍の島田左近を手に入れて彼是した爲に、それで九條さんが急に關東方にお成りやしたんやさうな。まアお聞きやす。あの偉い騒ぎが禁裏御所であつて、三條はんや皆の忠義組が、目の色變へて關東の所作を怒つておいでやす最中に、どうとす呆れたもんやおへんか。氣樂さうに親子の衆で馬を六疋牽かせて、河原御殿で遊山あそびや。なア、それで九條はんの胸も知れてるがナ」

と云ふやうな道聽塗説が、いつと無く天聽に達して九條鷹司兩卿に對する陛下の



御信用は地を拂うて空しく成り、殊に鷹司太閤に對しては、二月二十八日を以て辭職の御内命まであつたと云ふ有様で、東坊城の如きは、既に官職褫奪の嚴命を受けんとする形勢に進んで居た上に、一方では陛下の最も御信任あらせられる青蓮院宮尊融法親王を初め、内大臣三條實萬、大納言久我建通等硬派の幹部所は、益々結束を固くして、幕府側の切崩し運動に對抗した。

然も此時に於て幕府側に、井伊派の新勢力が加はつて、京紳間に相當の交遊關係を有し、且多少歌道の心得がある所から一部の公卿間に師弟の特殊關係を持つて居る長野主膳が、其代表者として辛辣な運動を開始したのは頗る注意すべき事實であつて、彼が主家井伊家と九條家との特別縁故關係を利用して、先づ九條卿を軟派に引入れた上、更に系統を追うて懐柔の手を擧げて行つた有様は、實に目覺ましいばかりであつた。井伊が此の主膳を京都に送つて、斯の如き行動を爲さしめたのは、表面自己の推薦した堀内備中を幫助して、其内閣を支持せんとするにあつたに違ひないが、彼が早くより九條家と結んで、今又更に京都に鋤犁を入れたと云ふことは、彼の野心の尋常

ならざるを示すものであつて、同時に又井伊の勢力が、漸く臺閣の上に表現されて來た證左を見るものであつた。

兎もあれ長野主膳の運動は、深く敵地に入つて直ちに其大將を生擒すると云ふ驚くべき筆法から初まつて、其魔手の及ぶ所、實に端倪すべからざるものがあつたから、之に對する尊攘派の恐慌は随分大きいものであつたが、此時、恰も三月五日に至つて關東からの返牒が廷議に上つた。

尊攘派の諸公卿が、其返牒の文面と云ふのを見ると、實に臣子として用ふべからざる暴慢無禮の言辭を以て滿たされたもので、斯の如き無禮の答書を彼等に差出させて置いて默認してゐるといふ事は、確に無上の朝威を墮すものである、と云ふ考へかゝり、三條卿自ら主動者と成つて、中山大納言忠能、正親町三條中納言實愛、八條三位隆祐、中院宰相右中將通家、橋本宰相實麗、野々宮左中將定功等の有志諸卿と聯盟して、大に廷議を動かさんが爲に一片の建白書を提出した。

然し此時既に被買收派の公卿は、長野主膳の活動に依つて、日々刻々に其數を増し



居たので、彼等は鷹司太閤、九條關白二公を中心、危然たる多數集團の力を以て、少數正義派を壓迫せんとし、先づ自派の手に第二の勅答書草案を作つて、之を公卿會議に提出し、頭数を以て遮二無二通過せしめんことを策して居た。正義派勝つか、被買收派勝つか。斯くして兩派の競争が刻々と險惡の形勢を呈すれば呈する程大勢の趨向は彌々豫め揣摩すべからざるものと成つた。

#### (四十四) 深夜の秘密

險惡な氣流！ 其頃の京都は實に險惡な氣流が、會て見た事も無い恐ろしい渦を帯いて、人心を不安の中に漂はせて居る京都であつた。

世間では皆、九條關白邸が、其氣流の中心だと云ふやうな事を頻に噂して居た。重大な廷議には何の關する所も無い地下の卑官や町人等までが、九條邸の門前を通る時は、眼引き袖引きして通つた。中には酔つた紛れに、

「どうぞす、いつも晩に此處の御門前を通る時は、道が暗うて蹴躓いたもんやが、此

頃は御裕福な爲か、お灯が増えて、御門前が明う成つた。一萬兩の光は偉いもんやなア。」

と、諷刺るやうに言つて通る者もあつた。

それをお長屋の窓で聞いて居て、獨心を痛めたのは諸大夫の宇合大舍人頭であつた。「あゝ自分の主人と頼む關白の卿はどうしてあんな情ないお心に成られたのだらう。

今日も又、三條家に居る伯父の森寺因州から身を捨て、も此際關白をお諫め申せ、公も宇合はまだ諫を入れぬかと仰せられた。と云ふ手紙を内々で寄來したが、此頃のやうに、彼の諂ひ者の島田左近ばかりをお近けに成つて、諸大夫の自分を、宛然無い者扱ひに成されてゐる有様では、テンでお聽入れもあるまい。然しさうぢやと云つて、引込んで黙つて居たのでは、叔父にも濟まぬ。此の宇合を見込んで大事を御談合に成つた三條公にも濟まぬ、延いて天朝に對しても相濟まぬ。叔父が身を捨ててと言ふて遣したのは此處の事ぢや。よし、今夜と云ふ今夜は、お咎めを被つて命を召される迄も、國家の爲に主君を御直諫申さう」



と、彼は左思右考、共諫争の筋道を色々に考へたが、竟に最後の決心をすると、急いで身装を改めて、主公の御前へ出た。

次の間まで行つてお側取次の者に、「急々お目に罹りたい事があるから」と言はせると、暫らくして此方へ通れと云ふ口上が傳へられた。

宇合が入つて行くと、關白は恰度何人かと酒宴中であつたらしく、不興氣な顔でデロリと此方を睨み附けるやうに見て

「何ぢや、急用と言ふのは何ぢや。外用なら會はぬのぢやが、急々の事ぢやと言うで呼入れたのぢや」

と荒々しい聲で聞いたが、宇合は、涙ぐんだ眼で主人の顔を見上げると

「恐れ乍ら、今まで曾て御九獻を召された事もない上が、此頃は日酒夜酒の御有様でいらせられますのを拜見するのは、何とやら不思議な心持が致しまする」

と先づ第一矢を其酒といふ目標に射て放つた。すると九條公は、軽く夫れを笑に紛らして

「ハ、ハ、宇合が何の急用を申しに參つたのかと思ふたら、酒の諫言か。磨ぢやとて飲みたく成れば酒も飲まうし、乗りたく成れば、馬にも乗らうわ。下様の言ふ野暮とやらの事を申すな、どうぢや其方も一獻受けぬか」

と言ふのを、以ての外なといふ顔で、宇合は遮つて

「イヤ、憚り乍ら其様の苦い物を一滴も戴かうとは存じませぬ。上には下様の者が上の事を何と申上げて居るか御存じでござりませぬか。今までは禁裏の爲を專一にお圖りに成つた殿下が、此頃は關東の奴隸と成つて、禁裏方に裏切を遊ばされたと、誰一人上を惡し様に申さぬ者もござりませぬ。私はそれを聞く度毎に只もう熱鐵を飲まされたやうな心地が致しまする。どうぞ此の私めが一生のお願でござりまする。是非に御心を改められて、従前の上に御復り下されませ。此の願ひ聞届けられますれば、假令私の一命を召されましても露厭ひませぬ。」

と昂然として言つた顔には、何様侵し難い決死の色が現はれて居た。

九條公は、其諫言を聞いてる中から、酒の氣がさせる癪癢に驅られて、頼顯の所を